東方恋愛伝

ターメリック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは現実世界にいた少年が突然幻想世界に迷い込みそこで出会った吸血鬼の少女に恋をする恋物語である

目次

少年の日常 1
学校生活 7
家族との別れ 13
博麗の巫女 19
己の力の目覚め 24
平穏な世界 29
紅霧異変 34
瀟洒な従者 38
偉大な魔法使い 43
その出会いは運命？ 48
激突、最終決戦 56
約束 61
計画 68
散歩 72
誤解 78
禁断の行動 84
隠された本当の力 89
処刑場 92
闇の中 99
和解 107
冬の出来事 112
本格的に異変は動き出す 117
半人半霊の剣士 123
異変は終結へ 129
修行 134

幼馴染 138
積もる話 145
夜更けのリベンジマッチ 151
特訓開始 158
流鬼哉の実践練習 167
治療 176
妖夢にも春 186
久しぶりの日常 193
友のために 200
再び実践練習 206
再び揃う三銃士 217
解放される能力 227
鬼現る 240
無限の可能性 249
人の下剋上 264
二日酔いトリオ 270

少年の日常

俺の名前は叢雨翔哉（むらさめしょうや）周りのみんなからは叢とか呼ばれている。勉強はあまり得意ではないが、運動神経は学校一と謳われる高校生だ。学校の行事には積極的に取り組み、みんなをまとめる役としてクラス全体の信頼度も高かった。

俺の通っている学校は部活動が盛んで様々な部活が毎年全国大会に出場するほど全国でも有名なのだが俺は部活に入らなかった。

それに対して友達からは、

「なぁ、叢はなんでそんなにスポーツ出来るのに部活入らないんだ？」

「えー、だって面倒じゃん。休みの日とかは遊べないしさ、それに彼女ができた時に部活ばっかでなかなか会えなくなるじゃんか」

「なるほどな、お前はすぐに彼女出来そうだもんな」

「まぁ、それは無いけどな」

「「あははは‼？」」

とまぁこんな感じで毎日楽しく過ごしている。

いつものように仲良しグループの仲間と一緒に帰っていた俺はいつもの場所で仲間と別れた。

「じゃーなー！」

「またあしたー！」

「あれ、忘れんなよ？」

「わかってるってー」

それからいつものように人気のない裏路地を抜けて家に向かった。

「彼女出来るって言ってたけどそう簡単には出来ねぇよなぁ」

そんなことを言ってるうちに家に着いた。

「ただいま～」

「おかえり、ご飯出来てるよ」

母さんがご飯の準備をしていた

「今日はいいや、あんまりお腹空いてないから」
「あらそう、あんまり無理しちゃダメよ？体壊しちゃうからね」

母さんはいつも俺の心配をしてくれる。とても優しい母さんだ。

「ただいま～」

父さんが帰ってきた。

「おかえり、父さん」
「翔哉、最近学校での評価がいいみたいだな。その調子で頑張れよ」
「ありがとう父さん、俺もっと頑張るよ」

父さんはＩＴ企業の社長でいつも忙しそうだ。でも家族のことは大切にしてくれて

いる。褒めるところは褒めて悪いところは悪いとはっきり言ってくれるとても尊敬出来る父さんである。

「ふぅ、疲れた。もう寝るか」

部屋に戻った俺はベッドに横になりゆっくりと重い瞼を閉じた。

目が覚めると外は明るくなりつつあった。時計を見ると朝の5時ごろだった。

「さてといつものあれ、やるか」

そう言って寝間着から運動服に着替えて部屋を出た。ちょうど父さんも家を出る時間だったので玄関で顔を合わせた。

「父さん、おはよう」

「おはよう翔哉、いつも起きるの早いな。いい心がけだな。それじゃ行ってくるよ」

「いってらっしゃい」

父さんは仕事へ行った。俺も靴を履いて家を出た。
俺の朝の日課はランニングだ。やはり若い時から体力は必要だと思い小さい頃からずっと続けている。それのおかげもあり運動神経がいいのだ。
しばらく走り少しずつ高くなる太陽を見て、

「走り始めてからそろそろ一時間経つな」

家に向かって走る。
やはり朝のランニングは気持ちいいものだ。綺麗な空気を吸って走れる喜びを俺は感じていた。
家に着くと母さんが朝食を作っていた。
時間を見ると六時半過ぎだった。

「さてシャワーを浴びて準備しなくちゃ」

シャワーを浴び、部屋に戻って制服に着替えリビングへ下りた。

「おはよう翔哉」
「母さんおはよう」
「ご飯冷めないうちに食べちゃってね、後お弁当作ってあるから忘れないでね」
「わかったよ」

しっかり味わいながら朝食を終え、家を出る。

「母さん、行ってくるよ」
「気をつけてね」
「うん」

俺はガレージに行きバイクに乗って学校へ向かうのだった。

学校生活

いつものようにバイクで学校に通う俺。
いつも通り朝1番に学校に来て教室の黒板を綺麗にしたり、花瓶の水を入れ替えたりしている。

「うん、やっぱり教室は綺麗じゃないとな」
「あれ?叢雨君おはよう」
「あ、おはよう」

今挨拶をしてきた女の子は俺と同じクラスの舞ちゃんだ。
舞ちゃんは頭も良くて運動も出来るし、生徒会長もやっているとても優秀な子だ。それに加えツヤツヤの綺麗な黒髪にパッチリ目、顔の整った学校一の美人生徒会長なのだ。

「叢雨君っていつも朝早いよね」

「言われてみればそうだね」

時刻は7時半を回ったところ、この時間学校に来るのは俺くらいだな。

「でも今日は舞ちゃんも早いね」
「今日はやることがあって早く来たの」
「忙しいもんね」
「うん、それじゃまた後でね」

手を振りながら舞ちゃんは生徒会室へ向かった。
それにしてもあんなにかわいい子と仲良くなれるなんて思わなかったよ。
何て考えてると続々とクラスメイトが登校して来た。
「叢、おはよう」
「おはよう」
「昨日のテレビ見た？すげー面白いのやってたぜ‼？」
「マジか‼？それ見てねぇや、うわーもったいないことした～」
「俺が後で話してやるよ」

キーンコーンカーンコーン

授業のチャイムが鳴った。

「ほら、早く席に着け～」

先生が教室に入ってきて声をかけるとみんな一斉に席に戻った。

授業が始まる。まだ始まって5分も経ってないのに机に伏せている友達がたくさんいた。

全く、授業中は昼寝の時間じゃないのによ。

それでも授業は進み1限が終わった。

其の後も授業が続き3限まで終わった。

4限の授業は体育だった。

「よし！今日の体育はバスケだぜ！やったね！」

「ほら、そんなことばっか言ってないでさっさと着替えろよ」

「わかってるって～」

体育の授業はバスケで４チームに分かれて総当たりをすると先生は言った。

女子もバスケをしていたが待ってる女子はみんな男子のバスケを見ていた。

注目されるのは俺とバスケ部の部長の一対一だ。

俺はドリブルで切り込みチェンジオブペースを使いディフェンスを３人抜きすると部長が俺のマークについた。

「ここでお前を止めて俺らが勝つ！」

「よし、いいだろう！」

フェイクを混ぜたドライブで抜こうとするが抜けない。さすがはバスケ部の部長だぜ。

残りは数秒しかなかった。これしかないと思いゴールしたまで切り込んでついて来たところをロールでかわしダンクを決めたところでタイムアップ、見事ブザービートを決めて勝つことができた。

女子からは歓声が上がり体育の授業は大盛り上がりになった。

「お前やっぱりすげぇな‼?」
「ダンクするとか高校生かよ」

何ていろいろ言われたが全て笑ってその場を収めた。
昼食の時間・・・・

「すげーダンクだったな、さすがは叢だよ」
「日々トレーニングは欠かさないからな。運動に関しては負けたくはないんだわ」
「うわー渋い‼?」
「あはははは‼?」

全ての授業が終わり放課後になった。

「あー疲れたー帰ろうぜ」
「ねー一緒に帰ろー」

いろんなところから帰宅の声が聞こえた。

「よし、俺も帰るか」
「お、叢も帰るのか？気をつけて帰れよー」
「おう、じゃーな！」

帰りは寄り道することもなく家まで真っ直ぐ帰宅した。

「ただいまー」
「おかえり、ご飯出来てるわよ」

いつものように家族で夕飯を済ませ風呂に入り就寝した。

家族との別れ

眠りについた俺はこの時人生において最も大変なことがこの後起こるとも知らずにいた・・・・

次の日、いつも通り学校に行った俺。

家には珍しく風邪を引いて寝込んでいる父さん、父さんを看病する母さんが2人でいた。

俺は妙な胸騒ぎを感じた。嫌なことが起こらなければいいが・・・・

事件が起きたのは俺が学校にいる昼食の時間だった。

先生に呼び出され話を聞かされた。

「叢雲、実は…お前の家が火事になっていると近隣の方から連絡があったんだ」

「え…」

その時俺の思考が停止した。
すぐに止まった思考は動き出したが唯一考えれるのは家族のことだけ、それを思い出し先生に問いかけた。

「先生‼?父さんと母さんは無事なんですよね⁉?大丈夫ですよね⁉?」
「……」
「答えてくださいよ‼?」
「お前の家が火事になっていること以外情報はまだ入ってないんだ…」
「‼?」

聞いた瞬間涙が溢れてきた。
なんで‥‥なんでだよ‥‥なんで父さんと母さんを失っちまうのかよ‥‥まだ……なにも親孝行をしてもいないのに‥‥
そして俺は学校を飛び出し急いで家へと向かう。

バイクを飛ばして１０分ほどで家に着いた。

「嘘だろ…」

先生の言ったとおり家は火事になり、消防車と警察車両が数台きていた。
駆け寄ると警察官に止められた。

「君‼?‥危ないから離れていなさい」
「どけよ‼?‥父さんと母さんはどこにいるんだよ‼?‥」

俺はしばらく警察官ともみ合いになった。
懸命の消火活動が行われるが火は弱まる気配もなかった。
火事から2時間ほど経った頃に火は鎮火したが家は全焼、残骸だけがそこに残されている。
消防士が瓦礫の中を探している。
俺はそれを見守ることしか出来なかった‥‥
瓦礫の中を探している消防士の1人が声をあげた。

「身元不明の遺体が2体見つかりました‼?‥」

「すぐに運び出すんだ!!?」

まさか、本当に父さんと母さんを失ってしまうなんて・・・・

遺体の身元は俺の両親であることが分かった。

「なんでこうなるんだよ!!?俺は!!?俺はこれからどうしたらいいんだ!!?」

ボロボロと大粒の涙が流れ地面を濡らした。

「うわぁあああああん!!?」

泣き崩れている俺のところに1人の女性が現れた。

その女性は見たこともないドレスを着て傘を差し口元を隠すように扇子を広げていた。

突然のことに涙は止まり動揺を隠せず後退りをした。

「だ、だ、誰だ!!?どこから現れた!!?」

「あなた、ここの家の子ね。残念ね。両親が亡くなってしまって」
「くっ‼?」

俺は睨んだ、とても鋭い目で。

「そんなに警戒しなくてもいいわよ、あなたに危害を加える気はないから」
「そんなこと言っても無駄だぞ‼? 知らないやつがそんなこと言ったって信憑性が全くない‼?」
「はぁ、あなたは自分の立場がわかってないようね」
「なんだと⁉?」
「あなたに帰る場所はもうない。これは事実、だから私があなたを連れて行くのよ」
「名前も名乗らずにそんなことを言うのか」
「名乗るわよ。私は八雲紫、妖怪よ」
「なっ⁉?まず妖怪なんているわけないだろ、それに事実だとしても妖怪になんかついて行くわけないだろ‼?」
「…仕方ないわね、無理矢理でも連れて行くしかないのかしらね」

八雲紫は何をしたのか分からないが一瞬で俺の目の前まで移動してきた。
「あなたを連れて行くわ。幻想郷へ」
「お、俺は行かねぇぞ‼?」
八雲紫は指を動かしていたが俺には何をしているのか理解出来なかった。
「それじゃ、行くわよ」
勢い良く押された俺は後ろに転がる様にして穴のようなものに落ちていった。
「うわぁああ‼?」
体がうまく動かせずなにも出来ずに落ちる感覚だけが体を支配した。
そして俺は意識を失ってしまった。

博麗の巫女

どれくらいの時間が経ったんだろう。今までのことは夢だったのかな？

「うっ・・・・」

意識が戻り、ゆっくり目を開く。

あれ、俺ってどうなったんだっけ、確か紫ってやつが・・・!!

今までのことを思い出し勢い良く起き上がった。そしてあたりを見回した。

まず目に入ったのは鳥居だった。そして本殿が奥にあるのを確認した。

「ここは・・・神社か、なんで神社に倒れてたんだろう」

よく見ると鳥居には神社の名前が書いてあった。

「博麗・・・神社？」

とりあえず本殿の方に行ってみよう。
ゆっくりと本殿の方に歩いていく。

「随分古い神社だな、なんだか歴史を感じるな」

すると後ろから声がした。

「参拝客なんて珍しいわね」
「うわっ!!?びっくりした～。いつからそこに?」

後ろを振り返る。
立っていたのは紅と白の巫女服を着た少女だ。右手にはお祓い棒を持っている。

「私はあんたが本殿の前まで来た時からずっとここにいたわよ」
「そうか、ところで君は誰だい?」
「私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女をやってるわ」

「随分若いな、まだ子供だろ？」
「失礼ね、人を見た目で判断しないでもらえる？」
「悪い悪い」
「それより、あんたも名前を名乗りなさいよ」
「あぁ、忘れてた。俺は叢雲翔哉、身体能力だったら誰にも負けるきしないね、お嬢ちゃんにもね」
「へぇ、大層な自信ね」
「やってみるか？」
「じゃあ遠慮なくやらせてもらうわ」

俺は攻撃がいつ来てもいいように身構える。
直感が働く。攻撃が来る‼？
予想通り札での攻撃が来た。
俺は攻撃を見極めながら最低限の動きで札をよける。

「並の人間じゃなさそうね」
「俺を甘く見過ぎだろ」

にしてもどうやってあの紙切れを高速で飛ばしてるんだろ。

「これならどう?」

霊力で作った無数の弾幕を飛ばして来る。

これをよけた時に死角が出来た瞬間札の攻撃がくるな。

またまた直感が働き自然に体が動く。

また予想した通りになった。しかし予測をしていたため、バク転をして札をよける。

「なぜ当たらないの?今のは死角からの攻撃よ。普通なら当たってるのに」

「うーん、勘かな?」

「・・・はぁ」

俺がそう言うと彼女はため息をついた。

「どうする?まだやるか?」

「もういいわ、やめよ、やめ」

霊夢は神社のなかへ入って行ってしまった。

「なんだ?急にどっか行っちゃったよ。それにしてもなんで攻撃が来るって直感が働いたんだろう・・・」

「それはあなたの能力じゃないかしら?」

現れたのは八雲紫だった。

俺は八雲紫をじっと睨みつける。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない」

「あんたが悪いんじゃねぇか、勝手にわけのわからないところへ連れて来やがって」

「急に幻想郷へ連れて来たことは謝るわ。ごめんなさい」

「謝ってくれるならいいけど」

その後紫からこっちの世界、幻想郷での過ごし方などを聞くことになる。

己の力の目覚め

俺は唖然としていた。

なぜか、それは能力のことを聞かされたからだ。

「あなたには特殊な力があるようね」

「特殊な力？それって超能力とかの一種か？」

「超能力とは違うわね。これはこっちの世界の一部のものが持っている能力よ。私は境界を操る能力、さっきやり合ってた霊夢は空を飛ぶ能力よ」

境界を操る？空を飛ぶ？訳のわからないことを言うなぁ。頭がゴチャゴチャしてきたよ。

「でもそういう能力は全部架空のものだろ？」

「いえ、ちゃんと使えるわよ。こういう風にね」

紫は実演するために後ろに出来た割れ目のようなものに入って行った。

あれ？どこ行ったんだ？

「後ろをみなさい」

振り返ると紫が立っていた。

え？なにそれ、チート？なんて思った。

「これで信じてもらえたかしら？」

「まぁとりあえず、あんたが実際見せてくれたから信じる。でもさっき言ってた俺の能力ってなに？」

「さっきの戦いで無意識に使ってたわよ？」

「使ってたって？まさか、そんな冗談を言わないでよ」

「あなたさっき直感で戦ってたわよね？」

直感？あぁ、霊夢って子の攻撃が来るってわかったやつか。

「人の直感は戦った数で決まるわ。あなたは小さい頃から運動に長けてたらしいわね。あなたの直感はそのおかげもあるのかしらね」

俺は知らない間にいろんな経験値が溜まっていてそれが直感の鋭さになってるってことか？

「てことは、俺の能力ってまさか…」

「そう、あなたの能力は直感を使う程度の能力よ。」

程度の能力？程度のところに疑問を抱いた。そして疑問をそのまま問いただした。

「程度ってことはそんなにしょぼい能力なのか？」

「そんなことはないわ。十分優秀な能力よ。私たちは能力のことを〇〇程度の能力と呼んでいるの。だから決して弱いなんてことはないわ」

「ふーん、なら問題ないな」

「それとあなたにはここに住んでもらうわ」

「ここって…幻想郷に⁉？」

「そうよ。ちゃんとサポートもするから大丈夫よ」

おいおいマジかよ。知らないところに住むって正気か？結構まずいと思った。

「とりあえず博麗神社に住んでもらうわ。霊夢～ちょっと来て」
「なによ紫」

むすっとした顔をしながら霊夢が出てきた。

「彼、今日からここに住むことになったから仲良くしてね」
「はぁ⁉？なにいきなりそんな流れになってるのよ⁉？」
「だって彼にも異変解決頼むんだからいいじゃない」
「ちょっと待て、なにその物騒なやつ。異変・・・解決だっけ？それをするなんて一言も言ってねえよ」
「じゃああなたはずっと1人でこの見知らぬ幻想郷を生き抜くの？」
「くっ…わかったよ。異変解決やってやるよ」
「はぁ、仕方ないわね、まぁ一緒に修行もできるからいいか」
「とりあえずスペルカードルールの説明からね」
「スペルカードルール？」

「そうよ。ここでは弾幕ごっこで異変を解決するのよ」

少女説明中‥‥

「‥‥というわけよ。わかった？」
「ようは通常弾幕とスペルカードってのを使って異変解決しろってことね。わかった」
「あとはさっきいったように特訓をしてスペルカードを作るのよ」
「それじゃあがんばってね」

かくして俺の幻想郷での生活が始まるのだった。

平穏な世界

全く、どうなってんだよ。まさか、霊夢と同じ部屋でしかも布団ひとつだけとか初めての体験だわ。

時を遡り昨日の夜、

「さぁ寝るわよ」

「寝るの早くないか？」

「いつも通りよ、ほらついて来て」

「わかった」

「ここよ」

連れて行かれたのは霊夢の部屋だ。さすが女の子ってだけあってとても綺麗に掃除されている。

「同じ部屋で寝るの⁉？」

「当たり前でしょ？他に部屋無いんだから」

「まぁそれは仕方ない。あと布団ってそれだけ？」

「そうよ。1人で住んでるから2枚もいらないもの」

「そうか、じゃあ寝るか」
　俺は床に座り壁に寄りかかるようにして寝ることにしたが、
「なにやってるのよ、早くこっち来なさい」
「え？」
「そ、そこじゃ風邪引いちゃうでしょ？だから布団に入っていいわよ」
　顔を真っ赤にして言う霊夢。
「いいんだな？」
「う、うん」
　そして布団に入った。
　幻想郷っていいな。こんなことできるなんて思わなかった。女の子との添い寝とか夢でしかやったことなかったから最高だ。
「へ、変なことしないでよね？」
「大丈夫、しないよ」
　いや、それにしても心臓ドキドキして寝れねぇ。
　夜は初体験をしてしまい気持ちが高ぶってほとんど寝れなかったのだ。
　そして今に至る。
　俺は神社の仕事をやることになった。

境内の掃き掃除、本堂の雑巾がけなど様々なものだ。
「掃除はちゃんとやれって母さんによく言われてやってたなぁ」
「ちゃんとやってるかしら？」
「やってるよ」
「じゃあそれ終わったら次は修行するから本堂の前に来てね」
「はいよ」
ちゃっちゃと終わらせて本堂の前に向かう。
「早く終わったわね」
「掃除なんて集中してやればどうってことないさ」
「じゃあやりましょう」
「修行ってなにするの？」
「なにって実践訓練よ」
「弾の作り方も全て経験でやれってことか？」
「そういうことよ」
まず霊夢が弾幕を作り飛ばしてくる。
弾をみてすぐに、
「なるほどな」

直感を使い弾の動きを読み避ける。
「よけてばかりじゃ修行にならないわよ?」
「わかってるよ」
意識を弾幕を作ることに集中させると周りに弾幕を張ることが出来た。
よし、とりあえずはオッケーだな。
弾幕を霊夢にめがけて飛ばす。
「そんなんじゃ私には当たらないわよ?」
「まだ当てなくてもいいんだよ」
直感で霊夢がどう動くかを感じて、弾幕を作る。そして拡散させるように飛ばす。
最初にまっすぐ来た弾幕を左に避ける霊夢。
「そんなので当たるわけ…」
その時霊夢は気付いた。よけた先に弾幕が固まっているのを。
しまった、これは罠だったのね、油断したわ。
そのまま霊夢は被弾した。
「スペル、誘導ショットガンリモート」
悔しそうな表情をする霊夢に対し俺はまんべんの笑みを浮かべる。
「まさかあんな簡単に被弾するなんて」

「今回は俺の勝ちだな」
「翔哉君もだいぶ慣れて来たんじゃないかしら？」
「紫か、見てたんだ」
「ええ、なかなかいいスペルカードね、でもひとつだけでは話にならないわ。異変が起きる前に少しでも増やすことよ、いい？」
「わかった」
こうして一日が終わって行く。
弾幕ごっこって楽しいな、なんて思いながら新しいスペルを考える翔哉だった。

紅霧異変

紫が言ってた異変っていったいどんな感じなんだろう。
「まぁ異変が起こる時は前兆があるはずだ。気長に待つとしよう」
「しょーや、こんなところでなにやってるの？」
「あぁ、霊夢か。いやちょっと異変ってどんな感じかなーって考えてたんだ」
「簡単に言えば楽ではないわね。異変を起こすってことは実力は折り紙つきよ」
「ふーん」
「とりあえず大変なのは覚悟してたけど死ぬとかないよな？」
「弾幕ごっこだから死ぬことはないわ、でも相手の出方にもよるわ」
「……マジ？」
「えぇ」
「最悪や…こんな若さで死にたくねぇよ…」
「なに言ってるのよ全く、そんな弱音吐いちゃダメよ」
「わかってる。ちゃんと約束したからにはやり通すよ」
場所は変わりここは幻想郷の湖畔のすぐ近く、ここに奇妙な紅い館が突然現れたそう

だ。一説によると強大な魔法によって土地ごとこの幻想郷に来たと噂されている。
　この館の中では…
「幻想郷こそ我が約束の地、人よ妖怪よお前たちの運命は我が手の中にある。この力にひれ伏すがいい！」
　この言葉の後幻想郷は紅い霧に覆われた。
　時はほんの少し遡り霧の出るちょっと前の博麗神社では、
「なぁ霊夢、お前どうやって空飛んでるの？」
「うーん感覚じゃないかしら？」
「テキトーだなぁ」
「別に空を飛べなくても問題ないわよ」
「それもそうか」
「今日はやけに嫌な予感がするわね」
　霊夢の予想は的中、幻想郷は紅い霧に包まれた。
「な、なんだ⁉？急に空が紅くなったぞ‼？」
「これは霧ね、確かこの前近くの湖畔のすぐ近くに館が現れたってブン屋が言ってたわね。多分そこかも、行きましょ」
「お、おう」

こうして俺と霊夢は湖畔のすぐ近くにある館へ向かった。
タッタッタッ
ひたすら館へ向かって走る俺、その横には飛んで向かう霊夢。
「はぁ、はぁ、はぁ」
「結構息切れしてるわね」
「はぁ、はぁ、近いって、言ってたじゃ、ねぇか！かれこれ２０分は全速力で走ってるよ！」
「目の前に湖畔が見えて来てるわよ」
「あれか」
目の前には大きな湖が広がっている。そしてそのさらに向こう、湖畔の反対側に紅い館がうっすらと見える。
「これ空飛べないから反対側まで行くの大変だぞおい」
「仕方ないわね、これでいいでしょ？」
霊夢が札を使って湖の上に真っ直ぐ道を作って渡れるようにしてくれた。
「サンキュー霊夢」
止めていた足を再び動かし館へ向かって走り出す。
湖を渡り切り館を見る。

「近くで見るとでけぇな～、しかも門番までいるぜ」
「さぁ行きましょ、門番がいるってことはかなり厳重な警備がされてるってことね」
「まぁここはがっつり正面突破といこうじゃないか‼?」
「そうね」
ザッ‼?
門前の門番は既に構えている。戦闘準備は万全らしいな。
「ここは私がやるわ」
「博麗の巫女が相手ですね、さぁいつでもいいですよ」
「じゃあ遠慮なくやらせてもらうわ」
すぐに霊撃を使う。
「え?」
勝負は呆気なく終わった。
「さぁ次行くわよ」
「流石霊夢だな」
と感心しながら館の中へ入って行くのだった。

瀟洒な従者

一面見る限り紅い館、この建物は紅魔館と呼ばれているらしい。霊夢が門番を倒す前に門番の妖怪が言っていた。

それにしても一面真っ赤だな。ずっと見てると目がおかしくなりそうだよ。

「随分広い館なのね、困ったわ」

「こんな時は俺の出番だな、うーんこっちだ」

「あんたの直感が頼りになりそうね」

「使えなかったらどうしようもないよな」

話をしながら進んでいると広いところに出た。

「なんだここ、ロビーか？」

「ようこそ博麗の巫女とただの人間さん」

「あんた人間？」

「その通りよ、私は十六夜咲夜、この館のメイド長です」

「俺は叢雲翔哉、悪いがそこ通してもらえないか？首謀者がこの先にいるんだ」

「おかしなことを言うのね。私がここにいるのはあなた達をもてなすことよ」

「じゃあ仕方ない強行突破と行こうじゃないか。霊夢は先に行け、ここは俺がやる」
「博麗の巫女じゃないのね、これじゃあすぐに終わっちゃいそうだわ」
「余裕こいてると痛い目見るぞ、霊夢早く行け‼？真っ直ぐ行って二つ目の角を左に曲がってそのまま行けば行けるはずだ‼？」
「わかったわ、あんたも頑張りなさいよね」
「行けると思ってるのかしら？」
「霊夢、一歩後退‼？」
「え？」
　咄嗟に一歩後退すると目の前を一本のナイフが通った。
「危なかった～、ありがとしょーや」
「俺も終わったらすぐ行くからな」
「ええ」
「どうやらただの人間ではなさそうね、博麗の巫女とやれないのは残念だけどあなたをここで仕留めるわ」
「まぁ、そう言うのは攻撃を当ててから言ってください」
「くっ、生意気な‼？」
　咲夜が攻撃を仕掛ける。

飛んでくるナイフの攻撃を体を半身にしてよけてから右右左の順番で躱す
直感を使い攻撃を綺麗に避ける。
「なに⁉?」
「あっはっはっは、簡単に避けられる攻撃だなぁ。これなら絶対霊夢の方が強いよ」
「これなら⁉?」
直感が一瞬で避けるための答えを導き出す。
時が止まり目の前にナイフが来る、それは全て俺に狙ってるが空いてるところはひとつ上⁉?
カチッ⁉?次の瞬間時が止まり全てが止まった。
「こんな…こんな人間に私の能力が負けるわけない⁉?これで終わりにする⁉?」
翔哉の直感通りの配置にナイフが来る。空いてるのは真上だ。
「この能力を使えばあなたはなにもわからずに死ねる、解除⁉?」
来た来た⁉?時が動き始めた途端に真上に飛び上がる。
俺を狙っていたナイフはそのまま床に激突し煙が上がった。
「私の勝ちね。少し本気だしちゃったけど勝ったからいいわ」
「あれが本気とは驚いたよ」
「⁉?」

振り返った途端腹に激痛が走る。
「うっ‼?」
その場に膝をつく咲夜。
目の前にはさっき倒したと思っていた翔哉が立っていた。
「あなたいったいどうやってあの攻撃をよけたの?」
「簡単さ、真上に飛んだだけだよ」
「なぜ真上が空いているとわかった⁉?」
「俺の能力さ、直感を使う程度の能力。俺は全ての戦闘において直感で戦っている。考えて戦うのは心に余裕がなくなるからな」
「まだあなたは私に勝ってない‼?」
手に持ったナイフで切りかかって来る。
すかさず足でナイフを蹴り飛ばす。ナイフは弧を描くようにして床に刺さった。
「直感通り、あんたの敗因は攻撃の後の油断だ」
「っ‼?」
そのまま俯く咲夜、
「…先へ行きなさい。私の負けよ…」
その頬からは雫がひとつ流れ落ちた。

お嬢様、申し訳ありません…

心の中で謝る咲夜。

戦いを終え俺は次の場所へ向かうのだった。

偉大な魔法使い

瀟洒なメイドの咲夜を倒した翔哉、外傷は全くないが疲労は確実に蓄積されていた。
「意外と能力使いながら戦うのはきついな。さっきのメイド長さんとやった時にかなり体力を消耗しちまったよ」
歩いていると大きな扉の前に来た。
ここか？能力使ってないから道がわからないんだよな…、とりあえず入ってみよう。
大きな扉を開ける。低い音を立てながら開く扉をくぐって最初に目に飛び込んで来たのは部屋一面に広がる本の数々。しかも本棚の高さは翔哉の背丈を遥かに超える高さでびっしり本が並んでいた。
「うわーすごい本の数だな。これを全部読むのにどれくらいかかるのやら、てかどうやってこんな綺麗に本を管理してるんだ？」
手にとってみるととても綺麗に使われているのがわかる。そしてたくさんあってまともに読み切れないはずなのに埃を全くかぶっていなかった。
中を見るとよくわからないものがずらっと書かれていた。
「なんだこれ、全然わからねぇ!!？」

「それは普通の人間には読めないわ。それにしてもあなたは魔法に興味があるの？」
「俺は頭が悪いからな。魔法みたいに複雑なのは出来ないんだ。憧れはあるけどね。これって魔法の本なの？」
「そうよ。で、ここに人間がいるのはおかしいわね、どこから入ったのかしら？」
「ちゃんと入り口から入って来たよ、異変解決をしにね」
「そうなの、じゃあやるしかないわよね」
「その前にあんたの名前は？」
「私はパチュリー・ノーレッジよ。この図書館の管理人ってとこね」
「なるほど、この館を魔法でここに転移させたのはあんたなのか」
「あらなかなか勘が鋭いわね」
「まぁ能力ですから」
　まだなにもしかけて来る様子はなさそうだな。
　一瞬油断した瞬間を魔法で攻撃された。
　得体の知れないものが俺の真下の床から無数出来て鋭い柱となって現れた。
　咄嗟に体が動き避けようとするが身体中に掠り被弾した。
「しまった‼？」
「あら簡単に当たっちゃうなんてやっぱり人間は鈍いわね」

「くっ‼?舐めるなよ‼?」
直感を働かせスペルを発動する。
「誘導ショットガンリモート」
弾幕の拡散弾を放ち、拡散弾より速い弾幕をひとつ飛ばす。
「あら、スペル使えるのね、じゃあこっちもしようかしら火符アグニシャイン」
対抗するようにスペルを発動させるパチュリー、互いの弾幕がぶつかり合い、煙が巻き起こる。
煙の中からひとつの弾幕が飛び出す。正体はショットガンリモートの速い弾幕だった。
パチュリーはそれをフワリと避ける。避けた先にはショットガンリモートで作った拡散弾の塊があった。
パチュリーはそのまま拡散弾の塊に接触して被弾した。
被弾した時にパチュリーのスペルが消えた。
「しまった、まさかあんな弾幕を作るなんて、不規則で全然読めないわ」
「パチュリーの動きはわかりやすいな、余裕を持って避ける癖があるからなおわかりやすい」
「ならばこれで行くわ‼?日符ロイヤルフレア‼?」

パチュリーは高火力で広範囲のスペルを使い逃げ道をなくそうという作戦に出た。
「くっ」
俺は避けるのに必死だった。
ただでさえ前の戦いでかなりの疲労が溜まっている中で能力をフルに使い攻撃が来る場所を直感で当てながらギリギリで避けているのだ。
「逃げてばかりじゃ勝てないわよ‼?」
「くっそー」
実は俺は反撃したいが出来ないでいた。
スペルを作ろうと努力していたがどれもうまくいかないまま異変が起きてしまい使えるスペルはさっき使ったショットガンリモートだけなのだ。
パチュリーは勝負をかけに来たのかスペルを詠唱する声に力が入る。
「ゴホッゴホッ」
突然の喘息によりスペルは停止、空中にいたパチュリーは重力に従うように落下して来た。
「危ない‼?」
直感を感じた俺は咄嗟にパチュリーが落ちてくる真下に走り込んだ。そしてギリギリでパチュリーを受け止めた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」
「大丈夫か？パチュリー」
　するとそこにパチュリーの従者である小悪魔が現れた。
「どうしたんですかパチュリー様‼？」
「小悪魔ね、実はこの人との戦いの途中に喘息が来ちゃって…」
「パチュリーは喘息持ちだったのか？」
「そうなんです。パチュリー様は生まれつき喘息を持っていまして、たくさんのスペルを唱えたりひとつのスペルを長時間唱えることが出来ないのです」
「それでさっき喘息になったのか」
「戦いはあなたの勝ちね。途中で喘息を起こしちゃったらもうどうしようもないわ」
「とりあえずベッドに横になってた方がいい。すぐに連れて行こう」
「こちらです」
　小悪魔に案内されパチュリーをベッドに横にした。
　しばらくしてパチュリーが眠りについた。小悪魔がしっかり側についているので静かに俺は図書館を後にした。

その出会いは運命?

保存日時：２０１４年１２月０６日（土）　１０：１９

俺は今紅魔館内を彷徨っていた。

なぜ能力を使わないか、それは戦いのせいですよ。

流石に能力フル活用したまんま連戦したらそうなるよな。

今疲労がピークに達していて能力もまともに発動出来ない。こんな状態で相手に出会ったら確実にまけるよ。

フラフラ歩いていると地下へ通じる階段の前に来た。

「この館は地下まであるのか?全く広すぎて困るよ」

ゆっくりと階段を降りて行く。

「霊夢の方は大丈夫かなぁ」

時を少々遡り霊夢の方はというと、

「もはや隠す気ない感じね」

薔薇の装飾をされた大きな扉の前にいた。

「それにしても翔哉の直感ってものすごい頼りになるのね」

ギギギギギ、ゆっくりと扉を開ける。

ロビーよりも広い部屋に入る。部屋も一面紅く染まっていて所々に薔薇の装飾がされている。天井には大きなシャンデリアが吊るされていて辺りを薄っすらと照らしている。

その部屋の奥、玉座に少女が1人霊夢を待ち構えるようにして座っていた。

「よく来たわね博麗の巫女、案外早かったわね。褒めてあげるわ」

「全然嬉しくないわね、それよりもこの紅い霧迷惑だからやめてもらえないかしら」

「やめる気は無いわ」

「だったら力ずくでもやめさせるわ‼?」

札とお祓い棒を手に構える霊夢。一方レミリアはふわりと空中に舞い上がる。

「楽しませてくれるのかしら?」

「さっさと終わらせるわ‼?」

今2人が激突するのだった。

とある部屋の前、階段を降りてきたところにある一室の前に俺はいる。まだ能力は使えないため正直はいるのが怖い。

俺は恐怖を抑えてドアノブに手をかけ扉を開けた。
ガチャ。
ゆっくり中を覗くと綺麗に掃除された一面真紅の一室が目に入ってきた。
「なんだこの部屋、子供部屋か?」
部屋に入ってみたが誰もいないようだ。
うーん特になにもなさそうだな。
「あなた誰?」
「俺か?俺は……」
そこで言葉が途切れた。冷や汗が出てくる。
あれ?この部屋って誰もいなかったよな?俺は誰と話してるんだ?
恐る恐る後ろを見ると幼い少女が立っていた。
「!!!?」
え⁉?いつからそこにいたの⁉?
言いたかったが声に出せない。
すると少女が近づいてきて、
「ねぇ、汗たくさん出てるけど大丈夫?」
「あ、あぁ」

少女の呼びかけに応じる。
今度はこっちから質問をした。
「俺は叢雲翔哉。君の名前は？」
「私はフランだよ。フランドール・スカーレット」
「フランって言うのか。いい名前だね」
フランをよく見ると背中から不思議な形の羽が生えてる。七色に輝くクリスタルのついた綺麗な羽だ。
「ねえ、君は妖怪なのかい？」
「正確には吸血鬼よ。ほら」
そう言って鋭く伸びる犬歯を見せてくれた。
それにしても大人しい子だな。この館にいるってことはこの子もやっぱり敵なのかなぁ。
真実を確かめるために問いかける。
「ねぇフラン、この館の主はなんでこの異変を起こしたんだ？」
「え？なんのこと？」
どうゆうことだ？同じ館に住んでいてこの子だけ知らないなんて。
「今起きてること知らないの？」

「フラン知らないよ、だって私は４９５年間１度もここから出たことがないの」
「ということはフランは完全に蚊帳の外ってことか」
「ねぇしょーや、あなた外の世界を知ってるんでしょ?」
「あぁ、そうだね」
「どんな感じなの?」
「そうだな、簡単に言えば楽しいことがたくさんある世界だな。みんな仲良くていつも笑ってる」
「そうなんだ。フランもお外へ行ってみたいな」
「フランは出たことないんだもんな」
「ねぇしょーや、あなたにお願いがあるの聞いてくれる?
「俺の出来ることならなんでもいいよ」
「フランを外に連れて行って欲しいの、しょーやのお話聞いたら楽しそうだなって思って」
「外に行きたいのか?それくらいだったらいくらでも連れて行ってあげるよ」
「ありがとう」
　少し顔を赤くして礼を言うフラン。
「あ、あぁ」

フランの笑顔はすごいかわいかった。
なんてかわいいんだろう。こんないい子と仲良くなれるなんてなぁ、能力も使えない時に出会えるってもしかしたらこの出会いは運命なんじゃないか？
俺はフランに恋をしてしまった。
「な、なぁフラン外に行くのはちょっと待って欲しいんだけどいいか？」
「なんで？」
「ここに来たのは異変解決をするためなんだ。異変解決したら外のいろんなところへ連れて行ってあげる」
「わかった、絶対ね？」
「約束する」
指切りをする。ふたつの指が絡み約束を誓うのだった。
「よし、そろそろ行かないと」
「待って‼？」
不意に手を握られドキッとする。
「どうしたんだ？」
「一緒に行ってもいい？」
「構わないよ」

こうして2人でレミリアのところへ向かうことになった。
やっと能力が使えるまで体力が回復したため能力を使いレミリアのところへ急いだ。
目の前には大きな扉が迫っていた。
「あそこだな」
ガシャーン、勢い良く扉を開ける。
すると中で戦っていた2人がこちらに気づく。
「しょーや遅いわよ‼?どこをほっつき歩いてたの‼?ちょっと苦戦してるんだから早く加勢してよ‼?」
「すまん、ちょっと2連戦したりしてたら遅くなっちまった」
レミリアがフランに気づいた。
「フラン⁉?なんでそこにいるの?部屋で待っていなさいと言ってあるでしょ?」
「お姉様、私外に出るわ‼?今までお姉様の言うことだけ聞いていればいいと思ってたけどしょーやに出会って考えが変わったの‼?しょーやと一緒に外に行くの‼?」
「そんなの私が許すわけないでしょ‼?部屋に戻りなさい‼?」
「ひっ…」
軽く泣きそうなフランを撫でる。
「しょー…や?」

「待ってろ、お前の姉さん倒して連れて行ってやるから、ちゃんと約束しただろ？」
「うん」
「さぁ、ケリをつけようじゃないか」
「人間のくせに生意気よ‼？」
殺気を剥き出しにするレミリアを前に、
「霊夢さっさと終わらせようぜ、お前もお賽銭かかってるんだし」
「もちろんよ！」
互いの準備は万端、紅霧異変最終決戦が再び始まる。

激突、最終決戦

まず動いたのはしょーや、沢山の弾幕を拡散させるように放つ。レミリアは弾幕と弾幕の間を縫うようにして避ける。しょーやの飛ばした弾幕は壁に当たり反射するようにして再びレミリアに襲いかかる。

「なかなか面白い弾幕ね」

「スペルカード、反射ハイリフレクション。この弾幕は跳ね返れば跳ね返るほど弾幕のスピードは加速する。もちろん弾同士でぶつかっても同じ」

「ちょっと厄介ね～、これでいくわ。スペルカード、紅符スカーレットシュート」

レミリアのスペルによってしょーやの弾幕がかき消される。

「新しいスペルカードなんだけど火力不足か」

レミリアの弾幕を避けながら言う。

「そうでもないわよ、結構考えて作られてると思うわ」

「敵でも褒められるってのは嬉しいね」

すると霊夢から、

「なんで敵に褒められて嬉しそうにするのよ」

「いいじゃないか、最高の戦いなんだから」
「さっさとやるって言ってたじゃない、ちゃんと真面目にやりなさいよ」
「これでも真面目だよ」
「あらあらそんなギクシャク状態で大丈夫かしら？」
「心配される筋合いはないわ。スペルカード、夢符封魔陣！」
札による弾幕がレミリアに向かって放たれる。
「これしきどうってことないわ」
「俺もいるんだぜ？スペルカード、誘導ショットガンリモート」
「ふふふ、その程度では私に当たらないわよ？」
真上に避けるレミリア。
「いいのか？そっちに避けて」
「え？」
避けた先、上からは弾幕の雨が降り注ぐ。
「まさか、さっきの私を狙った弾幕は…」
「そうさ、あれは罠だ。あんたの避け方によって当たるか当たらないか決まる。まぁこれを避けれたやつはまだみたことないんだよな～」
「くっ！」

弾幕の雨を浴びるレミリア、そのレミリアに追撃しようとする霊夢、
「しょーや1人に集中しすぎたようね」
霊夢の周りには無数の陰陽玉が浮いている。
「しょーや、時間稼ぎありがとう」
「まぁ正直本気で倒しにかかったけど無理だったし、後頼むわ」
「えぇ、もちろんよ！スペルカード、霊符夢想封印!!?」
「まだよ!!?スペルカード、獄符千本の針の山!!?」
さらに密度の高い弾幕を飛ばしてくるレミリア、しかし霊夢には当たらない、正確には体をすり抜けているのだ。
「なんで当たらないの!!?」
「それは私の空を飛ぶ程度の能力で私自身をこの世界から浮かせているからよ、これで終わりよ!!?」
七色の光に包まれるレミリア、ついに最終決戦に終止符が打たれた。
「さぁ、私が勝ったからこの紅い霧を消してもらうわよ」
「わかってるわ」
レミリアが手を動かすと霧が晴れていく。
「さて、異変も解決したし後はフランを…」

辺りを見回すと部屋の隅で小さくなっているフランを見つけた。
どうやらレミリアに怒られて落ち込んでいたようだ。
俺はフランのところへ歩み寄る。
「フラン、終わったよ」
「しょーや、お姉様に勝ったの？」
「あぁ、もちろんだ。ちゃんと約束しただろ？必ず勝つって」
するとフランは立ち上がりレミリアのところへ歩いて行った。
「お姉様…」
「フラン、なにも言わなくてもいいわ」
そう言ってフランを抱きしめるレミリア。
やっぱり姉妹は仲良くあるべきだよな。
「フラン、あなたには長い間悪いことをしたわ。ごめんなさい」
「ううん、いいのお姉様、お姉様のお陰で私変われたんだ。しょーやに出会って、外の話を聞かせてもらって、今までなかったことが起きたんだもの。だから謝らなくてもいいよ」
「ありがとう、フラン」
「姉妹も仲直りしたし俺らはそろそろいくよ」

「そうね、あまり長居するのもいけないからね」
「わかったわまた時間があったら紅魔館へ遊びに来てね、今度はちゃんとしたおもてなしするから」
「わかった、必ず来るよ」
「しょーや、絶対にまた来てね」
「次に来る時は約束のために来るからな、ちょっとだけ待っててな」
　フランの頭に手を乗せて撫でる。
「うん!!?」
　こうして紅霧異変は霊夢達の活躍により無事解決、スカーレット姉妹も仲直りして異変は幕を閉じた。

約束

紅霧異変が終わってから早くも3日が経っていた。
俺は出かける準備をしていた。
「よし、行くか」
「あら？しょーやどこか行くの？」
「あぁ、紅魔館へ行って来るよ」
「なるほど、約束の件でしょ？気をつけてね」
霊夢はすぐに内容を察したようだ。
そう、俺はこれから紅魔館へ出かける。理由はフランとの約束のためである。
博麗神社をでて異変の時と同じ道を歩いていく。それにしても博麗神社から紅魔館まで遠いよな。
しばらく歩いていると黒いものが飛んできた。それは目の前に降りて、消えると中から少女が現れた。
「人間だ!!？ねぇ、あなたは食べてもいい人間？」
「おいおい、いきなり物騒な質問をして来るんじゃないよ、それにかわいく質問して来て

もそれの答えはダメだ」
「そーなのかー?」
　この妖怪はルーミアと言うらしい。見た目とは裏腹に人食い妖怪だと霊夢から聞いている。
「あのさ、君がさっきまとってた黒い球体はなに?」
「あれは闇なのだー。私は闇を操る程度の能力なのだー」さっきの黒い球体はどうやらこの子が作っていたものらしい。
　とりあえず急いでるのでさっさと行こう。
「待つのだー。先に行きたかったら私を倒してから行くのだー!」
「仕方ない。じゃあ先に一回被弾した方の負けでいい?」
「いいのだー」
「じゃあやるか」
「さっさと倒して食べるのだー」
「食う気満々かよ」
「行くのだー!」
「あ!あそこに誰かいるぞ!」
　指を指す。

「なんなのだー？」
指を指した方向を見るルーミア、完全に油断してるよ。
ルーミアが指を指した方向に気を取られてる隙に弾幕を飛ばす。
「なにもないの…」
ルーミアが喋りながら振り返るその瞬間に弾幕が直撃した。
「あ、当たった」
「あー‼？ずるいのだー‼？」
「まさか、簡単に引っかかるとは」
「むー、約束だから仕方ないのだー。次はこうは行かないのだー！」
ルーミアはふよふよと去って行った。
時間食っちまったな。急がないとな。
走って紅魔館へ向かう。
湖畔まで来たところでまた誰か来た。
「そこの人間！あたいと勝負しろ！」
「また元気なのが来たな。だがあいにく今は急いでるんだ。邪魔しないでくれ」
「え？そうなの？急いでるんなら仕方ないね。あたいはチルノ、次に会った時はこうはいかないよ！」

「弾幕ごっこは今度な」
　チルノは潔く帰って行った。
　あの氷の妖精、意外ともの分かりいいな。霊夢の話と少し違うがまぁいいだろう。止まっていた足を動かし紅魔館の前まで来た。
「どうもしょーやさん。異変の時は名を名乗ってなかったので名乗らせてもらいますね。私は門番の紅美鈴です。話は伺っております。どうぞ中へお入りください」
「あぁ、ありがとうございます」
　すんなりと通してもらえた。中へ入ると咲夜さんが待っていた。
「どうも、異変の時はお世話になりました」
「ようこそ、妹様から話は聞いておりますのでこちらへどうぞ」
　咲夜さんに案内してもらってフランのところへ連れて行ってもらった。
「それにしてもあなたの能力って有能ですね」
「そうですか？俺は咲夜さんの時を止める能力の方がいいと思いますけどね」
「でも戦った結果はあなたの勝ち、能力を使う場面などはあなたの方が上だったみたいですね」
「異変の時はずっと能力使ってましたよ、ただパチュリーとやった後は体力がほとんどなくて使えませんでしたけど」

「慣れればどうってことはないですよ、自然と使えるようになるはずです」
話をしてるうちに部屋の前に辿り着く。
「こちらに妹様がいらっしゃりますのでごゆっくりどうぞ」
「いろいろとありがとうございます」
案内が終わったので咲夜さんは他のところへ行った。
なんかドキドキするなぁ。
ドキドキする気持ちを少し抑えノックをした。
コンコン、
「はーい」
「フラン俺だよ」
ガチャ、扉が開きフランが顔を出した。
「しょーやだ‼?」
「約束通りちゃんと会いに来たよ」
「さぁさぁお部屋に入って」
手を惹かれながら部屋に入っていく。
フランが先にソファーに座り俺はその横に座った。
「ねぇしょーや、もう少ししたらお姉様が来るからなにか話してようよ」

「いいよ、そうだな～フランはどんな景色がみてたいんだ？」
「そうだねー、綺麗な景色がみたいな」
「綺麗な景色ね、じゃあ行ってみたいところは？」
「紅白の巫女さんのところ～」
「霊夢のところね、分かったよ」
「ふふふ、楽しみね」
「そうだな」
　コンコン
「フラン入るわよ？」
「あ、お姉様だ、入っていいよ」
　ガチャ、レミリアが部屋に来た。
「待ってたよレミリア、異変ぶりだな」
「そうね、それにしてもまさか人間のあなたに負けるなんて思わなかったわ」
「まぁ、霊夢もいたのもあるよ」
「そうね、それじゃあ本題に入りましょうか」
「その前にいいか？」
「どうしたの？」

「仮の話だがもしフランが誰かと付き合うことになったらレミリアはどうする？」
「え⁉？」
「やっぱり止めるのか？」
「…」
　レミリアは悩み始めた。
　それもそうだよな、深刻な話には変わりないんだからな。
「そうね、フランの気持ちをしっかり尊重するわ。フランが好きになった人なら拒む必要ないし、私が口を出す必要なんてないもの」
「なるほどな」
　心の中ではとても安心した。
「じゃあ話を戻そうか」
　そうしてフランと約束をしたことについて話が始まった。

計画

　ある一室、２人の吸血鬼と１人の人間が話をしている。
　その内容は…
「まず、吸血鬼について話すわ。吸血鬼には弱点があるの、まず一つは日の光、二つ目は流れ水、この二つよ」
「なるほど、基本昼間にフランとみて回る時は日の光に当たらないようにしてればいいんだな」
「その通りよ、そのためには日傘をさして歩いてもらうわ」
「日傘ね、でも俺傘持ってないぞ？」
「それは問題ないわ、こちらで用意するから」
「じゃあ大丈夫だな、フラン計画完成したぞ～」
　すると暇そうにしていたフランがすかさず反応を見せる。
「本当!!？」
「あぁ、本当だぜ」
「やったー!!？しょーやとお出かけ♪しょーやとお出かけ♪」

まんべんの笑みを浮かべて喜んでいる。なんと言うか無邪気だな。
「さてと、話もまとまったし早速行くか‼?」
「うん‼?」
「こらこら待ちなさい、あなた達今何時だと思ってるの?」
「へ?」
近くの時計に目をやると時間は夜の7時を回っていた。博麗神社だったらいつもはもうご飯食べ終わって寝る準備してる頃だ。
「あちゃー、やっちまった。俺が来るのが遅かったか…」
フランが横に座って、
「しょーや、そんな落ち込まないで。今日はゆっくりしていって明日出かけようよ」
フランに慰められる俺、
「そうだな…ん?今なんて言った?」
「え?だから今日はゆっくりしていっていいよって言ったの」
「つ、つまり、お、俺は今日こ、紅魔館に泊まって行く、のか?」
理解が追いつかず喋る言葉は噛み噛みになっていたが、俺は気づいてなかった。
「なんでそんなに慌ててるの?」
「いや、だって流石にそれはまずいでしょう、第一部屋の準備とか大変だしさ、な?レミ

リア」
「咲夜ー」
「お呼びですかお嬢様」
するとどこからともなく咲夜さんが現れた。
え⁉？どっから入って来た？てかなんで瞬間移動できるの⁉？
戸惑っている間にも話はどんどん進んでいく。
「しょーやのためのベッドを空き部屋に用意して頂戴」
「かしこまりました」
咲夜さんはスッといなくなった。
「えっと、泊りは決まってるの？」
「当たり前でしょ？」
「ええー⁉？」
まさか泊りをすることになるとは、これはドキドキして眠れないってのが目に見えてるんだが…、でもせっかく用意してもらえるならいいかな？
「じゃあお言葉に甘えて泊まらせてもらうよ」
「フランしょーやと一緒に寝るー⁉？」
「ブシューー、げほげほ⁉？」

やべいきなりすぎて吹いちゃったよ。
「大丈夫⁉？」
フランがすぐに顔を拭いてくれた。
「あ、あぁ大丈夫だよ」
なんか夜が怖いな。
直感が働き危険信号を悟った。
その夜…俺は食事を済ませ部屋にいた。
「はぁ～こんなんで明日大丈夫かなぁ。すごく心配になってきたんだけど…」
心配しすぎかなぁ。いつも通り話せばいいよな。
さて寝ようっと。
ベッドに横になり目を閉じる。
深夜…ぐっすり眠っている翔哉の部屋に誰か入って来た。

散歩

朝、日が昇る少し前。時刻としては朝の4時ごろかな。

ゆっくり目を開けるのはしょーやだ。

「ふぁ～あ、寝るの遅かったから眠てぇ…、とりあえずいつも通りの時間だな」

ボケーっとしたまま布団をめくりベッドから降りようと手を出したとき、なんかに手が当たった。

「なんだろう。随分柔らかいなぁ、それにすごく暖かいし」

ムニュ、ムニュ。

「んっ、くすぐったいよぉ」

「⁉?」

俺は気づいた。いつの間にかフランが俺のベッドに寝ていた。

なんと⁉?俺が寝ぼけて触っていたのがフランだったなんて⁉?てゆうかなんで俺のベッドにフランがいるの⁉?いや、落ち着け俺、とりあえず起こさないようにベッドから出よう。

フランを起こさないようにゆっくりベッドから出た。そのまま布団をかけてから着

替え始める。
「とりあえずランニング行ってこようかな」
　みんなを起こさないように素早く紅魔館を出る。
「清々しい朝だ。さて弾幕ごっこで疲れないようにするために体力つけなくちゃな」
　湖畔の周りを走り始めた。
　とりあえず湖畔を5周したが足取りは軽快、息ひとつ切れていない。
「この湖畔って意外と大きいのに全然疲れねぇな、まぁ時間も全然あることだしもっと走ろう」
　軽快に走っていると前から2人の妖精が飛んできた。
「あ、昨日の急いでたお兄さんだ」
「君は確かチルノちゃんだったね、おはよう」
「うん、おはよう」
「ねぇチルノちゃん、この人誰？」
「この人はね～、えっと、うんと、あ、名前まだ聞いてないんだった…」
「そういえばそうだったな、俺は叢雲翔哉だ。2人ともよろしくな、それとそっちの子は？」
「この子は大ちゃんだよ」

「初めまして大妖精と言います。呼び方はチルノちゃんみたいな感じで大丈夫です」
「礼儀正しいね。それにしてもこんな朝早くになにやってるんだ？」
「カエル凍らせてた」
　この子はカエルでも集めてるのか？
　変な考えが頭をよぎる。
「ねぇそれよりも弾幕ごっこしようよ」
「あぁ昨日出来なかったからな、いいよやってあげるよ」
「チルノちゃんこの人強そうだよ」
「大丈夫、あたいの方が強いから」
「随分自信満々だな、まぁいい。勝負はいっかい被弾したら終わりだ。いいか？」
「あたい強いからすぐ終わっちゃいそーだね」
　じゃあ全力でいくか。
「スペル発動、誘導ショットガンリモート改」
　ショットガンのように高速で拡散しながら飛ぶ弾幕がチルノめがけて飛んでいく。
見えないように後ろから決め球をタイミングが合うようにゆっくり飛ばす。
「そんなスペルじゃ最強のあたいに勝てないよ？」
「それはどうかな」

改良したショットガンリモート改は不規則な動きをする。
「え？なにこの動き…」
チルノは避けてすぐに言った。弾幕が見たこともない動きをしているからだ。
不規則な動きをする弾幕に気を取られている隙にチルノに決め球の弾幕が直撃する。
「しまった!!？」
「よし当たった」
「あんた強いね、あたいあんな弾幕見たことないよ!!？」
「まぁまだまだこれからさ、それじゃそろそろ行くかな。またなチルノちゃんと大ちゃん」
「またしようね!!？」
「お気をつけて」
それにしてもなかなか良い動きをしたな。これはいざ異変が起きてもいけそうだ。
新しいスペルに満足して紅魔館へ戻る。時間は6時と言ったところか？まだ誰も起きていないようだ。
部屋に戻るとまだぐっすりとフランが寝ていた。
「かわいい寝顔」
自然と笑顔にさせられほどのかわいさだ。

起こさないようにソファーに座りフランが目を覚ますのを待った。
1時間ほど経ち、フランが目を覚ました。
「うぅーん、よく寝た～」
「お、やっと起きたな」
「おはよう…⁉？しょーや、なんでフランの部屋にいるの⁉？」
「それはこっちが聞きたいよ」
すかさずツッコミを入れる。するとフランが、
「あ、もしかして昨日寝ぼけて部屋間違えちゃったのかも」
「まぁいいさ、風邪引いてなければね」
「うん、大丈夫だよ」
「もう少し布団の中にいようかな」
「フランも～」
2人で布団に潜り込む。
しばらくしてから咲夜さんが部屋に来た。
「しょーやさん、朝食の用意が……‼？」
バタン！
勢い良く扉を閉めた咲夜さん。

「いったいどうしたんだろう」
「もしかしたら、誤解されたかも…」
「誤解？」
「そう、とりあえず咲夜さんに聞いてみようか」
「そうだね」
咲夜さんはというと、
なんで妹様としょーやさんが一緒に寝てるんですか⁉？まさか昨日の夜に……、
「いけないいけない、変なことを考えてしまいましたわ」
咲夜さんへそのままレミリアを呼びに部屋に向かう。
咲夜さんに少し誤解をされてしまったしょーや。
彼は果たしてこの誤解を解けるのか？

誤解

急いでレミリアの部屋へ向かうのは咲夜さんだ。
それにしてもこんなに焦っている咲夜さんは初めて見るんじゃないだろうか。
ガチャ
勢い良く扉が開けられびっくりするレミリア。
「ど、どうしたの咲夜？」
「はぁ、はぁ、お、お嬢様!!？はぁ、じ、実は…しょーやさんと妹様が!!？」
「あの二人がどうしたの？」
「べ、べべべべ、ベッドで二人一緒に夜を過ごしたみたいなんです!!？」
「えぇー!!？」
紅魔館にレミリアの声が響き渡る。
一方、しょーや達は…
「今の声はレミリア、てことはもう咲夜さんが誤解をそのまま話しちゃってるんじゃないのか!!？急がなきゃ!!？」
「ねぇどういうこと？」

抱きかかえられているフランが問いかける。
「2人でベットに入っていただろ？」
「うん」
「多分だけどそれをみた咲夜さんが俺が昨日の夜フランに変なことをしたと誤解してるんだと思う」
「えぇー‼？」
フランの声も紅魔館に響き渡る。
なんと言うかやっぱり姉妹だな。なんて思っているうちにレミリアの部屋に着いた。
ガチャ‼？
「今度はなに？」
「レミリア‼？咲夜さんから変なこと聞いてないか？」
「え…い、いやそんなのは、き、聞いていないわよ？」
明らかに挙動不審だ。さっきの声はそういうことか。
理解したところで話を続ける。
「いいかレミリア、俺とフランは昨日の夜なにもしてないからな」
「え？あ、あぁそうなのね」
ホッと一安心したようで咲夜さんを呼ぶ。

「お呼びでしょうか…!!?しょーやさんと妹様!!?」
「咲夜さん、さっきのは誤解です!!?たまたまフランが寝ぼけて俺の寝ていた部屋に来たってだけなんです!!?」
「そうだよ咲夜、変なこと考えちゃダメだよ?」
「申し訳ありません…」
「ふぅ、やっと誤解が解けたよ。正直誤解を招くとは思わなかったからさ」
「そうだね」
「それでは朝食の支度済ませますので少々お待ちください」
「ありがとう咲夜」
　咲夜さんがいなくなってからフランが再び口をひらく。
「ねぇ今日は紅白の巫女さんのところへ遊びにいくんだよね」
「そうだよ、しっかり食べていかないと1日遊べないからちゃんと朝食食べてから行こうね」
「うん!!?」
　しばらくして咲夜さんが戻ってきた。
「みなさま朝食の準備が整いましたのでどうぞ」
「さぁ行きましょう」

「ほらフランおいで」
「うん」
フランの手を握って一緒にレミリアについていく。
「こちらのお部屋になります」
中に入ると綺麗に並べられた料理が目に入ってきた。
どの料理も綺麗に盛られいい匂いを漂わせている。
「豪華な朝食だなぁ」
「そうかしら？」
「朝からこんなにたくさん食べるなんて久しぶりだよ」
「たくさんあるから好きなだけ食べていいわよ」
「それじゃあいただきます」
早速手を伸ばす。皿に取ったのはサラダだ。色とりどりの野菜がサラダ全体を綺麗にまとめている。
楽しそうに皿に盛っていく俺の隣に座るフランはというと…
「妹様、お野菜も食べてください、バランスの悪い食事はお体に悪いですよ」
「嫌～だ～!!？野菜食べたくない～!!？」
見かねたレミリアがフランに問いかける。

「食べてもいないのになんで嫌なの？」
「だって美味しそうじゃないんだもん」
「しょーやを見てみなさい。しっかり野菜食べてるじゃない」
「うー」
「フラン、野菜嫌なのか？」
「うん…」
「じゃあ俺が食べさせてあげる」
「え⁉？い、いや、いいよ…」
「はい、あーん」
　フランの口にサラダを運ぶ。
「あ、あーん」
　渋々口を開けてサラダを口に含む。
　モグモグ…
「美味しい‼？」
「な？美味しいだろ？」
「うん‼？」
「あら、案外あっさり解決するのね」

「これで大丈夫だな、さて、ご飯もたくさん食べたし準備しようかな」
「そうだね、じゃあ着替えてくるね」
「わかったよ」
２人はそれぞれ部屋へ戻り出かける準備を始めるのだった。

禁断の行動

いったいどれだけ時間が経っただろうか、フランが準備を始めると言ってからかれこれ2時間が経っていた。

「随分時間がかかっているなぁ、ちょっと様子をみに行ってみようかな」

そう思いフランの部屋へ向かった。

この時、俺はまだこの先で起こる事件を知る由もなかった。

コンコン

「フラン入るぞ～」

返事がないのでゆっくり扉を開けて中へ入る。

「うーんどっちにしよう」

悩んでる声が聞こえた。そしてフランの方を見たとき俺は禁断の行動をしてしまったと気づいた。

下着姿で服を選ぶフランが目に飛び込んできたのだ。

するとフランがこっちに気づき振り向く。

「あ…」

「え…？」
目があった。
これはやばい。死んだな俺…レミリアか咲夜さんに殺されるよ…。
「きゃーー!!？し、し、し、しょーや!!？なんで私の部屋にいるの!!？」
咄嗟に近くにあった布団を顔だけ出して被りうずくまった。
「フ、フラン、ち、ち、違うんだ!!？これには訳があって!!？」
するとそこへレミリアが部屋に来る。
「どうしたのフラン!!？」
見られてしまった…
「まさか、しょーやこんなことするためにフランに近づいたのかしら？」
明らかな殺気をむき出しにして問いかける。
「だから違うっ…!!？」
「問答無用よ!!？」
「うっ!!？」
有無を言わせてもらうことも出来ず腹を殴られそのまま窓ガラスをぶち破って外まで飛ばされた。
遠のく意識の中で思ったことがひとつ頭の中をよぎった。

終わった…もう一生フランに会えないかもな…。
ドサッ
地面に落ちていた時には無意識に涙が流れていた。
痛みが体を支配していて起き上がることも出来ない。だけど涙は無意識に流れ続ける。
この訳は簡単でしょーやがフランのことが好きだからというからだ。
すると割れた窓ガラスのところからレミリアが顔を出し警告をした。
「あなたはもう紅魔館へ入ることを禁止するわ。次にもう一度姿を見せたときは必ず殺す」
そう言って立ち去った。
痛みが引いてきてようやく動けるようになったしょーやはその場を後にした。その背中に禍々しいオーラを漂わせながら。
その者通った後には草木が枯れ生き物は皆怯え逃げ去ったと言われた。
一方紅魔館では…
「全く、なんであんなやつを紅魔館へ入れてしまったのかしら。そうすればフランだってあんな思いしなくて済んだのに」
布団にうずくまっていたフランが服を着てレミリアのところへ来た。

「お姉様、しょーやはどこへ行ったの？窓ガラスは割れてたし何かあったの？」
　布団にうずくまっていた時はずっと耳を塞ぎ何も見ないようにしていたため状況がわかっていなかったようで質問してきた。
「あいつなら追い出したわ。あんなゲスな考えを持ったやつは忘れなさい」
「そんな…しょーやを追い出したって、なんでそんなことをしたの!!？」
「あなたを想ってのことよ」
「お姉様は私をまた苦しませるの!?!？」
「え…」
「私布団の中で考えてたよ。しょーやのあの行動が本当に変なことをするためだったかって。私は違うって思う。だってあの時準備が遅かったから心配して様子をみに来たんだと思う」
「そんなことはないわ!!？だったら普通に待ってるでしょ!?!？わざわざ部屋にいく理由がないわ!!？」
「じゃあお姉様はしょーやにそれを聞いた上で追い出したの？」
「そ、それは…」
「聞いてもいないのに勝手に決めつけて追い出すなんてひどいよ!!？はっきり言うわ!!？私しょーやのことが好きなの!!？お姉様言ったよね？フランの意見を尊重するって

!!?.嘘つくなんて酷い!!?.もうお姉様なんて嫌い!!?.」
「フラン…」
「咲夜!!?.すぐ来て!!?.」
「はい妹様!!?.」
「しょーやを探すの!!?.ついて来て!!?.」
「い、いいのですか?.妹様」
「もう!!?.お姉様ばっかり庇ってもう知らない!!?.1人で行くわ!!?.」
　部屋を出て行くフラン。
「妹様を放っておいていいのですかお嬢様?.」
　レミリアは何も言えなかった。
　それぞれの思いが交差する中追い出されたのち行方不明になったしょーや、果たしてどこへ行ったのか。

隠された本当の力

幻想郷のとある草原でとても異常な事態が起きていた。
まるで悪魔が降臨でもしたかのような禍々しい気が渦巻いていた。その気は触れた生き物を一瞬で様々な形で処刑または拷問にかけられる。草木に至っては気を感じただけで枯れてしまう程危険なものだった。
その気の中心、いわば源とも言えるのはしょーや本人である。
「あぁ、やっぱりこうなるんだな…余計なことをしてその見返りは追い出される…幻想郷へ来る前のトラウマがここで蘇るなんてな…」
しかしなぜこのタイミングで能力が出たのか、そしてトラウマがこの力を産んでしまったのか、謎は深まるばかりである。
一方フランの方はというと妖精に道を尋ねている途中だった。
「ねえ、そこの青い妖精さん、ちょっと聞きたいことがあるのだけどいい?」
「あたいのこと? いいけど、貴方もしかしてあの紅い館の吸血鬼?」
「そうだよ、あのねフラン紅白の巫女さんのところへ行きたいのだけど道がわからないの。よかったら連れて行って欲しいのだけれどいいかしら?」

「霊夢のところか、わかった‼?あたいが案内するよ‼?」
こうして青い妖精ことチルノに案内され博麗神社へ向かうフランであった。
時は少々遡りフランが目指している博麗神社では…
「なにかしら、この途轍もない禍々しい気は。なにか起きてるのかしら、うーん、やっぱり気のせいかな。それにしてもしょーや、帰ってこないわねー」
「しょーや君のことだからそのうち帰って来るわよ」
「それもそうね。ゆっくり待ちましょうか」
まだしょーやの身に起きている異変に気付いていない2人はのんびりお茶を飲みながらしょーやの帰りを待っていた。
場所は草原に戻る。
しょーやは自分の身に起きていることが少しずつ分かって来たようだ。
「あれ?ここ…どこだろ。それに力が漲って来る。痛みも完全になくなってる」
腕を軽く振ると地面に穴があいた。
「え?なんだこれ…俺の体いったい、なにが起きてるんだー‼?」
体にまとわりつく気を感じてあたりを見回せば、禍々しい気に覆われているのにやっと気づいた。
あたりには血で出来た水たまりがたくさん出来ている。

頭の中がぐちゃぐちゃにかき回されたように考えがバラバラになり混乱していた。
ようやく博麗神社へ辿り着いたフランはチルノと別れ霊夢の元へ行く。
「こんにちは紅白の巫女さん」
「あら珍しい、誰かと思えばレミリアの妹じゃないの。しょーやは一緒じゃないの？」
すると泣きながら応えた。
「グスッ、あのね、しょーや今、グスッ、お姉様に追い出されちゃって、グスッ、どこ行ったのかわからないの…グスッグスッ」
「貴方がわからないんじゃどうしようもないわね、どうしようかしら」
「あのね霊夢、実は幻想郷のとある草原に禍々しい気を感じるの。ちょっと行ってみましょう」
「しょーやのことは気になるけど、異変かもしれないからね。わかった行きましょう。貴女も一緒に来てもらってもいいかしら？」
「いいけどフラン行ってもなにも出来ないよ？」
「いや、もしかしたら貴女の力が必要な気がするの」
「わかった」
こうして紫、霊夢、フランの３人で草原に向かうことになった。

処刑場

紫のスキマを使い草原に向かう。
3人がまず目にしたのはそこら中に飛び散った大量の血や肉片であった。
「え…なに、これ…」
「ま、まるで地獄絵図…」
「こんなの…見るに耐えられないわ…」
その奥に立つ1人の影が見えた。気は今出ておらず特になにも感じられなかったので近づいた。
近づくに連れてシルエットがはっきりしてきた。
その顔をみて3人とも驚愕した。
「まさか…」
「あの禍々しい気を出していたのは…」
「しょーや…」
血にまみれた草原に立っていたのはしょーやだった。
しょーやは何かを考えているように3人には見えた。

俺は…フランのことが好きだ。でも…でも‼?俺があの行動をしたばっかりにレミリアに無理矢理追い出されて紅魔館にも出入り禁止。挙げ句の果てには次に姿をみたら殺すって…誤解なのに理解してもらえないのか…。

ならば、レミリアを殺してみればどうだ?あいつさえいなければずっとフランと一緒にいれる‼?

フランを好きになったためにできた邪悪な考えがしょーやを動かしていた。手のひらの上では禍々しい気が渦巻きそれを見つめながら考えていた。

するとフランが口を開いた。

「しょーや、いったいどうしたの?」

しょーやはフラン達に気づき振り向いた。

「フランか…。悪いがフラン、俺は…もう紅魔館へは入れなくなったんだ…。そしてフランに会うのもダメなんだ」

「どうして…」

「あの時、俺はやってはいけないことをやったんだ。もう合わせる顔がない…」

「あれは、準備の遅かったフランが悪いんだよ、しょーやはなにも悪くないよ」

「どうであれ、レミリアにはもう一度紅魔館へ来たら次は殺すっていわれたんだ。それが紅魔館へ行けない理由。そしてそれからさ。この力が出て来たのは」

　霊夢が問いかける。
「ねぇしょーや。いったいその能力は？」
「これか？これは知らないうちに使えるようになったものだ。暗黒を操る程度の能力とでも言っておこうか、この手に出ている気に触れたものは様々な効果が反映されるようになるんだ」
「まさか…」
「悪いがもう俺のことは放っておいてくれ…」
「そんなこと出来ないよ‼？」
「この状況をレミリアが見てみろ‼？俺は完全に殺される‼？こんな状態でも命は…惜しい」
　言葉を残し去ろうとする。
「待って‼？」
　しかしフランの声も届かず黒い気に巻かれてその場から消えた。
「しょーや…」
「かなり厄介なことになったわね」
「さっきの話を聞いていて彼が何処へ行ったのか予想がついたわ」
「え？」

紫の言葉に疑問を抱く霊夢。それを察した紫が答える」
「彼は多分レミリアのところよ。これはあくまで予想でしかないけど、多分フランのことが好きなのよ。でももう紅魔館へは行けない。だったらレミリアのところへ行き逆に殺してやるって考えているのかも」
「だったら急がないとまずいわね」
「わかってるわ」
こうしてしょーやを追いかけるため紅魔館へ向かった。
紅魔館では…
「おい、レミリアを出せ」
「しょーやさんいったいどうしたんですか⁉?」
「美鈴じゃ話にならんな。だったらこのまま紅魔館ごと消し去ってやる‼?」
「あら、自ら殺されに来たのかしら?」
レミリアが出てきた。
「違う。お前を殺しに来た。前の俺と思ってると一瞬で死ぬぞ」
「お嬢様、ここは私が…」
「いや、私だけで充分よ。所詮人間、霊夢が居なくてはなにも出来ないわよ」
忠告をしたはずなのになぜここにいるのかしら、次に会ったら殺すと言ったはずなの

に。
「へぇ、余裕そうだな。じゃあ戦う前に少しだけ能力を見せてやるよ」
手のひらに気を集めて圧縮をはじめた。
え？なにあの能力、初めて見る能力…異変の時は使っていなかったわよね、いったい短時間でなにが⁉？
驚いてるのもつかの間しょーやの気の圧縮が終わり攻撃体制に入っていた。
「まぁこれくらいでいいだろう」
圧縮した気を握りしめて拳を突き出した。
一直線に伸びるその気は一瞬で紅魔館の門を粉々に砕いた。
「⁉？」
レミリアは驚いた。今まで見たこともない力を目の当たりにしたからだ。
「やっぱりこの程度じゃこれくらいしか威力ねぇか、でも見せるには充分だったな、じゃあ殺させてもらうぜ‼？」
「ち、ちょっと待って‼？」
「問答無用‼？」
気をまとってその場から消える。
え？何処へ行ったの⁉？まさか生身の人間が消えるなんて‼？

「!!?」

考えがまとまっていないところに拳が入り紅魔館内へ吹き飛ばされるレミリア。

そこへ霊夢達が駆けつける。

「しょーや!!?もうやめなさい!!?」

「あ?霊夢か、なにしに来たんだ?邪魔するな!!?」

「しょーや、なんでそんなことするの?」

「俺はフランのことが好きだった。少しでも仲良くなりたくていろんなところへ行く計画も立てたよ。でも!!?あの時!!?俺は待っていればいいのにフランの部屋に入った。それが全ての間違いだった!!?」

「じゃあしょーやがこんなことする理由がないじゃない!!?」

「でもレミリアは!!?俺の話も聞かずに無理矢理殴り飛ばして…フランにも会わせないって言ってそれから考えた結果はレミリアを殺せばフランにまた会えるって思ったんだ」

「そんなことしてまで会いに来られてもフラン嫌だ。会うためにお姉様傷つけるくらいなら会わないで傷つかずに済む方がいい!!?」

「なっ…そうか…」

ギャリィィィン!!?

心の中で物がひとつ壊れた。
その刹那気をまとってその場から立ち去った。
「あ…」
しょーやがいなくなってから自分が言ってしまったことをとても悔やんでいた。
フランなんでしょーやにあんなひどいこと言っちゃったんだろう…しょーやのこと好きなのに、もっとたくさん話したりいろんなところを見て回ったりしたかったのに…
「ううっ」
殴り飛ばされ気絶していたレミリアが目を覚ます。
「お姉様」
「フ、フラン…戻っていたのね…」
「なんでこんなことになっちゃったんだろうね…」
泣きながら弱い声でフランが言った。
その後、その場にいた全員、一言も喋ることはなかった。
そしてしょーやは再び消息を絶った。

闇の中

しょーやが消息を絶ってから早くも1日が経っていた。
紅魔館では…
「フラン、ご飯食べなさい」
「いらない…お腹が空いてないの…」
「昨日からなにも食べてないじゃい、ほら食べなさい」
「いらないって‼?」
ガシャーン‼?
食器を払いレミリアから距離をとっていた。
あのことがあってから姉妹の関係は再び悪い方向へ向いてしまった。
2人の会話はなくなっていき、紅魔館には険悪な空気が漂っていた。
「妹様、今日もお食事を取られなかったのですか?」
「ええ、困ったわ…せっかく関係が良くなって来ていたのに元に戻りつつあるなんて…」
「どういたしましょうか?」
「やっぱりしょーやしかこの状況を解決できる人はいないのかしら…」

「探しにいきますか？」
「いや、私ではしょーやを連れてくるのは無理よ…」
　こんなに滅入ってるお嬢様をみるのは従者になってから初めて、どうしたらいいのか全くわからない…
「とりあえず霊夢がなんとか解決するかもしれないけど…今の状態ではどの運命からでもハッピーエンドの結末が見つからないの…」
「そうですか…」
　解決の糸口を見つけることの出来ないレミリアは完全に困り果てていた。
　その頃ある場所では3人が話をしていた。
「やっと見つけたわしょーや‼？」
「放っておいてくれと言ったはずだ。さっさと神社に帰れ」
「悪いけど帰る気は無いわ」
「紫までそんなこと言うのか。だったら、力ずくでも返してやるよ‼？」
　能力を使い気を作り出す。
「霊夢、なんとしても止めるのよ‼？」
「わかってるわ‼？だからあんたも手伝いなさいよ紫‼？」
「もちろん‼？」

「先に言っておくが今は弾幕なんてぬるいものは使わねぇからせいぜい死なねぇように頑張りな」
　体を気が覆いあたりを暗くする。
　ドーム状にできた気は何者も寄せ付けない邪悪な力を持っていた。
「あんたいったいなにを⁉?」
「こっからはタイマンと同じ、待ったは無しの死闘さ‼?2対1でいいから来いよ」
「舐めやがって‼?」
「霊夢ダメ‼?」
　しかし紫の声は霊夢には聞こえてないようで真っ直ぐ突っ込んで行った。
「くっ、あんな簡単に挑発に乗るなんて‼?」
「絶対にあんたを倒す‼?」
「周りが見えてないな霊夢」
「なんですって⁉?」
　霊夢の周りに無数の黒球が浮いているのに気づいた。
「まさか‼?」
「その通り‼?お前は俺の罠にはまったんだよ。惨殺スピリットサイス」
　黒球からたくさんの斬撃が飛んでいく。

「くっ、こんなのどうってことないわ!!?」
　全ての斬撃をギリギリでかわす。
「よけられちゃったか～」
「あんた私を殺す気!?」
「今更なにを言ってんだか…俺は邪魔するやつははなっから殺す気だよ!!?」
　この心から消えたものを探しているだけなのにそれを邪魔するやつはゆるさねぇ!!?あの時壊れてなくなった一つの気持ちを!!?俺は必ず見つけ出す!!?
「こうなったら最後の手段しかないわ、紫!!?フランをここに連れて来て頂戴!!?」
「わかったわ、すぐに連れてくる。それまでなんとか持ちこたえていてね!!?」
「えぇ、もちろんよ!!?」
　紫はすぐにスキマを使って紅魔館へ向かった。
　霊夢に集中しすぎて紫がいなくなったことに気づいていないしょーや、これがのちに奇跡を起こすことになる。
　紅魔館へ来た紫はフランの部屋に向かった。
「ねぇ!!?フランはいるかしら!!?」
「ここにいるよ?」
「あ!!?フラン!!?実はしょーや君を見つけたの!!?でも今異変に近いことになってい

てあなたの力を借りたいの!!?」
「しょーや…」
「お願い!!?」
「わかった。行く!!?」
　こうして紫はフランを連れて霊夢のところへ戻ってきた。
「霊夢!!?連れて来たわ!!?」
「やっと来た!!?ちょっと手を貸してかなりまずいことになっちゃったわ」
　時を遡ること数分前…
「俺には時間がねぇんだ!!?次で決める!!?」
「やれるもんならやってみなさい!!?」
　ゴゴゴゴゴ!!?
　あたりが揺れ始める。
　膨大な気の圧縮を始めるしょーや。
「そんな大技出すなんて隙を作ってるだけじゃない」
　一気に間合いを詰めにかかる霊夢、しかしこの時すでにしょーやは手を打っていた。
「これは時間がかかるから隙ができるのはわかってるさ。だからこそこれで迎撃だろ!!?」

圧縮の最中、足を力強く地面に踏み込む。
すると目の前に漆黒の槍が地面から突き出した。
「なにっ⁉？」
咄嗟に身を翻してよける霊夢。
くっ、このままじゃ攻撃出来ない…
九割ほど圧縮が終わり準備完了までほとんど時間がない、そんな時に紫達が来て今に至る。
「これで終わりだー‼？暗黒デスソード‼？」
一直線に霊夢に向かって飛んでいくデスソード、その刹那フランが霊夢の前に立つ。
「しょーや‼？もうやめて‼？」
その声にしょーやは気づいた。
なんで、攻撃の先にフランがいるんだ⁉？このままじゃ当たっちゃう。
すぐさま攻撃の向きを変え攻撃はフランにギリギリで当たらず気のドームにぶつかって消えた。
よかった…フランに当たらなくて…。
しょーやの目からは涙が流れた。
「どうやら、なんとかなったようね」

「ええ、意外ときつかったけどね」
「しょーや…しょーや‼?」
涙を流しながら立つしょーやの元へフランが駆け寄り抱きついた。
「フラン…」
「大丈夫、大丈夫だよ。だから帰ろう。一緒に」
その言葉を聞いた瞬間周りを囲んでいたドームが消えた。
「やっと元のしょーやに戻ったみたいね」
「そうね」
少し離れたところから見ていた霊夢と紫は静かに2人を見守っていた。
「フラン…本当にすまない…」
「しょーやのその気持ちだけで充分だよ」
「ありがとう。でも…」
「でも?」
「紅魔館へは行けない…」
「なんで?」
「レミリアに殺されちゃう」
「フランが話をつけてあげる。だから一緒に行こ」

横から紫と霊夢が、
「ほら行って来なさい」
「ちゃんと誤解を解いて来なさい」
しょーやは少し考えて、
「…あぁ」
こうしてしょーやの暴走はフランのおかげで無事止めることに成功した。そして2人は紅魔館へ向かうのだった。

和解

なんか、殺されそうだよな…復讐とか言って俺もレミリアを無理矢理殴り飛ばしたんだし。

不安そうな顔をしているのにフランが気づいた。

「やっぱり不安なの？」

「ちょっとな…」

紅魔館へ来ると修復作業が行われていた。俺の壊した門やレミリアを殴り飛ばした時に巻き込んだ家具など様々である。

こうしてみると酷いもんだな。全部俺がやったんだもんな…。

「あのさフラン…レミリアに会う前に2人で話したいことがあるんだ。いいか？」

「わかった。じゃあフランのお部屋行こ？」

「うん」

レミリアに会わないようにしてフランの部屋を目指した。

無事部屋に入ると、

「それで、話ってなに？」

「あのさ単刀直入に言うな。フラン…俺フランのことが好きだ。だから俺と付き合って欲しいんだ」
　その言葉はフランが待っていた言葉であった。
　フランの目から涙が流れた。フランの答えは…
「やっと…やっとこの気持ちが伝えられる。もちろんいいよ。私もしょーやのことが好きだったの。でもなかなか伝えることが出来なくて…」
「そうだったのか…」
　そしてそのままそっとフランを抱きしめた。
　やっとぽっかり空いた穴が塞がった。壊れてなくなったものが見つかり再び心にあった穴を埋めていく。
「ありがとうフラン、俺無くした物見つけたよ」
「本当に?」
「あぁ、レミリアを殴った後理由を説明してフランの気持ちを聞いた時、心から崩れ去りなくなった物、それが俺の探していたフランを思う気持ち」
「ごめんね…私しょーやの気持ちを知らないであんなこと言っちゃって…本当はずっと会いたかったんだよ」
「わかってる。今ならフランの気持ちがすごくわかるから。だからこれからもずっと一

緒だよ」
「うん!!?」
「気持ちはまとまったよ。行こう、レミリアのところへ」
しょーやの気持ちもまとまりレミリアと和解する準備は整った。これからレミリアのところへ向かい全てにケリをつけるためフランとしょーやは歩み始める。
紅魔館玉座の間…
滅入っていたレミリアは平静を取り戻していた。
「そろそろ来る頃ね。どうしてやろうかしら」
「お嬢様、あまり物騒なことはなさらないでくださいね」
「わかってるわよ」
すると扉が開きフランとしょーやの2人が入ってきた。
真剣な眼差しの2人はゆっくりレミリアの前に来た。
「よく来たわね。前に言ったこと覚えてるかしら?」
「あぁ、覚えてるよ。次にここへ来たら殺すってな」
「その通り、死ぬ覚悟は出来てるのかしら?」
「生憎死ぬ気はねぇぜ」
「なんですって!!?」

「お姉様、あれはお姉様の誤解なの‼?フランは支度で2時間もしょーやを待たせていたの、しょーやは心配をしてフランの部屋に来たの、しょーやはノックをしてから入って来たの、でも私はノックの音に気づかなかった。だから私が悪いの」
「本当なの?」
「本当さ、ノックをしても返事がないから入っただけ、その時フランが驚いただけ、俺はフランに変なことをする気は全くなかったし、むしろ計画のことを考えてたよ」
「私は間違えてたのね…しょーやが着替えてるフランの部屋に入ったから変なことすると思ってたの、それでカッとなって話を聞かずに追い出してしまったの…ごめんなさい、こんなので許してもらえるとは思ってない。償いならなんでもするわ、好きにしなさい」
　レミリアの言葉には嘘はなく気持ちのこもった謝罪だった。俺はすぐにそれがわかった。敬意を込めて頭を下げる。上に立つものに最も必要なものだ。
　それを考慮して俺は口を開く。
「レミリア、お前がなんでもするって言うなら言わせてもらう。俺はさっきフランの恋人になったんだ」
「え‼?そうなのフラン」
「うん、私は初めてあった時からしょーやに一目惚れしてた。幽閉されていた私を外に

出してくれるって言ってくれた初めての人だから」
「わかったわ、それでなにをすればいいのかしら？」
　その問いにすぐに答える。
「それは…俺が紅魔館にフランと一緒の部屋で住むのを許可すること。そしてフランも一緒に異変を手伝ってもらうことのふたつだ。いいか？」
「待って‼？前者はいいけど後者のには納得いかないわ‼？」
「悪いがレミリアに拒否権はない。理由はわかるはずだが？」
「理由？」
「わかってないから言うよ。レミリアはフランが付き合ったらどうするって質問に対してお前はなにも言わないって言ったんだ。これはつまり納得するってことだろ？」
「…はぁ、忘れてたわ。わかったその条件を飲むわ」
「ありがとう」
　こうしてフランの仲介によりしょーやの誤解は解けレミリアと和解をすることに成功したのだった。

冬の出来事

月は4月、普通なら春が訪れ桜が咲き乱れるのだが今年は違う。以前として雪が降っている。怪奇現象だ。

俺は今紅魔館で布団に丸まっているところだった。

「うわ～さみぃから布団から出たくねぇ!!?」

するとそこへフランがやって来た。

「ねぇしょーや!!? いつまで寝てるの!!? 起きてー!!?」

「まぁいいじゃないかまだ寝てても」

喝を入れられているのに布団にもぐっているしょーや。

フランは最終手段を使うことにした。

「おーきーなーさーいー!!?」

勢い良く布団を剥ぎ取った。しかしベッドの上にはしょーやはいなかった。

「え!?? しょーやどこ行ったの!!?」

「おいおいうるさいなぁ。横にいるじゃねぇか」

俺はフランが布団を剥ぎ取るとわかったのでずっと布団をつかんでいたのだ。もち

ろんフランは吸血鬼だから力は充分あるから俺なんて簡単に持ち上げられることも計算しての行動だぜ!!?

するとフランが驚きの行動に出た。

「じゃあ、フランといろんなこと…する?」

「え?」

布団から出てフランを見るとベッドの上で服を脱ぎ始めるフランが目に入った。

な、な、な、なんだってー!!?まさかもうやっちゃうんですか!?!?流石にまだ早いぞ!!?

「フ、フラン待て、まだそれは早いと思うんだが」

しかし言葉と行動はあべこべになっていた。気づいた時には下着姿のフランを抱きしめていた。

「しょーや、言ってることとやってることが違うよ〜」

「あ、あぁ、ごめん」

顔を真っ赤にさせて恥ずかしそうにしているフラン。とてもかわいい。

実はここだけの話俺とフランは付き合い始めてからもう何ケ月も経っているのに今だキスをしたことが無いんだ。そろそろいいかなぁって思ったんだけどいつもいいところで誰か来ちゃって出来ずじまいなのだ。

「ねぇフランこっち向いて」
「なぁに？」
こっちを向くフラン。顔は赤く気持ちが高揚しているようだ。
「目を閉じて」
「わかった」
言ったとおり目を閉じてくれた。俺はゆっくり顔を近づけていきあと少しでキスをするというところでまさかの事態発生。
ガチャ
「フラン、しょーやいるかしら？」
なんとレミリアが入ってきたのだ。
「レミリア⁉？」
「お姉様⁉？」
「はっ⁉？」
また邪魔された、もういつになったら出来るんだよ⁉？
またお姉様に邪魔されちゃったなぁ。今日こそはキスできると思ったのに…
しまった、またやってしまったわ。どうしましょう…
しばらく沈黙が部屋を支配した。

俺は以前としてフランを抱きしめている、フランも俺のことを抱きしめている。レミリアは入り口で立ち尽くしている。

まずいなんとかこの沈黙を打破しなくちゃ。

レミリアが動いた。

「ご、ごめんなさい。また邪魔をしてしまって…」

「い、いや問題ないよ」

「それにしてもなんでフランは下着姿なのかしら？」

「え、えっと、そ、それは…」

「まぁそれ以上は聞かないわ。とりあえず私はこれで失礼するわ」

「わかった」

レミリアはすっと部屋をでて行った。あとちょっとだったのに今日もダメだったか、いやむしろ今の方がいいチャンスかも、これを逃す気は無いだろ。

「フラン‼？」

がばっ‼？

「わわっ‼？」

フランをベッドに押し倒し、覆いかぶさるように上になる。もうここしかない‼？

「フラン、いいか？」

「うん、いいよ。来て」

チュッ

唇と唇が触れ合った。２人とも同じようなことを思いながらキスをした。

俺のファーストキスをフランにあげれてよかった。

私のファーストキスがしょーやでよかった。

この時２人の心がひとつになった瞬間だった。

こうして２人は初めての体験をひとつしてさらに互いに好きになったのだった。

本格的に異変は動き出す

全く、なんで私がこんなことをしなくちゃいけないのかしら。
紫の決めた条件に納得のいかない霊夢は渋々しょーやを呼びに紅魔館へ向かった。
紅魔館へ着くと美鈴が珍しく起きていて霊夢を出迎えた。
「ようこそ紅魔館へ。用件はしょーやさんのことでしょう?どうぞ」
「話が早くて助かるわ」
中に入ると咲夜が待っていた。
「やっぱり来たわね。しょーやさんの部屋はこっちです」
「弾幕の腕が鈍ってないか心配だわ」
歩きながら2人は話を続ける。
「それにしてもよく受け入れられたものねー、しょーやも」
「それは妹様の好意もあるからです」
へぇー、と案外あっさり納得する霊夢。
話をしているうちに目的の部屋に着く。
「しょーやさんはこちらにおられます」

「ありがとう咲夜」
「それでは私はこれで」
そう一言残しレミリアの元へ戻って行った。
「さて、さっさと終わらせちゃおうかしら」
コンコン
ノックをして部屋に入る。
中ではしょーやとフランがいちゃいちゃしていた。
「フランの肌すべすべ～」
「しょーや～くすぐったいよ～」
霊夢が入った時にはしょーやがフランに抱きついて背中に顔をスリスリしていた。
「あんたたちこんな真昼間にいったいなにやってるのかしら？」
「うわっ‼？霊夢⁉？なんでここにいるんだよ」
「異変解決するためよ‼？あんたと一緒に異変解決しろって紫が言ってたじゃないの‼？」
「あ、忘れてたわ」
「しょーや、もっと～」
大事な話の最中にフランが甘えてくる。

しょーやはそれに答えるように再びいちゃいちゃを始める。
「いい加減やめろー!!?」
霊夢の怒号でいちゃいちゃをやめる2人、フランは少し拗ねてしまった。
しょーやはフランを撫でながらようやく本題に入る。
「で、異変の首謀者はどこにいるんだ?」
「冥界よ」
「冥界?魂が彷徨うっていうあの冥界?」
「その通り、そこへ向かうわよ」
「ひとついいか?」
「なに?」
「俺飛べないのは知ってるよな?」
「ええ、知ってるわよ」
「仮に冥界の入り口が空にあった場合どうすんの?」
「そこは紫にでも頼んだら?」
適当すぎるだろこの巫女、こんなんで異変解決できるんかなぁ。
「ねぇしょーや、異変解決しに行くんでしょ?早く行こうよー。フラン楽しみ〜」
その言葉に霊夢は引っかかるものがあった。

「ちょっと待って、もしかしてフランも一緒に異変解決に行くの？」
「行っちゃダメなの？」
　可愛い仕草で聞くフラン、霊夢は少し顔を赤くして目をそらした。どうやら照れてるようだ。
「わ、分かったわ。その代わりちゃんとしょーやと一緒にいなさいよ」
「やったー!!？これでいつでも一緒だね」
　言いながらしょーやに抱きつくフラン。
「そうだな」
　笑みを浮かべながら答える。
　そんな熱々の２人を横目で見ている霊夢はそれを無視して話を続けた。
「それじゃあ話は終わり、作戦としては正面突破でいいわね？」
「それでいいよ」
「がんばろうねしょーや」
「おう!!？」
　時は満ちた。ついに異変解決に向けて動き始めた霊夢達。
　一方冥界では
「今のところ全て順調に事は進んでおります。ですがそろそろ博麗の巫女が動き出す頃

でしょう」
「そうね、それじゃあはじめましょう」
怪しい会話が終わり異変の歯車は噛み合うようにして本格的に動き出す。
冥界を目指すしょーや達は冥界の入り口へ向かっていた。飛べないしょーやは暗黒を使い羽根を作っていた。
「機動力はなんとか確保出来たようね」
「こうでもしないと異変解決出来ねぇだろ?」
「しょーやのすごい羽根〜」
「それじゃあ行くわよ」
霊夢の掛け声で皆一斉に飛び立つ。
目指すは雲の上の冥界の入り口。
しかしここでしょーやはある事に気づく。
「霊夢、冥界の入り口って雲の上にあるって言ったよな?」
「ええ、そうよ」
「日光かんかん照りじゃねぇか‼?」
「あぁ、フランは日光ダメだったわね。しょーやはフランの恋人なんだからなんとかしなさいよ」

「わかってる。もう手は打ってあるよ」
　フランの頭上に暗黒の壁ができていた。
「それは日光も遮るほどの密度を持っているから心配ない。でもいちおう近くに居てねフラン」
　うん、と頷き手を繋ぐ。
　今は雲の中を進んでいる。しかしだんだん温度は高くなっていく。
「そろそろ雲を抜けるな」
「気を引き締めて行くわよ‼?」
「おう‼?」
　さらに加速して一気に雲を抜ける。抜けた先は眩しいほどに太陽が照りつけていた。
さらに上に上がると黒い穴みたいなものが空中に浮いているのが見えた。
「あれが冥界の入り口よ」
「さて、鬼が出るか蛇が出るか、まぁなんでも来やがれってもんだ‼?」
　真っ直ぐ冥界の入り口へ突入する3人。こうして異変の首謀者のいる冥界へたどり着いたのだった。

半人半霊の剣士

冥界…亡霊達が住んでいる場所である。そんな場所に普段生ある者が入ることはまず無い。しかしここに3人生ある者が乗り込んでいた。

「あそこが元か」

3人が見つめる場所。遥か続く石段の先、その頂きにある大きな大木。そこへ春が集められていた。

「さっさと異変解決するわよ。準備はいい？」

「もちろんさ、やってやろうじゃないか」

「フランも頑張る!!？」

意気込んだ3人は石段を駆け上がっていく。

春を集める大木のある大きな屋敷、白玉楼では首謀者とその従者が話をしている。

「来たわね博麗の巫女が、他にも2人いるみたいだけどどうしようかしら」

「では他の者は私が相手をいたします」

「そう？じゃあよろしく頼むわね妖夢」

「はい、承知いたしました」

そう言って従者は白玉楼を出て侵入者を迎撃する準備に移った。
石段を登っている3人。霊夢とフランは走るのをやめ飛んで移動している。俺はずっと走りっぱなしだ。
やっぱり簡単に飛べるっていいなぁ、走るのマジ疲れるんだけど。なんて思いながら走り続ける。フランは心配している。
「しょーや大丈夫？フランだけ楽してごめんね…」
「気にすることはないさ。仮に俺も飛んでいたってもうすぐ楽なんか出来なくなるんだし」
え？とフランは頭にハテナを浮かばせていた。霊夢は気づいているようだ。
「しょーや、もう気づいてるかしら？」
「当たり前だろ。とりあえず話をしてみてからだな」
ちんぷんかんぷんなフランは俺に聞いてきた。
「ねぇ誰と話すの？」
「相手とさ」
3人は進むのをやめた。目の前に立っている少女は髪の毛が白髪のショートカット、緑の羽織と緑のスカートでエンブレムのように胸のところには魂のような物がついている。背中には2本の刀を履いていて少女の横には魂が付き添っている。その少女が

口を開いた。
「私は魂魄妖夢、この先にある白玉楼の庭師兼剣術指南者です。生ある者よ、ここはお前達の来る場所ではない、即刻立ち去りなさい」
「悪いけどそれは出来ないわね、博麗の巫女として異変解決は義務だからそこ通してもらうわよ」
「そうですね、では一人選んでください。誰が白玉楼へ向かうのですか?」
「霊夢、ここはお前が行くべきだ」
「でも、かなり強いわよ」
「心配するな、フランもいるんだ負けるわけないさ。終わったらすぐ行くから行ってこい」
「頑張ってね霊夢」
「分かったわ。頼んだわよ」
　霊夢は白玉楼へ向かった。
「博麗の巫女が行きますか。まぁいいです。もともとあなた達とやる予定でしたから」
「舐めてると痛い目見るぜ?」
「人間ごときに負けるわけがありません」
「私は吸血鬼なんだけど、そんなこと言うなら壊してもいいのかしら?」

「まぁ待てフラン、だったら試してみたらどうだ？そんなに自信があるなら人間である俺に簡単に攻撃当てられるだろ？」

その言葉を聞いた妖夢の顔がさっきと全く違う表情をしているのに気づいた。もしかしたら癇に障ったことを言っちゃったかなぁ。

「舐めるなよ人間が‼？」

妖夢が怒りを露わにしながら刀を抜いた。

「この楼観剣に切れない物は無い‼？」

そのセリフを聞いて、

切れない物が無いって妖刀かなにかか？だが正統派の剣士のようだし攻撃が読みやすくて助かるぜと思った。

早速直感で攻撃を読む。

右から左へのなぎ払い、そこから一歩引いてからの突き。

構えて斬りかかる妖夢、右の方に刀を構えて水平に振り出す。

「しょーや危ない‼？」

ポケットに手を入れたままマトリックスのように体を後ろに逸らして避ける。

「これを避けれるんですね、でしたら…」

読み通り一歩引いた。それを見逃すことなく態勢を整えて体を半身にする。その直

後突きが飛んでくるが体のギリギリを通るようにして突きも外れた。
「なぜ当たらない⁉?」
「あんた正統派の剣士だな。分かりやすくてありがたいよ。正統派っていうのは強い猛者が沢山いるが簡単に動作が読まれる可能性が最も高い戦い方なんだぜ?」
「そんなことは無い‼?正統派が負けるわけ無い‼?」
「じゃあ攻撃当ててみろよ。当たらなければ机上の空論だぜ」
「はぁああ‼?」
妖夢は息もつかぬ猛攻をかますが俺は全て避ける。
そろそろ反撃してもいいかなぁとフランに指示を出す。妖夢は完全に頭に血が上っているようで俺にしか意識が向いてないのか後ろに回り込んだフランに気づいてないみたいだ。
「そろそろ決着と行こうか‼?」
「攻撃もしてないのによくそんなことを言えますね‼?」
「頭に血が上って周りが見えてなかったようだな」
「なにっ⁉?」
「禁忌レーヴァテイン‼?」
「後ろ⁉?」

しかし反応出来ずそのまま赤い光に包まれた。
「結局あんたの敗因は自分の強さの過信と頭に血が上ったことだ」
「まさか…こんな簡単に負けるなんて…」
「2対1だったってことも忘れてたこともあるかもね」
「それじゃ先へ進ませてもらうぜ」
そう言って俺はフランと一緒に白玉楼へ向かった。
ふう、完敗です。頭に血が上ってしまった時点でダメだったと気づかないとは…不覚‼?またいちから鍛錬し直しです。次に戦う時までには鋭い太刀筋とどんな陽動でも平静を保っていられる精神力を鍛えなくては。負けっぱなしなんて気分が悪いですからね…。
自らの未熟さを感じ心にリベンジという文字を刻みつけた妖夢だった。

異変は終結へ

「ねぇしょーや、あの妖夢ちゃんの早い太刀筋全部避け切ったね」
「まぁ当ててみろって言ったからには避け切らないと格好悪いじゃないか」
「それもそうね」
俺たちは話しながらも急いで白玉楼へ向かっている。霊夢は負けるなんてないと思うが少し心配である。この異変の規模からみて首謀者の力量がわかる。相当なものだ。
だがなんやかんや考えているうちに白玉楼に着く。
「霊夢、加勢しに来たぞ～」
「随分早かったわね」
着いた時はちょうど勝負の真っ最中だった。
「あんたが異変の首謀者か」
「ええ、私はこの白玉楼の主、西行寺幽々子よよろしくね。それにしても、妖夢…人間に負けるなんてまだまだ半人前ね、うふふ」
首謀者はこちらをみるなり状況を把握したのか扇で口元を隠すようにしてくすくす笑っている。不利な状況なはずなのになんて余裕っぷりだよ。

「さて、こっからは3対1だけどいいよな？」
「えぇ、いいわよ、その方がさらに楽しめるもの」
　なんだその理由、レミリアと対して変わらねぇじゃねぇか、俺は心の中でツッコミを入れた。
「でも私妖夢と違って体力には自信がないのよね～」
「それはそれで結構。異変が早く解決するわ」
「それでも負ける気は無いけどね。うふふ」
　すると幽々子は蝶の弾幕を作り出す。
「わぁ、綺麗」
　フランが弾幕に見惚れている。
「ふふふ見惚れている場合かしら？」
「フラン‼？」
　咄嗟に助けに入りフランを抱きかかえて弾幕を避ける。
「あらあとちょっとだったのに」
「そう簡単には当たらないぜ。フラン大丈夫か？」
「ありがとうしょーや、足引っ張っちゃってごめんね…」
「この程度足引っ張ったには含まれないよ。ほら次の弾幕くるぞ」

「うん」
どうやら俺との会話で士気を取り戻したようだ。これで安心だ。
「フランはしょーやが助けたみたいね」
それにしてもやっぱりまだ弾幕ごっこの経験が無いから厳しいかもしれないわね。
「これならどう?」
霊夢が考えているところへ幽々子は追撃をする。幽々子の後ろには大きな扇が展開する。
「しょーや、レミリアの時みたいにやってもらってもいい?」
「あの作戦で行くのか、わかった。フラン振り落とされないようにしっかり捕まっててくれよ」
「わかった」
フランを抱きかかえたまま、移動を始める。
「これを耐えられるかしら?」
再び蝶の弾幕を作り出す。しかし密度はさっきの比ではない。
蝶の弾幕を全てギリギリでかわし幽々子に近づきスペルを発動する。
「行くぜ!!?誘導、ショットガンリモート改!!?」
ショットガンの弾のように高速で拡散する弾幕に遅めの追尾弾を撃つ。作戦では囮

役で使っているがもちろん１００％当てる気でスペルを唱えている。
「なかなか面白いスペルね」
　幽々子は最初の高速で拡散する弾幕をひらりと避け追尾弾を弾幕をぶつけて消し去った。
「なにっ⁉？」
　ショットガンリモートが初めて破られた。
「そんな…俺の改良したショットガンリモートが囮にすらならないなんて」
　驚愕の事実を目の当たりにした俺は動揺していた。
　今まで霊夢ですら被弾したスペルをあんなに簡単に攻略されるなんて、これが力の差なのか…。俺は幽々子との力の差を思い知らされた。そんな中俺は霊夢からの喝の声が聞こえた。
「こら～⁉？そんなんでへこたれてんじゃないわよ⁉？１枚スペカが攻略されたからって諦めるな⁉？」
　その言葉を聞いて気づいた。
　そうか、そうだよな、まだ１枚しか破られてねぇ、次のスペカでなんとか霊夢のために隙を作り出す⁉？
　その執念が新たなスペカを生み出した。

「これならどうだ!!? 闇符暗黒の空!!?」
暗黒を操る程度の能力のスペルを発動させる。空から隕石のように大小様々な弾幕が降り注ぐ。
幽々子は余裕な顔をしながらよけている。弾幕はそのまま地面にぶつかり砂煙を上げた。
その時幽々子は気づいた。この弾幕も囮だと。周りは砂煙で視界が悪くなっていた。
さぁ霊夢後は頼んだぜ!!?
やり切った感が体を巡る。幽々子は砂煙が晴れ始めると霊夢を見つけ弾幕を繰り出す。霊夢は陰陽玉を出しキメにかかる。
「行くわよ。夢符夢想封印!!?」
七色に光る陰陽玉を操り幽々子に近づく。幽々子の弾幕は霊夢をすり抜けて行く。
「弾幕が当たらない!?すり抜けているの!?」
「これで終わりよ!!?」
夢想封印が見事決まり、幽々子は光に包まれた。
その後負けた幽々子は春を返し春は元の場所へ戻って行った。こうして霊夢の活躍により無事解決した。この異変は後に春雪異変と呼ばれるようになるのだった。

修行

　ここは紅魔館門前、俺は今能力の限界を上げるための修行をしている。指導してくれているのは美鈴だ。
「とりあえず能力を見せて頂きましたが弱点がありますね」
「弱点？」
「直感の方ですが戦闘において最も万能な物ですがその反面脆いところがあります。例えば攻撃を避けてから次の行動までにタイムラグが生じた場合予測通りに事が進むとは限りません」
「つまり読みすぎてもダメってことか？」
「そうなりますね。ある程度経験を積めば使い所がはっきりと見えてくると思います」
「なるほどな」
　確かに美鈴の言うとおりまだ経験が足りないこともあって万能までいかないのか。
　納得のいく答えが出たがもう一つの答えがまだ出ていない。
「じゃあ暗黒の方はどう見る？」
「そうですね、バランスとしては直感よりもいいかもしれませんね、多種多彩な攻撃もで

きるようですし機動力も充分ありますから、使い方によっては最強に近いんじゃないでしょうか」
「となると暗黒を操る程度の能力と並行で直感を使うってのでも良さそうだな」
「そうですね、とりあえず試してみますか？何事も経験が大切ですから」
「相手してもらえるか？」
「いいですよ。その代わり弾幕は無しで行きますね」
「わかった」
　するとそこへフランが俺に声をかけてきた。
「しょーや、フラン退屈～」
「じゃあ修行の様子でも見てるか？」
「うん!!？」
　返事をした後フランは日傘をさして出てきた。
「さぁ始めようか」
「遠慮なく行きますね」
　思えば美鈴と戦うのは初めてだな。紅霧異変の時は霊夢が瞬殺しちゃったからな。とりあえず体術は俺よりも上だっていうことは頭にいれておかねぇとな。
　すると美鈴が一気に間合いを詰めてくる。俺は直感を使わず冷静に対処をする。だ

がやっぱり経験の差がここで出てしまう。右のストレートをガードしようと腕を少し上げた瞬間左足の蹴りが綺麗に俺の右の脇腹を捉える。体が浮き壁に激突する。
「ぐあっ‼?」
「やはりガードが甘いですね。防ごうとする時に腕が上がりすぎてる傾向にあるので蹴りが入れやすくなってますよ」
「まだまだ課題は山積みか…それでこそ修行だな。反撃させてもらうぜ‼?」
黒い気を纏い美鈴の後ろへ回り込むために気を集中させた。
美鈴は気を感じることができるためすぐに黒い気に気づいた。
「後ろ‼?」
しかし俺はさらに先を読んでいたため美鈴の後ろにある気は俺が移動すると見せかけただの囮なのだ。
俺自身はその場から動いてはいない。
美鈴が後ろに気を取られている隙に一瞬で気を圧縮させ拳に集中させた。
その一瞬で美鈴は気づいたがそれも遅く振り返る時にはもう腹に俺の全力のパンチが決まっていた。
「しまった‼?」
不意を突かれたとすぐに気づいた。

そのまま紅魔館の門にぶつかる。
「まさかこんな短時間で物にするとはさすがしょーやさんですね。今のパンチはかなり効きましたよ。流石にあれをまともに受けてしまったのでもうギブアップです」
美鈴は負けを認めた。
「なかなかいい戦いだったよね、これも美鈴がいろいろ教えてくれたからだよ、ありがとう」
近くで修行を見ていたフランが俺のところへ来た。
「しょーやすごいね!!?美鈴に勝っちゃうなんて」
「美鈴と戦って見て異変前より強くなったと思うぞ。まぁ美鈴のアドバイスがなかったらボコボコにされてたけどな」
「私が教えられるのはもうありません。後は自分自身との戦いです。頑張ってくださいね」
「あぁ、頑張るよ」
「それじゃあそろそろお部屋戻ろうしょーや」
「そうだな。疲れたしちょっと一眠りしよう」
こうして修行は終わった。美鈴のおかげで成長出来たしょーやだった。

幼馴染

ガチャ

俺は部屋に入りそのままベッドへ移動し横になる。その直後フランが上に乗ってきた。

「いてっ!!?」

「ねぇしょーや、遊ぼ～よ～」

「フランとりあえず背中からおりて、呼吸しづらいから」

話を聞くためまず背中にいるフランに降りてもらうよういう。

「わかった」

フランが降りると俺は体を起こしてベッドに座る。

それにしても異変が終わってからというもの疲労が溜まりやすくなってるのは気のせいだろうか、少しの戦闘でこんなに疲れるとは。

そんなことを考えている時に再びフランが俺に話しかけてくる。

「しょーや、疲れてるの?」

「なんでそう思うんだ?」

「だって、しょーや元気ないんだもん」
「そうかなぁ」
俺って意外と分かりやすいのかなぁ。疲れてるって分かるんだ。
さっきまで遊ぼうと言っていたフランが俺を気にするようにちょっと寝る?と言ってくれた。
俺は頷いて布団に入る、フランも布団に入ってきた。どうやら一緒に寝るようだ。
俺は横になってすぐに来た睡魔に逆らわず重たい瞼を閉じた。

数時間後、俺は目が覚め横をみる。しかし俺の横に居たはずのフランがいなかった。
もしかしたら先に目が覚めたから他の部屋にでもいってるだろうと思った。
少し睡眠を取ったことで疲れは取れた。
「さて、なにしようかなぁ」
すると部屋の扉が開く。部屋に入ってきたのはなんとレミリアだった。
「どうしたんだレミリア」
「あのね、ちょっと話がしたくて来たの。いいかしら?」
「あぁ、構わないぜ。それにちょっと聞きたいこともあったし」
そう言ってベッドに誘う。

「で、話ってなんだ？」
「対したことじゃないのだけど、最近貴方と話していないと思ってたの」
「それで俺の部屋に来たのか」
「ごめんなさいこんな理由で…」
　レミリアは俯いた。どうやら気を使ってくれていたようだ。正直もっと気軽に話しかけてくれればいいのにと思った。
「なぁレミリア、フランが何処へ行ったか知らないか？」
「フランなら咲夜と霊夢のところへ行ってるわ」
「そうなのか、レミリアは一緒に行かなかったのか？」
「えぇ、咲夜が付いてるし霊夢のところなら心配はいらないからね」
　なんか違う。レミリアがそんな理由で行かない訳ない、事実レミリアも霊夢のところへ行くのは好きだからだ。
「なぁ、本当にその理由で行かなかったのか？」
「え、えぇ、そうよ」
「本当はもっと別に理由があるんじゃないのか？」
「……」
　レミリアは黙ってしまった。ちょっと言い方が悪かったかなぁ。

しばらく部屋に沈黙が続いた。

一方、幻想郷の別のところでは新たな外の世界の住人が幻想入りしていた。

「やっと着いたよ幻想郷。それにしてもまさか本当に来れるとはなぁ、あんたに感謝しないといけないな。紫さん」

「まさか幻想郷の存在を知っている者が外の住人にいるとは思わなかったわ」

「それにしてもあいつ何処へ行ったんだろ」

「あいつ？」

「あぁ、俺の幼馴染のいいやつさ。実は半年以上前にそいつの家が火事になってよ、両親は共に死亡してあいつだけが生きていた。しかし火事が治まったその日にあいつは失踪したんだ。手がかりは全くなかった」

「ねぇ、もしかして貴方の幼馴染の子って叢雲翔哉君のこと？」

「何で知ってるんだ⁉？」

「なんでもなにも翔哉君は私が幻想郷へ連れて来たのよ」

「なんだって‼？あいつここにいるのか‼？」

「偶然外の世界にいた時彼の家が火事になったところにいたの。そして彼の両親が亡くなったと知って彼を連れて来たの」

その話を聞いて少年は喜んだ。
「あいつにまた会えると思うと凄い体が疼く!!?早く会わせてくれ!!?」
「落ち着いて、その前に貴方の名前を聞いていないわ」
あ、と少年は声を漏らしたがすぐに答えた。
「そうだったな。俺の名前は水無月流鬼哉（みなつきるきや）だ。よろしくな!!?」
紫は笑った。
「まずひとついいかしら?」
「いいぜ」
「ここを知ってるって言ったわよね?」
「そうだな。ここの住人は女の子ばっかりだってことを知ってるぜ、名前は知らないけど」
「まぁいいわ。とりあえず案内するからこっちへ来て頂戴」
こうして翔哉の幼馴染の流鬼哉が幻想郷へやって来た。

場所は再び紅魔館。
俯いているレミリアを俺は撫でていた。
「ねぇ翔哉、もっと撫でて」

「本当は甘えたかったんだな」
「うん、だって貴方しっかりしてるし優しいんだもん」
「ありがとう」
　そんな時紫が現れた。
「あれ？紅魔館へ来るなんて珍しいなぁ紫どうしたんだ？」
「実は貴方の幼馴染だと言う少年を幻想入りさせたの」
「なに⁉？」
　するとスキマから現れたのはとても懐かしい奴だった。
「お前は⁉？」
「久しぶりだなぁ叢」
「流鬼じゃないか⁉？久しぶりだな⁉？」
「てかお前…その子誰？」
　横にいるレミリアに気づいたようだ。
「この子はレミリア・スカーレット」
「レミリアよよろしく」
「水無月流鬼哉だよろしく」
「で、お前これからどうやって生活するんだ？」

「それはもう決まってるの」
　紫が答えた。
「流鬼哉君には博麗神社に住んでもらうことにしたの」
「マジか‼?」
「神社ってことは巫女さんいるのか?」
「いるぜ。バカ強い巫女が」
「ほぉーあってみたいな」
　笑いながら言うと紫が重要事項を言う。
「流鬼哉君神社に住んでもらうにあたって覚えておいて欲しいことがあるわ」
「なんだ?」
「異変解決を手伝うことよ」
「そんなことでいいのか。じゃあ問題ねぇな」
　こうしていとも簡単に納得をした流鬼哉しかし翔哉はちょっと危ないと思っていた。

積もる話

「それにしてもまさか流鬼までこっちに来るとはなぁ驚いたよ」
「叢が失踪したって聞いた時はすごいショック受けたけど今はこうしてまた会えて嬉しいよ」
「だな」
「それにしてもお前あんなにいい館に住んでいるとはなぁ外の世界の時とあまり変わらない生活だな」
「確かにな」
　もうなくなったけど火事になる前はかなりの豪邸に住んでいたよな。あれも全部父さんと母さんのおかげだよな。
「なぁ、その子ずっと一緒にいるけどどういう関係なんだ?」
　俺の隣を歩くレミリアを見ながら聞いてきた。
「そうだなぁまぁ俺の親代わりみたいな感じかな」
「お前子供に世話してもらってるのかよ」
「失礼なことを言うのね。これでも貴方の何十倍も生きてるのよ」

「そうなのか、さっきのは完全に言い過ぎたよ、すまない」
「ふふふ、律儀なのね」
「昔から変わらねえよな」
「そうかもな」
「それにしてもこの先の貴方の運命は面白い進み方をするのね」
「この先の運命？」
「私は運命を操る程度の能力を持ってるの」
「つまりその能力で先の運命を見れるってことか？」
「そうなるわね」
「面白い運命か、楽しみだぜ」
「まぁ楽しむのもいいがそろそろ着くぜ。博麗神社によ」
　話しているうちに博麗神社へついていた。中からは元気な声が聞こえてきて賑やかなのを物語っていた。
「ここが博麗神社か」
「霊夢～‼？」
「あら翔哉来たのね、それとレミリアと紫の言っていた翔哉の幼馴染ね」
　すると奥からフランが出てきた。

「あ、しょーやだ‼?」
フランは勢い良く俺に抱きついて来た。
流鬼哉はそれを見て愕然としていた。
「お、おい叢、その子誰だ?しかもなんで抱きつかれてんの⁉?」
「あぁ、言い忘れてたな。この子はフラン、俺の彼女だよ」
「えぇ〜‼?」
流鬼哉の声が木霊する。
まさか彼女が出来ていたとは、しかもスーパーかわいいし、でも羽生えてるよな?ってことは人間じゃないのか?
「ねぇしょーや、その人だれ?」
「こいつは俺の幼馴染の奴だよ」
「俺は水無月流鬼哉、叢の幼馴染で唯一無二の親友さ」
「私はフランドール・スカーレット、フランって呼んでくれればいいよ。因みにしょーやの横にいるのが私のお姉様だよ」
「姉妹だったのか」
とりあえず立ち話もなんだから中へ入って頂戴」
「お邪魔するよ」

みんなで神社の中へ入っていった。
久しぶりに中に入ったけどやっぱり綺麗に掃除されている。この畳の匂いも久しぶりだ。しばらく来てなかったから新鮮に感じるよ。
叢ってここじゃ結構人気者なんだな。
そう思う理由はフランやレミリア、霊夢に紫、みんなと仲良くしているのを見たからだ。
やっぱり人間関係は大切なんだな。
「流鬼どうしたんだ?.さっきからずっと黙りっぱなしじゃないか」
「ちょっと考え事しててな」
そこへ霊夢が流鬼哉に質問をした。
「ねぇ流鬼哉、貴方の能力ってなに?.」
「能力?.」
「ようは貴方の使える潜在能力のことよ」
「霊夢は空を飛ぶ程度の能力、紫はスキマを操る程度の能力、レミリアはさっき言ったよな。そしてフランがありとあらゆる物を破壊する程度の能力、そっちのメイド長の咲夜さんは時を操る程度の能力、俺は直感と暗黒を使う程度の能力とまあ人それぞれ能力があるんだ」

そうなんだと納得している様子だが何処か不安そうな雰囲気を感じる。まだ能力がわからないから不安なんだろうな。
「じゃあさみんなで協力して流鬼の能力調べて見ないか？」
「いいわね、早速始めましょ」
霊夢が立ち上がり外へ向かった。みんなそれぞれ動き始める。
「ほら流鬼行くぞ」
「どこでやるんだ？」
「すぐそこだよ。みんな待たせてるから早く行こうぜ」
「あぁ」
流鬼を連れて外へ出る。
「よし、来たわね」
「なにすればいいの？」
「まずは自分の心に集中する」
みんなが見守る中言われたとおり目を閉じて心に集中する。するとそのうちあるものが見えてきた。
これは…なんだ？でも確かに感じる、強い力を。その力に手を伸ばす。光に包まれ目を開く。

「なにかつかめた？」
「あぁ」
　すると流鬼哉の体に電気が流れ始める。
「もしかしてこれが流鬼の能力か」
「あぁ、電気を操る程度の能力ってとこかな？」
「おぉ～!!?」
　その場にいたみんなが驚いた。そして能力開花を祝った。
「さて、能力開花したことだし明日から特訓だ!!?」
「おう!!?」
　かくして流鬼哉は能力を得た。そして次の日から異変に向け本格的な特訓を開始する翔哉と流鬼哉だった。

夜更けのリベンジマッチ

時刻は深夜を回っていた。そんな中俺は博麗神社の縁側に座っていた。空には月が昇っていて綺麗な満月だった。そんなところへフランがやって来た。
「しょーや寝れないの？」
「あぁ、少し気分が高ぶっててな」
ふーんと言って俺の横まで来て座ってから、
「綺麗な満月だね」
「そうだな、ここまで綺麗な満月は滅多に見れないよ」
「私たち運がいいね」
「運命かもな」
そう言って立ち上がり夜空を仰いだ。
それにしても流鬼にも能力があったのはよかった。俺だけ能力があったんじゃ抜け駆けしてるのと同じだもんな。流鬼哉の能力が開花したことに1番喜んだのは他でもない俺なんだから。フランは俺を見て問いかけて来た。
「なに考えてるの？」

「これからのことかな」
「異変？」
「いや、流鬼のこれからだね」
「異変解決一緒にすることになるもんね」
　あぁと言いながらフランの元へ歩み寄る。そんなタイミングに直感によって誰か来ると感じた。
「誰か来る」
　鳥居の方から気配を感じる。その気配は前に1度感じたことのある人の者だった。フランも気づいてるようで、
「しょーや、この気配フラン知ってる」
「だよな、もしかしてリベンジでもしに来たのか？」
　フランと一緒に神社の前に行くと満月に照らされる人物が1人歩いてきた。
「おやおややっぱりあんただったか」
「お久しぶりですね翔哉さん、フランさん」
「妖夢ちゃんだったね」
「で、こんな時間になにようですかな？」
　鋭い目つきでこっちを見ながら背中に履いている刀を抜き、突きつける。

「この前のリベンジマッチをお願いしたいのですが」
それを聞くなりフランが口を開く。
「この前は2対1だったからね」
「それは理由にしません」
妖夢は考えていた。
そう、あれは私の未熟さが招いた結果、だがあれから数ヶ月私は修行に修行を重ねた。もう前の私ではない‼?
俺に負けて心に深く刻んだリベンジの言葉、その言葉を有限化させるため妖夢はここへ来たようだ。
「ほほぉ前のようにはいかないということだな。面白いそのリベンジ受けて立つ‼?」
「今回は私は見てるだけにするね」
「じゃあサシの勝負だがいいか?」
「えぇ構いません」
そしてジッと互いに見つめ合う。妖夢は斬りかかる間合いを図り、俺は攻撃のタイミングを図っていた。
やっぱり前みたいに直感使ってばっかりじゃ進歩はない。ならこの前の成果を出せばいい。まだ妖夢にはこの暗黒の力を見せてはいなかったはずだからなと思い、戦闘態

勢に入る。妖夢も刀を構える。前と違い一部の隙もない見事な平青眼である。
両者睨み合ってから数分ここで妖夢が動き出した。
「はぁああ!!?」
俺も妖夢の動きに合わせるようにして動き出す。妖夢は刀を不思議な動きをさせて攻撃をしてきた。
前より攻撃のスピードが早い!!?。咄嗟に見切り体を翻してよける。
「少し戦術を変えたのか」
「えぇ、正統派は極めればそれこそ強いです。ですが正統派と思わせておきながらの不規則変化を混ぜることによりさらに強くなれることが分かったのです」
どうやらヒントを与え過ぎていたようだな。少し厄介だ。不規則変化じゃ直感でもなかなか対応出来ない。一体どうしようか考える。
「ちょっとまずいかもなぁ」
ボソッと口にしたのはやばいと感じたために出てしまった言葉だった。
「威勢のいい言葉は吐かないんですね」
「チッ!!?うぜぇ、大怪我しても知らねぇぞ!!?」
俺は暗黒を手の中で圧縮していく。
妖夢の方は初めて見る技を目の前にしているにもかかわらず臆することなくただ俺

を見ている。
　圧縮が終わり暗黒が形を変えていく。
「⁉?」
　だんだん形が変わっていくのを見て動揺し始める妖夢。
「さぁ、今度はこっちから行かせてもらうぜ。暗剣シャドーブリンガー」
　勢い良く蹴り出し妖夢に斬りかかる態勢を維持する。妖夢は防御をすると直感でわかった。妖夢が攻撃を受けようと防御したのを見た瞬間に目の前で暗黒を纏い後ろへ一気に回り込む。ボディーがガラ空きだったので回し蹴りを妖夢の脇腹に打ち込む。妖夢は反応出来ずそのまま木に激突した。
「しまっ…⁉?」
「ちょっとやりすぎたか?」
　木に激突した妖夢はそのまま地面に突っ伏していた。
　また負けた。一体どうしたら翔哉さんに勝つことができるんでしょうかね。もしかしたらこのまま一生勝てないかもしれないですね、ふふふ。
「ま…参りました」
「正直最初の妖夢の攻撃を避けれるか避けれないかで意外と勝負は決まってたかもな。あれを避けれなかったら俺の負けだったよ」

「まるで…人間じゃないようなその強さ…一体どこから来るのですか？」
　え？と言った後質問に答える。
「そうだな、気持ちじゃないか？」
「気持ち…ですか…」
　やはり精神力が足りなかったのですか…さらに高みを目指すというのはやはり至難の技ですね。
「妖夢の気持ち次第ではもっと強くなれるよ。強いて言えば常に心の中にその気持ちを強く持つことだな」
「翔哉さんはどのような気持ちを持って対峙しているのですか？」
「俺？俺はここにいるフランを命をかけて守り抜くって気持ちだな。守れなかったらそこで終わりだからな」
　１人のために命をかけれるとは、私と翔哉さんの違いは思いやる気持ちにかけているものだったとは、これからは私も命をかけて幽々子様を守り抜くと心に誓います。
「さて、今日はもう遅いけどとりあえず動けないだろ？ここで休んでから白玉楼へ戻ったらどうだ？」
「ではお言葉に甘えさせてもらいます」
　こうして満月が見ている中でのリベンジマッチは翔哉が勝ち、妖夢はまたひとつ成長

することが出来た。月は沈み始めもうすぐ夜もあけようとしていた。

特訓開始

保存日時：２０１５年０１月０４日（日）　１３：２２

リベンジマッチから数時間、朝がやって来て俺は外に出る。

昨日は意外とやばかったなぁ、まさかあんな短時間であれだけ変わるんだもんな。つくづく幻想郷には驚かされる。

そこへ昨日やり合った妖夢が起きて来た。

「おはようございます翔哉さん」

「あぁ、おはよう妖夢。もう体は大丈夫か？」

「ええ、なんとか大丈夫です」

「悪かったな。少し加減が出来てなかったみたいで」

「いえ、もっと強い人ならばあの攻撃受けても立っていられるかもしれないですから」

「もう行くのか？」

「幽々子様が待っていますので」

「そうか、気をつけて行けよ」

そう言って妖夢に手を振って見送った。妖夢もこちらに手を振りながら白玉楼へ

帰って行った。
　しばらくしてみんなが起きて来た。
　最初に起きて来たのは霊夢だった。
「おはよう翔哉」
「霊夢か、おはよう」
「あんた昨日妖夢と戦ってたでしょ？」
「分かってたのか」
　えぇと言いながら俺の頭にチョップして来た。
「痛っ‼？なにすんだよ」
「あんな派手にやってれば誰だって気づくわよ。他のみんなも気づいていたわ」
「なーんだ」
「妖夢、かなり強くなってたわね」
「相当俺に勝ちたかったんだろう。負けた時にすごい悔しがっていたよ」
　ふーんと素っ気ない相槌をする霊夢。全く無様なところ見せちまったな。もっと強くならねぇとフランを守り通せないな。
「とりあえず、今日から流鬼哉の特訓するんでしょ？」
「異変までにどこまで持って行けるかなぁ、あいつのやる気次第さ」

「がんばってね」
「あいつに稽古つけるの俺だけ⁉?」
「当たり前でしょ?だってあんたの幼馴染なんだから」
「分かったよ」
　なんて話をしていると流鬼が起きて来た。
「ういーす。早いね二人とも」
「よぉ寝坊助、しっかり寝たか?」
「おはよう流鬼哉、今日からがんばって強くなってね?」
「分かったよ霊夢」
　その後みんなでご飯を食べてから俺と流鬼は準備を始める。
　さて、どうやって稽古つけようかなぁ。がっつり戦闘訓練した方がいいかなぁ。
　そこにフランがやって来た。
「しょーや、今日から流鬼哉君と特訓するんだよね?」
「うん」
「そっか…」
　その顔はどこかさみしそうな雰囲気を醸し出していた。その顔を見てすぐに思った。
　もしかして甘えたいのかな?ずっと特訓してたらそんな時間もなくなっちゃうもん

な…

そう思って俺は口を開いた。

「なぁフラン、ちょっとおいで」

手招きをしてフランを呼ぶ

「なあに?」

近くまで来たフランの顎のところに軽く手を添えて顔を近づける。フランは察したのか目を閉じる。そのままフランの唇にキスをした。

そのシーンを他の者が見ていた。霊夢と咲夜だった。

私は咲夜と翔哉がフランとキスをするところを見てしまった。私も咲夜も顔を真っ赤にしながら見ていたがすぐにその場を離れた。

離れた後に私は咲夜と話をした。

「ねぇ、あれはどういう状況なわけ?」

「見た通りでしょ」

「全く頭の中はどうなってるのかしらね」

「互いに愛し合っている、ですね」

私はため息をついた。

全く私の神社でイチャイチャしないでもらいたいわ。でも…ああいうのもロマンが

あるわよね、流鬼哉もかっこいいし流鬼哉にあんなことしてもらいたいなぁ。
そんなことを考えていると咲夜が話しかけて来た。
「霊夢、顔赤いわよ？」
「そ、そ、そんなことないわよ」
「なんか想像してたでしょ」
「ち、違うわよ!!？」
くっ、痛いところを突いて来るわねこのメイド、いやらしいやつ。
そんなことを思っているうちに外が賑やかになって来た。気になって咲夜と一緒に外へ行くと翔哉と流鬼哉が特訓をしていた。
場所は中庭俺は今叢と特訓をしている。それぞれの弾幕が密度が高く始めたばっかりの俺には避けるのが至難だよ、やっぱり特訓をしてやるって上から目線で言うだけのことはあるな。
だんだん避けれなくなり被弾した。
「あっちゃ～また当たった～」
「まだまだだな」
「お前いったいどうやったらそんな強くなるんだよ」
「愛の力？」

冗談交じりに言われた。なんかむかつくけどなんか理由がわかる気がする。愛の力つまり大切な人を守りたいって思う気持ち。その気持ちが叢の強さだと考えた。そして半信半疑の状態の考えを　を確かめるため聞いて見た。

なぁその愛の力ってあの吸血鬼の女の子、フランちゃんだっけ?その子を守り抜く気持ちのことか?」

「よく分かったな、ご名答だぜ。そう俺の強さはフランを命をかけてでも守り抜くって言う俺の気持ちさ」

「理解はしたけど今の俺にはそれは難しいな」

「霊夢にでも告白したらどうだ?」

「本気で言ってるのか⁉?無理に決まってんだろ。霊夢にだって他に好きな人いるだろ。いるのか知らないけど」

「まぁお前次第だな。他にも可愛い子いるんだし」

はっはっはと叢は高らかに笑ってる。

でもなぁ、まだこっち来て間もないからよく知らないんだよなぁ。あ、なら今度叢とちょっと探索でも行こうかな、なんて思った。

「なぁ叢、今度どっかいいとこ連れてってくれねぇか?」

「とりあえずこの特訓が終わったらな」

わかったといい再び構える。
叢はさっき打って来た弾幕とは別の弾幕を使ってきた。どうやら霊夢に教えてもらったやつのひとつ確か自機狙いだったかな？その弾幕だった。体の力を抜き弾幕が当たる直前で横に避ける。しかし弾幕は急に方向を変えて再び迫って来た。
「なっ!!？超ホーミング効果あるじゃんか!!？」
「当たり前だろ、さぁがんばって避けろよー」
「舐めるなよ!!？」
能力発動!!？電光石火!!？
能力を使い一瞬で後ろに回り込む。
「どうだ？能力の使い勝手は」
「最高だよ、雷のごとく動く電光石火」
「昨日能力開花して今日のうちにそこまで使いこなせれば十分だな、お疲れさん。今日の特訓はこれで終了だ」
「はぁ～疲れた～」
こうして初日の特訓は終わった。終わった頃にはもうすでに日は沈み太陽は見えなくなっていた。
時は少し遡る。

私はずっと咲夜と流鬼哉の特訓を見ていた。
「能力使いこなすの早いわね」
「確かにそうね。あれなら美鈴にも勝てそうだわ」
「電光石火ね～相手として使われたらかなり厄介かも…」
「時を止めても難しそうだわ」
とにかく私たちは流鬼哉の動きなどに感心していた。
あれだけ動けるなら頼りになるわ、しかもかっこいいし、と顔を赤くしながら思っていた。
俺は流鬼の電光石火を見て流石だと思った。昔からそうだが流鬼は案外コツを掴むのが早いのを思い出した。これならちょっとあの娘と戦わせてみてもいいかなぁと思い流鬼に聞いて見た。
「なぁ流鬼、戦闘訓練も兼ねて実際に相手と対峙してみるか？」
「マジで？いきなりすぎないか？」
「大丈夫。能力を信じれば自然と戦い方は見えてくる。それにお前は昔からコツを掴むのが早いからな」
「叢がそう言うならやってみるよ」
「よし決まりだ。じゃあ出かける準備してくれ、早速その相手のところへ行くから」

「このままでもいいぜ」
「じゃあ行こう。霊夢、ちょっと出かけてくるぞ」
　霊夢が中から出てきた。
「分かったわ」
　そう言って流鬼を連れて白玉楼へ向かうのだった。

流鬼哉の実践練習

俺は叢と一緒に白玉楼というところへ向かっている。なんでも実践練習をするってことでちょうどいい相手がいるらしい。やっぱり異変解決には数多の戦いの経験がものを言うんだな。

電気を上手く使い空を飛んでいきそのまま雲を抜ける。目の前に見えるのはぽっかりと空いたブラックホールのような入り口だった。

「なぁ叢、あれの中に行くのか?」

「あぁ、そうだぜ」

ははは と笑いながらその穴に入って行った。俺もそのままついて行くために穴に飛び込んだ。

中に入ると目の前を優雅に飛ぶ人魂を見た。

うわ!人魂が飛んでる、しかも物凄いたくさん。

その光景を見て息を呑んだ。

「何してるんだ?行くぜ」

俺に急かすように叢が言ってきた。

叢は体に妖力を纏い石段を一気に駆け上がる。それについて行くため電光石火を使う。

時間にして数分、短時間で石段を駆け上がり一番上まで登って来た。

立派な建物があり、どうやらここが白玉楼みたいだ。

場所は変わりここは白玉楼の中庭、私は今私が仕えている主人、幽々子様と一緒にお茶を飲んでいた。ゆっくりお茶を啜りながらお茶菓子を少しずつ食べている。一方幽々子様はお茶菓子を頬張っている。全くこのお方は食いしん坊なんですから。

「幽々子様、お茶菓子食べ過ぎですよ～」

「いいじゃないの～妖夢～」

「まぁいいですが食べ過ぎには注意ですよ?」

「分かったわ～」

幽々子様と会話をしている時白玉楼に誰か来たことにきづいた。人数は2人、片方は知っている人だがもう片方は初めての気配だ。でも敵ではないのはすぐにわかった。なぜなら知っている人は翔哉さんだからだ。しかしなかなか入ってこないので私は早く中に入ってくればいいのにと思った。

ここは白玉楼の前、俺は今流鬼と白玉楼の前にいる。何故入らないのか？それはもしものためだよ。だって不意打ちとか来そうじゃん。妖夢は自分の枠をとったからな。何してくるかわからんぜ。でも敵意は感じられないなぁ。入っていいかな？

そう思い中に入ることにした。

中を見ると幽々子と妖夢がお茶を楽しんでいた。

２人はこちらに気づいたのか手招きをしている。俺と流鬼は招かれるがままに幽々子たちのところへ歩いっていった。

「よく来たわね～ちょうどいいタイミングだしお茶でも呑んでいって頂戴な」

「あぁ、俺はそうさせてもらうよ」

「どういうことかしら？」

「実はこいつと妖夢を戦わせてみたいんだよ」

「あらそうなのね、妖夢～相手してあげてね？」

「わかりました。魂魄妖夢です。あなたのお名前は？」

「俺は水無月流鬼哉だ。よろしくな妖夢ちゃん」

流鬼と妖夢は互いに握手をして自己紹介を終わらせる。

さてこの２人の戦い、どうなるんだろうな。見ものだぜ！なんて思いながら幽々子の横に座る。

「じゃあ2人とも頑張ってくれ」
「弾幕使わないとダメなのか？」
流鬼が俺に聞いてきた。
「妖夢なら肉弾戦でも問題ないぜ、な、妖夢？」
「えぇ、弾幕なしでもいいですよ」
「なら良かった、よしやろうぜ」
2人は俺と幽々子が座っている縁側から離れ中庭に飛び出す。俺は準備が整ったのを確認してルールを説明してから開始の声を上げた。
「ルールはどちらかが参ったというか気絶させれば終わりだ。それじゃあ俺の掛け声で始めるぞ。よーいはじめ‼？」
2人は同時に動き始める。

まさかこんな娘とやることになるとはな、叢も酷いことするぜ全く、俺が女の子と戦うの苦手なの昔から知ってるくせに…まぁとりあえずあの娘を参ったって言わせればいいんだろ？やってやろうじゃねぇか‼？
すると叢が開始の合図をした。
俺は一気に妖夢ちゃんとの間合いを詰めて電気を流した拳で殴りかかる。妖夢ちゃ

んは刀を抜きながら攻撃して来た。そう、抜刀術である。しかし電気の方が攻撃は早いため俺の拳が妖夢ちゃんの腹を捉えるとそのまま殴り飛ばした。

「ぐっ‼?」

苦虫を噛んだような苦しそうな顔をしながら飛んでいく。しかし空中で態勢を立て直し綺麗に着地する。

「刀2本持ってるのに身軽だね～」

「これくらいどうってことないです」

なるほど、だったらあれで攻めるか

体に電気を纏う。俺をみている妖夢ちゃんの目は鋭く心情の変化はなかったがそんなことはどうでもいい、はやくケリをつけたいところだ。

「行くぜ‼?·電光石火‼?」

ひと蹴りしただけで雷が走ったかの様に高速で移動する。

すぐさま接近して一発打ったら離れ、接近して一発打ったら離れの繰り返しをする。妖夢は見切れていないのか俺の攻撃をまともに喰らいっぱなしである。しかしこれには弱点がある。それは一発一発の威力が少ないことである。正直もう少し火力を上げたいが体が追いつかなくなってしまうため出来ないのだ。

「あまり痛くありませんね」

「くっ、やっぱり火力不足か困ったなぁ」
「反撃しますね」
　すると妖夢ちゃんは目を閉じた。
　なにかしてくると思ったが攻撃の手を休めることはしないことにして攻撃を続ける。もう一発打ちに行くといったところで攻撃が止まる。いや、正確には止められた。理由は妖夢ちゃんの居合切りだった。居合切りは見事に俺の腹を捉え、鮮血を飛ばした。
「うぐっ‼?」
　俺は着地に失敗して地面を転がる。
「いってー‼?」
「降参しますか?」
「ま、参った…」
　首元に刀を突き付けられ呆気なく降参してしまった。
　こんな簡単に負けるなんて…でも、いいもの見れたしちょっと妖夢ちゃんのこといろいろ知りたくなったなぁ。どうやら叢とは違う方法で強くなってるみたいだし、この傷が治ったら聞いてみよう…かな。
　そして激痛に耐えれずそのまま俺は意識を失った。

くっ、一発の威力は弱いもののこう畳み掛けられるときついですね、止めるならこれしかないですね。一瞬で刀を納め、目を瞑り居合の構えをする。

流鬼哉さんの攻撃に意識を集中させてはダメ、今は居合に集中しなくちゃ。

幾多の攻撃を受けながらも居合に集中する。そしてその時は来た。次の流鬼哉の攻撃が来た瞬間に刀を抜き腹を捉えた。

流鬼哉さんは態勢を立て直せず地面を転がって倒れた。そして私は流鬼哉さんの首のところに刀の切っ先を当てて、

「降参しますか?」

帰って来た言葉は

「ま、参った…」

負けを認める言葉だった。

緊迫していて勝つことだけに集中していた私は流鬼哉さんをみて涙が流れてきた。

しまった‼?私は勝つことだけに囚われて本気で殺そうとしてしまった。

負わせた傷は想像よりも深く絶えず血が流れた。地面が少しずつ血で赤く染まっていく。

急いで治療を始める妖夢。しかし出血がひどくなかなか血が止まらない。

まずい、このままじゃ…。

幽々子と戦いを見ていた俺は段々と違和感を感じて来た。
なんだろうこの締め付けられるような嫌な気持ちは…。悪いことが起きなければいいが、そう思っていると戦いは終盤に差し掛かり流鬼が電光石火で攻め続けている。妖夢は居合の構えをとる。
「まずいかもしれない」
「どうしてそう思うの？」
「直感だな」
それをいった直後のことだった。妖夢が流鬼に居合切りを決めた。着地をまともに出来ずに地面に投げ出され転がって行く。その流鬼の首に刀を当てる。勝負は決したようだが様子がおかしい。流鬼が動かないのだ。妖夢は手当をしているみたいだが困っているようだ。
「幽々子、一緒に来てくれ」
「え？・え？・どうしたの急に」
戸惑っている幽々子の手を引いて流鬼たちのところへ急いだ。
着いた頃には妖夢が流鬼の胸元に布を当てて止血をしていたが血は止まらず流れ続けていた。

「これはまずいな、出血量が酷い。かなり傷は深いようだな」
「翔哉さんごめんなさい…私が、私が…」
妖夢が抑えている布は血にまみれていてもはや止血をするような機能はほとんどない。このままだと本当に流鬼が死ぬ。
「とりあえず話は後だ。確かこの幻想郷の何処かに診療所があるって聞いたことがあるとりあえずそこへ向かおう。だいたい予想はつく、とりあえず2人ともついて来てもらうよ？いい？」
2人ともコクっと頷いて承諾してくれた。
流鬼を持ち上げ暗黒を纏う。2人は体を包む暗黒に戸惑いを見せるがそれも束の間すぐに場所は変わる。2人はキョトンとしている。それもそのはずさっきまで冥界にいたのに今は竹林の前にいるのだから。
「さぁ行くか」
直感でここに診療所があると思い竹林の中へ足を進めるのであった。

治療

　迷いの竹林、ここはそう呼ばれているらしい。なぜこの名前がついたのかというと日々急速に成長する竹によりあたりの風景は常に変わり道に迷う者が多いからこう名付けられたようだ。確かに普通なら迷うよな。俺は直感で進んでるけど。しばらく歩いていると横にいた妖夢が急に消えた。
「妖夢⁉?」
　幽々子が叫ぶ。
「人攫いか⁉?」
　俺も辺りを警戒しながら妖夢を探す。すると近くから妖夢の声が聞こえてきた。
「いたたた…誰ですかこんなところに落とし穴作った人は」
　下を見ると落とし穴がありその中には妖夢がいた。
「妖夢、大丈夫か?」
「ええ、なんとか…」
　暗黒を使い妖夢を落とし穴から助ける。
「落とし穴があるってことは近いかもな」

「急ぎましょうか、流鬼哉君も危ないし」
「そうだな。こっちだ」
俺は急ぐために走り出した。妖夢と幽々子は浮遊しながらついてくる。
数分走ったところで建物が見えてきた。
あそこかな？とりあえずいってみよう。手がかりがあるかもしれないからな。
建物に向かう。
すぐに着いたそこは沢山のウサギたちがいろんなことをしていた。
「ここでいいのか？」
頭にハテナを浮かべていると中から1人出てきた。頭にうさ耳が生えていて服装は紺のブレザーにピンクのミニスカートをはいた緋色の目をした少女だった。
「ようこそ永遠亭へ、どうなさいましたか？」
「すまないがこの竹林に診療所があるって聞いたんだが何処か知らないか？」
「診療所ならここですよ」
「ここがそうだったのか、頼む流鬼を助けてくれ‼？」
「酷い怪我ですね、すぐに治療しますのでこちらに運んでください」
うさ耳の少女は急いで治療室へ案内してくれた。

「師匠、急患です。酷い怪我をした人間が運ばれてきまして今治療室へ運びました」
　すると私が師匠と呼ぶ人は、コクっと頷き私に指示をだす。
「優曇華、すぐに治療の準備を、それと一緒の人たちは別の部屋へ通して」
「わかりました!!?」
　私はすぐに治療室へ赴き準備をしてから運んできた方達を待合室に案内した。
「みなさん、これから連れてきた方の治療をしますのでみなさんはこちらの部屋でお待ちください」
「あぁ、すまないね」
　怪我人を運んできた人は礼を言ってから待合室に入っていった。

　優曇華に指示を出した私はすぐに着替えて治療室へ向かった。
　治療室へ入り患者の容体を見る。傷は深く肋骨を見事に断ち切っている。さらにはそのさらに奥にある心臓にまで太刀が通っていた。
「ここまで酷いとは、急がないと間に合わないな」
　すぐに治療が始まる。まずは血の供給から始める。かなり出血が酷いため足りない血を追加していく。次に心臓の止血を優先させ心臓の切れた部分を丁寧かつ素早く縫い合わせていく。心臓の処置が終わるとつぎに断ち切られた肋骨の接続に取り掛かる。

離れた肋骨を寄せてボルトを使い骨と骨をくっつける。器具を使いボルトを固定させてから表面の皮膚を縫い合わせていく。

「とりあえずはこんなものか、しかし安心は出来ない、まずは骨がくっついてくれないことには治療が進まないからな」

私は患者を別の部屋に移してから待合室に向かった。

治療が始まってからもう数時間、外を見れば夜になっている。妖夢はというと幽々子の肩に寄りかかるようにして寝てしまった。幽々子は妖夢を横にして妖夢の頭を膝の上に乗せて優しく撫でている。妖夢はどうやら疲れていたようでスヤスヤと眠っている。

実践練習でこんなことになっちゃうなんて、今回の件は完全に俺が悪いな。

俺は妖夢と流鬼を戦わせたことを後悔していた。そんな俺を幽々子は心を見透かしたように喋りかけてきた。

「翔哉、自分を責めちゃダメよ」

「なんで、わかったんだ?」

「ふふふ、顔に出てるわよ」

「そうか、でも俺が流鬼を妖夢と戦わせたから起きたことだから…」

続きを言いかけたところを幽々子に言葉で遮られた。
「翔哉、過ぎたことを悔やんでも仕方ないわ、今は流鬼哉君が助かるってことを思っている方が大切じゃないかしら?」
確かに過ぎたことを悔やんでも今の状況が変わるわけじゃない。俺は幽々子に諭され大事なことに気づいた。
「ふう、俺もまだまだ青いな」
「あなたはこれからじゃないこの先でいくらでも成長できるわ」
「あぁ、そうだな」
すると待合室の襖が開きさっきここに案内してくれたうさ耳の少女とは別の大人の風格を纏った女性が入ってきた。その容姿はとても美しく服は赤と紺の服をきてスカートは左右対称のように色の配置が逆のロングスカートをはいている。髪は銀色で後ろに腰まで伸びる髪を三つ編みに纏めてある。その頭には赤い十字の入ったナース帽子をかぶっている。
その女性は中に入ると説明をしてくれた。
「まずは自己紹介をさせてもらうわね、私は八意永琳、医者よ」
「俺は叢雲翔哉だ、よろしく」
「私は西行寺幽々子、今疲れて寝ているこの子は魂魄妖夢よ、よろしくね」

「よろしく」
「それで流鬼の容体はどうなんだ？」
「まずは一命をとりとめた。だが傷が深いためしばらくは動けないだろう。それに加え肋骨をすっぱり切られていたから1ヶ月は永遠亭に入院してもらうことになる」
「そうか、なら良かった。ありがとう永琳」
「それにしても良くあの傷で死なずに済んだものだ」
永琳は流鬼の生命力に感心していた。
やっぱ珍しいんだな人間であれだけの怪我を負っても生きてるってことが、流鬼つくづく凄いやつだよお前はよ。
「まだ目を覚まさないのか？」
「しばらくは麻酔が効いてるから目が覚めないだろう。明日になれば目を覚ますと思うよ」
「わかった。じゃあ、俺たちはまた明日来ることにするよ」
「あぁ、わかったよ、着いたら優曇華に面会したいと言えば通してもらえるように言っておくから」
「優曇華？」
「私の弟子だ。優曇華ちょっと来て」

永琳が優曇華なる子を呼ぶとすぐに足音が聞こえて来た。
「はい師匠なんでしょうか？」
入って来たのは案内をしてくれたうさみみの少女だった。
「明日治療した患者さんの見舞いに来る方達だ。来たらすぐに通してくれ」
「わかりました。あ、自己紹介がまだでしたね。私は鈴仙・優曇華院・イナバです。鈴仙って呼んでくれればいいです。よろしくお願いします」
自己紹介をしてぺこりと一礼をする鈴仙、
「俺は叢雲翔哉だ」
「私は西行寺幽々子よ、この子は魂魄妖夢、よろしくね」
「それでは明日来られましたら声をおかけください」
「あぁ、わかった。それじゃあ失礼するよ」
「気を付けてな」
この日は流鬼が目を覚まさないと知って、妖夢を背負い幽々子と1度永遠亭を後にする。
白玉楼へ向い妖夢を寝かして白玉楼を後にしようとすると幽々子に呼び止められた。
「ねぇ翔哉、夜も遅いし白玉楼に泊まっていったらどうかしら？」
「いいのか？」

「いいわよ～ほら、こっち来て」
　じゃあと招かれて着いて行くと一室に案内された。
　ちょっと危ない予感がするのは気のせいだろうか？
「ここよ～」
「なぁ幽々子…布団ひとつしかないぞ？」
「それがどうしたのかしら？」
「もしかして、添い寝？」
「あたり～」
　これはまずいんじゃないか？流石に大人の女性と添い寝は…、なんて思っているうちに引っ張られて布団に飛び込んだ。
「いきなりすぎるだろ‼？」
「いいじゃないの、ほら、こっち来て」
　幽々子が抱きついて来た。
　やばいとても柔らかいものが当たってる。このままじゃ心臓爆発しそうだよ。
「あなた温かいのね、とても心地いいわ～」
「な、なぁ幽々子、その、胸当たってるんだけど…」
「やだ～気になっちゃう？ふふふ」

軽くからかわれているうちに睡魔がやって来て意識を手放した。
そして次の日、なにもなかったかのように俺は妖夢と再び永遠亭へ向かった。幽々子は笑顔で俺たちを送り出してくれた。

私は今翔哉さんと2人で流鬼哉さんの見舞いに行く途中なのです。迷いの竹林を進んで行ってじきに永遠亭が見えてきた。
「もうすぐですね」
「疲れたか？」
「そんなことはないですよ」
話をしていると永遠亭に到着し翔哉さんが鈴仙さんを呼んだ。因みに鈴仙さんの名前は白玉楼を出る時に教えていただきました。ちょっと待っていると中から鈴仙さんが出て来て、
「おはようございます、さっき流鬼哉さん目を覚ましましたのでご案内しますね」
私たちは鈴仙さんに着いて行き永遠亭の一室に案内された。
「こちらになります、ごゆっくりどうぞ」
鈴仙さんはそう言って他の場所へ行ってしまった。
私たちは中に入ると流鬼哉さんが状態を起こして待っていた。

「おはよう、叢と妖夢ちゃん」
「おはようございます流鬼哉さん」
「おはよう流鬼、大丈夫か？」
「あぁ、一時はどうなるかと思ったけど今はもう命に別状はないんだってさ」
翔哉さんはホッとしたような顔をした。
「まぁとりあえず今はしっかり休んでくれ」
「すまんな」
その後少しだけ沈黙が続いた。しかしその沈黙を切り裂くように翔哉さんが話を切り出した。
「あのさ、ちょっと用事あるから妖夢、流鬼の話し相手しててくれないか？」
「２人きりでですか⁉？」
「あぁ」
そしてよろしくと言って永遠亭を出て行ってしまった。困ったなぁ、昨日のことを思い出してしまって上手く話せないよ…そう思ってると流鬼哉さんが喋りかけてきた。
「なぁ妖夢ちゃん、聞きたいことがあるんだ」
私は聞きたいことを聞いた瞬間戸惑ってしまった。

妖夢にも春

俺は昨日治療をしてもらってとある一室にいる。妖夢ちゃんに斬られた後の記憶がなく、目が覚めたら知らないところに居ることに疑問を持ったが鈴仙というさ耳の少女がいろいろと説明をしてくれたお陰で全てのことを理解できた。

「あの後意識を失って叢達にここまで運んでもらったのか」

ひとりでブツブツ言ってると誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。痛みを我慢しながらゆっくりと上体を起こす。そして襖の方を見た。中に入ってきたのは叢と妖夢ちゃんだった。2人は隣に座るといろいろ話をしてくれた。だが少ししてから叢が席を外して部屋を出て行った。今部屋には俺と妖夢ちゃんの2人きりである。しかし何故か2人きりになった途端ドキドキしてきた。

あれ、なんで妖夢ちゃんと2人きりになった途端にこんなに落ち着きがなくなってるんだろう。これ、前にも1度あったな、確か妖夢ちゃんに初めて会った時だったかな。なんでかわからないけどあの時も会った瞬間にどきっとした。俺、もしかして妖夢ちゃんに惚れたのかも。だって、こんなに気持ちが高揚することなんて普段ないから。

しばらく沈黙が続いたが俺はこの気持ちを伝えるために妖夢ちゃんに話しかける。

「なぁ妖夢ちゃん、聞きたいことがあるんだ、今俺のことどう思ってる？」
「え？」
妖夢ちゃんは固まってしまった、まるで昨日のこと引きずってるかのように。
しかしちょっと間が空いてすぐに答えてくれた。
「そうですね、初めてお会いした時の印象はとてもかっこいい方だと思いました。今もそれは変わらないです」
それを聞いて少し嬉しかった。
もしかしたら妖夢ちゃんと縁があるのかも。そう思った。
「そうか、じゃあもうひとつ、俺、妖夢ちゃんのことが好きなんだ。それで、良かったら俺の彼女になってくれないか？」
「え⁉？わわわ私なんかのここ事がすす好きなんですか⁉？」
妖夢ちゃんはすごい慌ててしまった。
「俺、妖夢ちゃんの事が好きなんだ。それで、良かったら俺の彼女になってくれないか？」
私は今流鬼哉さんに告白をされた。
まさか私が好まれるとは思ってもみなかったので予想外のことに動揺してしまった。

「私でもいいのですか？私より幽々子様や紫様などの方が私よりも綺麗ですし大人ですよ？私はまだ子供みたいなものですから…」
　それを聞いて流鬼哉さんはため息をついた。
「はぁ～、分かってないなぁ妖夢ちゃん、恋ってのは自分の気持ちをぶつけるものなんだよ？俺は妖夢ちゃんのことが好きだ。この気持ちは変わらない。大人だからとかそういうのは関係ないんだよ、妖夢ちゃん自身の気持ちを聞かせて？」
　私自身の気持ち…私も心にしまっておいたあの気持ち、流鬼哉さんの事が好きな気持ち、今言えなかったらこの先も言えない気がする。ならやることはひとつよね
「私の気持ちは…いえ、私も!!？流鬼哉さんの事が好きです!!？」
　その言葉を言った直後私は腕を引かれ流鬼哉さんの胸に飛び込んだ。そして抱きつき流鬼哉さんの温もりを感じた。
「温かい、人の温もりはとても優しく温かいですね」
「そうだね妖夢ちゃん」
「流鬼哉さん、こんな不束者な私ですがこれからよろしくお願いします」
「こっちこそよろしく。昨日は負けちゃったけど、これからもっと強くなって妖夢ちゃんを守り通してみせるからね」
「ありがとうございます」

しばらく流鬼哉さんに抱きしめられたまま流鬼哉さんの温もりを感じ続けた。

俺は部屋の外で2人の話を聞いていた。

やっぱり席を外して正解だったか。なんとなくだけど流鬼が妖夢のことを気にしてたからな、気持ちを伝えることができて良かったじゃん！俺は内心とても喜んでいた。唯一無二の親友がまた成長するきっかけを掴んだことに。

これで次の異変が起きてもいい感じになるだろうと思った。

はぁ～最近フランと会ってないから恋しくなっちゃった。俺もフランに甘えようかな～、っととその前に2人に言ってから行くか。でも今入ったら空気読めないよな～、よし！鈴仙に頼もうっと。

俺は鈴仙を探しに永遠亭をウロウロした。

しばらく探していると中庭にいる鈴仙を見つける。

「お、いたいた。鈴仙～ちょっと頼みがあるんだけど」

「なんですか？翔哉さん」

「俺は急用出来たから先帰るって流鬼達に伝えといてくれ」

「わかりました」

「それじゃ」

そう言って俺は暗黒を使い紅魔館へ帰宅をするのだった。

しばらく妖夢ちゃんを抱きしめていた俺はゆっくりと離れる。よく見れば妖夢ちゃんの顔は赤く紅潮していてすごく可愛い。そして俺は妖夢ちゃんがちょっとモジモジしているのに気づいた。

「どうしたの？モジモジして」

「え？あ、あの、その…」

もしかして一緒に寝たいのかな？そう思い布団を開いて手招きする。

妖夢ちゃんは刀を脱いでゆっくりと布団に入ってきた。どうやら当たってたみたい。

「さっきのじゃ俺の温もり足りなかった？」

「そんなことはないです、でもとても心地よくてもっと強く感じたいと思いまして、ごめんなさい、我儘で…」

布団の中で俺は妖夢ちゃんをそっと抱きしめる。

「そんなことは我儘には入らないよ、むしろ大歓迎さ。俺の温もりを求めてくれるんだからね」

「流鬼哉さん…」

妖夢ちゃんは安心したのか不安そうな顔から一転して笑顔になった。やっぱり妖夢

ちゃんは笑顔が1番だよ。そう思っていると誰かが部屋に来た。
「失礼します、鈴仙です。翔哉さんから伝言を預かって来ましたのでお伝えしますね」
その人物は鈴仙だった。
「叢からの伝言?」
「はい、急用が出来たので先に帰ると仰られてましたよ」
「叢帰っちまったのか、まぁ急用じゃ仕方ないか」
まぁそのうちまた会えるか。次に会った時にはこのことを教えてあげよう。
「伝言伝えてくれてありがとう鈴仙」
「いえいえ、それでは流鬼哉さん、しっかりと休んでくださいね」
あぁと言うと鈴仙は何処かへ行った。俺は妖夢ちゃんの頭を撫でながら、
「なぁ妖夢ちゃん、俺眠くなって来ちゃった」
「無理なさらずにおやすみになっていいですよ、その代わり私も一緒に寝てもいいですか?」
「もちろんだよ。それじゃあおやすみ」
「おやすみなさい」
俺は妖夢ちゃんと添い寝するようにして眠りについた。妖夢ちゃんは俺から離れないように優しく抱きつきながら寝たようだ。

俺たちが次に目を覚ましたのは翌日だった。

久しぶりの日常

永遠亭を後にした俺は紅魔館へ戻ってきた。そんなに長く紅魔館に戻ってなかったわけではないが久しぶりの感じがする。

「たった数日だけなのにとても長く紅魔館を離れていたような気がする。フラン怒ってないかな」

フランが怒ってないかを心配しながら紅魔館の中へ入る。中は意外と静かで誰の気配も感じられない。誰もいないのかなぁ。

とりあえず自分の部屋に戻る。

「はぁ、疲れたなぁ」

そんなことを考えているうちとおかしなことに気づく。

あれ？思えば入口から俺の部屋まではかなり距離があるはず、だが誰にも会わなかった。いったいどうなってる？考えながらベッドの方へ歩いて行きベッドに座る。ここで誰かの気配を感じた。

「なるほど、まさか俺の部屋に隠れていたとはね～」

気配はふたつ、よーく知っている人だ。1人はクローゼット、もう1人は布団の中か、

とりあえずクローゼットから見てみるか。気配を消してゆっくり近づく。

私はレミリア、今翔哉の部屋のクローゼットにいるの。なぜかって？それはもちろん翔哉を驚かせたいからよ。ふふふ翔哉の驚いた顔を想像したらちょっと笑っちゃったわ。

すると部屋の扉が開き誰かが入ってきた。

「はぁ、疲れたなぁ」

入って来たのは翔哉だった。

あら随分疲れてるみたいね。後で咲夜にマッサージしてあげるように言っておきましょ。そんなことを思っている時、消していた気配が出てきた。

「なるほど、まさか俺の部屋に隠れていたとはね～」

翔哉の言葉を聞いて私は驚いた。私もフランも気配は消している、なのになぜ分かったの？いったい何を？

その後翔哉の気配が消えたことに気づき動揺を隠せなかった。

私はしょーやの帰りを待つため布団の中にいる。布団をめくった瞬間に私がいたらしょーやはどれだけ驚くんだろうなぁ～楽しみだな～。

ルンルン気分で布団の中で息を潜めていると部屋に誰かが入ってきた。
この気配はしょーやだ!!?
気配でしょーやだと確信した私は一瞬気が緩んでしまい消していた気配が出てしまった。
「なるほどね、まさか俺の部屋に隠れていたとはね〜」
ベッドに座ったしょーやは驚きの言葉を放った。
なんでバレてるの?気配はしっかり消しているはずなのに。
私は気配が出ていることに全く気づいていなかった。

気配を消した俺はゆっくりクローゼットに近づきそっと手をかけて開ける準備をした。
さて、どんな反応するのか楽しみだよ。
そしてクローゼットの扉を開けるとそこにはレミリアが隠れていた。レミリアは俺の顔を見た途端ポカーンと口を開けて固まってしまった。
「レミリアみ〜っけた」
俺はそう言いながらレミリアを抱きしめる。すると我に返ったのかレミリアは俺の腕の中でもがき始めるがそれもすぐに収まった。どうやら観念したようだ。

レミリアを抱きかかえてソファーに向かう。そしてソファーにレミリアを降ろしてベッドに向かった。もちろん気配は消したままね。

ベッドの前で俺はすこし考えた。それはフランをどうやっておどかそうかというものだ。普通に布団をめくってもいいんだけど、いっそのことここは布団ごとフランに抱きつくか。考えが纏まったので早速行動に移す。

勢い良く布団の中にいるフランに抱きつき布団ごと持ち上げる。すると驚いたのかものすごいジタバタしてる。

「だ、誰!!?.離してよー!!?.フランになにする気!?.?」

特には何もしないけど俺だって気づいてないんだな、しょうがない、離すか。そう思いベットの上に降ろすとフランが布団から顔を出す。

「フランにこんなことしてしょーやが……」

「俺がどうした?」

フランは俺の顔を見るなり喋っていた言葉が止まる。そして動きも止まってしまった。

「あららちょっとやり過ぎたって感じだな」

固まってしまったフランを戻すために俺はキスをすることにした。

「フラン…」

唇と唇が重なり合う。するとすぐにフランが我に返り顔を真っ赤にして離れようとするが背中に回した俺の手がそれを抑える。じきに離れるのをやめて抱きついてきた。
この感じ久しぶりだ。やっぱりフランの唇柔らかいな～。
ゆっくり離れるとフランは目をトロンとさせていた。
「しょーや今日のキスは長かったね」
「久しぶりだからな。フランの唇の感触を楽しみたかったんだよ」
「全く貴方たちは、目の前でマジマジと見せてくれるわね～」
「いいじゃないか。だってレミリアも俺達のこの関係を認めてくれてるんだし」
「そうだよお姉様」
「まぁそれもそうね」
ふふふと笑いレミリアはソファーから立ち上がるとゆっくり部屋を出て行った。

あの二人随分楽しんでたわね～私もあんな人がいたらいいのにな。
心の片隅にあるその気持ち、しかしその気持ちを紅魔館の主という立場が邪魔をしているのだった。主は本来威厳を持って従者に接することが多い、もちろん紅魔館の主であるレミリアもその考えを持っている。そのため従者の前で他人に甘えるなど考えられないと思っている。それがレミリアを困惑させている原因になりつつあるのだ。

「紅魔館の主として威厳を持ち続けるのは当たり前、でも私も吸血鬼とはいえ女の子、恋をするのだってある。でも恋をしてしまったら主としての威厳が…いったいどうしたらいいのかしら」

私は深く考える。どうしたらいいのかわからない、一つに絞ることができない。私は心の苦しみを1人隠れているところで感じていた。

なんかレミリア悩んでそうだな。顔の表情とかからして意外と深刻、もしかしてレミリアも恋を?

俺はいろいろ考えるが結果はわからないので考えるのをやめた。

あぁ、今更だけどあいつなにしてるんだろ。俺と流鬼はこっちに来たけど後1人、もう1人の親友のあいつが来てないんだよなぁ。紫に頼んでみようかな。

「ねぇしょーや、何考えてるの?」

フランが不思議そうに見つめながら聞いてくる。

「え?あぁ、ちょっと親友のこと思い出してたんだ」

「流鬼哉君のこと?」

「流鬼とは違うもう1人の親友。俺と流鬼とそいつでいつも遊んだりしてたんだ。だけど俺も流鬼もこっちに来たけどそいつだけまだこっちに来てない。正確には俺が元い

た世界にいるんだけど久しぶりに会いたいなって思ってよ」
「そうなんだ。紫さんに頼んでみたら？しょーやのお願いだから聞いてくれるかもしれないよ」
「流鬼も一緒に連れてって聞いてみるか」
　そういえばあいつは確か東方っていう鬼畜な弾幕ゲームやってたけどあいつって誰推しだったっけなぁ、それにしてももしかしてこの世界とゲームの東方となにか関係あるのかなぁ俺は東方知らないからわからねえんだけど。無理やり連れて来て聞いてみよ。
「よしフランちょっと行って来るな」
「フランも行ってもいい？」
「日傘させば問題ないしいいよ」
「やった～!!？」
　こうして俺たちはもう1人の親友をこっちの世界に連れてくるために動き出した。

友のために

ここは現代、翔哉と流鬼哉の親友であるものが住んでいる。

俺は今家で東方をやっている。俺は誰かって?あぁ、紹介がまだだったな。俺の名前は不動剣（ふどうつるぎ)、東方プレイヤーだよろしく。

しかしいつもは昼間に東方をすることがほとんどなかったがあの日以来休みの日はこうして東方をしている。

あの日ってのは俺の親友の叢と流鬼が失踪した日である。それにしても2人はいったいどこへ行ってしまったんだろう、警察も捜査をしているが手掛かりは皆無、突然いなくなったと言っている。その日怪しい人物を見たという証言もないらしい。普通に考えても人間をなんの痕跡も残さずに連れて行くなんてまず不可能だ。でも考えても答えは全くでない。

「叢、流鬼、帰って来てくれよ。もう一度2人に会いたいよ」

俺は2人に会いたいと強く思った。

場所は変わり幻想郷では…

「なぁ紫頼むよ、剣を幻想郷に連れて来たいんだ」
「俺からも頼む!!?」
俺と流鬼は紫に頼んで剣をこっちに連れて来たいと言っているところだった。
「ダメよ。いくら貴方達の頼みでもそれはダメ」
紫は頼んでもダメだと言う。
「理由を言えよ」
俺が問い詰めると口を開ける。
「はっきり言ってあの人間には能力がないの、いくら貴方達と関係が深くても能力がなくちゃ話にならないわ」
「能力がなくちゃダメ?ふざけんなよ。そんなんで会えないなら俺はお前を倒して無理やりでもここに連れて来させる」
「叢待てよ、早まるな!!?」
流鬼が俺を止めようとする。だが俺は、
「お前は!!?剣に会いたくないのか!!?お前は仲間を見捨てるのか!!?剣だって俺らの大切な仲間なんだ!!?それなのに仲間を見捨てるやつとつるんでたなんてあいつがかわいそうだ!!?」
「くっ…俺だって見捨てたくねぇよ!!?でもどうやっても俺たちじゃ紫に勝てないだろ

‼?だからこうやって頭下げて頼んでるんだろうが‼?」
「勝てないと思ってるから勝てないんだよ‼?だからお前は弱いんだ‼?いい加減分かれよ‼?勝てないからやらないなんて弱いやつのすることだ‼?俺の知ってる流鬼はそんな弱虫じゃねぇよ‼?」
流鬼は黙り込んでしまった。
俺は紫を鋭い目つきで睨む。
「どうする、やるのか、やらないのか」
「いいわよ、やってあげても。その代わり貴方が死んでも知らないわよ?」
「ふん、抜かせ。お前を倒して必ず剣をこっちに連れてくる」
俺は臨戦態勢に入る。

まさかここまで成長するとはね、正直驚いたわ。でも負ける気はしないけど。しかしあの子動かないわね。
「怖気付いて攻撃も出来ないの?」
「もう攻撃してるよ」
「⁉?」
彼が言葉を言った直後私のお腹のところに激痛が走る。

いったい何をした？全く動いてなかったわよね。やってくれるわね。
「くっ…なかなかやるわね」
「喋ってる暇があるのか？」
「後ろ⁉？」
咄嗟に振り返り後ろにスキマを展開し攻撃を防ごうとするが…。
「残念、正解は前だ⁉？」
「うぐっ⁉？」
私は暗黒を纏った拳をまともに食らってしまった。
今確かに後ろから気配がしたはず、なのになんでそこに⁉？
「フン、理解が出来ないか？教えてやろう。暗黒を使い俺の気配だけをお前の後ろにやった。もちろん俺自身からは気配はなくなる。そして気配に気を取られた瞬間に間合いを詰めて暗黒の拳を当てたってわけ」
翔哉君は私の心を見透かしたかのように答えた。
「くっまだまだよ⁉？」
フラフラと立ち上がり戦意を表すが他人から見れば最早満身創痍、戦えるような姿には見えない。
そんな私に翔哉君は驚きの言葉を言った。

俺は妖夢の時にもやった気配飛ばしを使い紫の隙を伺った。するとすぐに反応して俺に背を向けた。

全く本当にこれで妖怪の大賢者かよ、話にならないな。

「残念、正解は前だ!!?」

そう言って再び振り返った紫の腹をめがけて暗黒の拳を突き出した。見事に拳は紫を捉え数メートルほど宙を浮かせた。

「フン、理解が出来ないか？教えてやろう。暗黒を使い俺の気配だけをお前の後ろにやった。もちろん俺自身からは気配はなくなる。そして気配に気を取られた瞬間に間合いを詰めて暗黒の拳を当てたってわけ」

「くっまだまだよ!!?」

紫はフラフラと立ち上がり構える。

なんだ最早満身創痍だな。これ以上は戦っても無意味だ。

そう思い口を開く。

「紫、もうやめだ。これ以上はやっても無意味だからな」

「なっ!!?」

紫はとても驚いている。この発言は予想外だったようだな。

「なんで⁉?まだ勝負は…」
「もう分かってるだろ。はっきり言うがお前じゃ俺には勝てないよ。随分訛ったもんだな。初めてあった時は、全然勝てなかったのに」
「貴方いったい何が目的なの?」
「俺はただ剣をこっちに呼びたいだけ。昔みたいに3人で楽しく遊んだりしたいだけだ。あいつがもしこっちで危険に合うなら俺と流鬼で守る。それが親友だろう」
「確かにそうだな。親友を1人残してここにいるのだって正直後味が悪いし」
「…分かったわ。その代わりすこしだけ待って頂戴。今のままじゃあっちと繋ぐの辛いの」
「急ぐことでもない。今はゆっくり休んでくれ」
ありがとうと言って紫はスキマに入って行った。
「なぁ叢、これから白玉楼に行かないか?」
「いいけど、フランも連れて行くけどいい?」
「むしろそっちの方がいい」
「?」
俺は流鬼が何を考えているのかわからなかったがとりあえずフランも一緒に白玉楼へ向かうことになった。

再び実践練習

フランと手をつなぎながら流鬼と一緒に白玉楼へ向かう。
「なぁ流鬼、お前何しに白玉楼へ行くんだ？」
「それは着いてからのお楽しみだ」
なんだか楽しそうに言って来る。俺もフランも頭にハテナを浮かべながら着いて行きじきに冥界に入る。
「ここに来るのはこの前の実践練習の時以来か？フランは春雪異変の時以来だな」
「そうだね、それにしてもさっきのしょーや怖かった…」
フランはすこし声を小さくして言った。
やっぱりフランの前ではあんなことしなければよかったな。怖がられちゃったし…。
「怖がらせちゃってごめんなフラン、親友のことでついカッとなっちゃってさ、どうしても剣もこっちにきてもらいたかったんだ」
「大丈夫だよ。しょーやは友達のためにやるべきことをやったんだからね」
笑顔で答えてくれた。その顔を見てホッとした。
よかった、笑顔のままで。

なんやかんや話をしているうちに白玉楼へ着く。流鬼はニヤニヤしながら先に中へ入って行った。

私はなんとなくだが流鬼哉君が発してるオーラを感じ取った。

「ねぇしょーや、流鬼哉君からなんか不思議なオーラを感じる。なんて言うか戦う意思みたいなのをオーラが纏ってる」

「なるほど、そう言うことか。フランいいところに気づいたな。前に俺が言った特訓はちゃんとこなしてるか?」

「大丈夫だよ」

「なら問題ない、恐らくは俺たちと実践練習するんだと思う」

そうか、それで私も一緒の方がいいって言ったんだ。でも2対1?それだとなんか不公平な気がするな~しょーやは強いし。

すると中に入った流鬼哉君の声が聞こえてきた。

「おーい、2人とも早くおいでよ」

「しょーや、とりあえず準備はいいから行こうよ」

「そうだな」

手を繋ぎ直して中に入って行く。武者震いなのか、はたまた恐怖でなのかわからない

けどしょーやの手はすこし震えていた。

俺は2人が入ってきたのを確認した。

よし、とりあえずこれで役者が揃った。妖夢も準備万端だ。さぁ、久しぶりに実践練習と行こうじゃないか‼?

「やっぱりそうだったなフラン」

「予想通りだねしょーや」

予想通りだと?

「何を予想してたんだ?」

疑問に思い聞いて見た。

「俺たちと戦いたかったんだろ?」

「なんで分かったんだ?」

「フランには感じたよ、微かだけど戦いたいって意思がね」

「参ったな〜まさかそこまで鋭いとはね。御名答、俺達は2人と戦いたいって思ったんだよ」

「俺達ってもしかして妖夢もか?」

すると妖夢も一歩前に出て、

「その通りです。ルールは簡単、前のように相手を気絶させるか参ったと言わせれば勝ち。弾幕などはあってもなくてもいいです。対戦相手は流鬼哉さんと翔哉さん、私とフランさんでいいですか？」
「あぁ、問題ないぜ、フランも大丈夫か？」
「いいよ、それと私は能力を使ってもいいんだよね？」
「いいけど殺すなよ？」
「分かってるよ」
　俺はその話を聞いていてつい笑ってしまった。
「ははは‼？妖夢ちゃんも随分舐められてるな～」
「笑わないでくださいよ」
「悪い悪い、じゃあ始めようか」
　各自戦闘態勢に入り戦いの火蓋か切られた。

　しょーやの言ったとおり特訓しておいてよかった。おかげで能力を応用出来たりいいことばっかりだよ。
「攻撃しないんですか？」
　攻撃をしながら妖夢ちゃんが言ってきた。

「まだ準備中だよ」
　私は避けながら返答する。それにしても妖夢ちゃんの太刀筋、前よりもさらに早くなったなぁ。でも吸血鬼の身体能力にかかればこの程度はまだまだ余裕だよ。
　涼しい顔をしながらよける。
「さすがフランさんですね。動きに無駄がないです」
「褒めてくれてありがとう。まぁこれも全部しょーやのおかげなんだけどね。よし!!?そろそろ準備が出来たしすこしずつ反撃するね」
　距離を開けて構える。妖夢ちゃんも迎撃体制はバッチリだった。
「禁忌フォーオブアカインド!!?」
　私が唱えると3人の私の分身が現れる。
「え!!?分身ってありですか!!?」
「ダメとは言ってないよね?」
　妖夢ちゃんはしまったという顔をする。やっぱり正統派が抜けてない証拠だね~よし、やっちゃおう。
　分身の1人が真っ正面から突っ込んで行く。
「正面からとは無知な作戦ですね!!?」
「あらら、しょーやの言ったとおり妖夢ちゃんはすぐ油断するんだから」

刀を横薙ぎに振り斬りかかる。
「妖夢ちゃんはやっぱり正統派が残ってるね」
妖夢ちゃんを飛び越え一瞬で回り込み蹴り飛ばす。
「なっ!!?」
「ふふ、トリックスターデビル。お姉様から教えてもらった技だよ」
トリックスターデビル、元々レミリアが使っていた技で吸血鬼の身体能力を生かしたトリッキーな技である。ほとんどの相手はまともによけれないほぼ不可避の技。フランももちろん吸血鬼であるため使えても別におかしくはないのだ。
「くっ、それにしても4対1になるとは予想外でした」
「喋ってる暇はないよ!!?」
もう1人の分身が後ろから殴りかかるが妖夢ちゃんは体を一回転させ攻撃と回避を同時に行い避ける隙を与えずに分身を1人倒す。やられた分身は光の粒子になって消えた。
戦いはまだ長引きそうだ。
「電光石火!!?」
その言葉と共に戦いは始まる。

俺は前にも見ているため簡単に見切れる。
右からの飛び蹴り、後ろからの踵落とし、着地と同時の足払い全ての攻撃が手に取るようにわかる。
「なんで当たらないんだよ」
「単純すぎる。成長はしているようだがこの程度のスピードじゃ止まって見えるよ」
「舐めるなよ!!?シフトアップ!!?」
車の如くギアチェンジをしてスピードを上げ決めにきたか。よけれそうだけど当たってみるか。
そう思い暗黒で体を強化させてワザと当たることにした。
「電光、雷星拳!!?」
電気をまとった拳が電光石火の勢いを上乗せし威力を上げて腹に打ち込んできた。
「くっ」
「どうだ!!?いくら叢でも流石に動けまい」
なるほどね、威力としてはまぁ美鈴並みにはある。だがこの程度じゃ全然痛くねぇな。
「お前、本気でやってる?」
「なんだと?」

「本気でやってるかって聞いてるんだよ!!?」
回し蹴りで脇腹を捉えると流鬼は見事に飛んで行った。
「ぐあっ!!?」
「軽いな。もっと修行しないとダメだぜ流鬼」
「まだまだ!!?」
すぐに立ち上がり今度は遠距離からの攻撃をしてきた。
「銃雷、スパークガン!!?」
ふーん遠距離も使えるのか。とりあえずこれで弾こう。
「暗剣、デスブリンガー」
稲妻のようにジグザグと動きながら飛んでくる弾を落ち着いて弾く。
一発だけ視界を遮るような防ぎ方をした瞬間を流鬼は見逃さず電光石火で詰めてきた。
おっと、あの一瞬を見逃さなかったか、流石と言うべきだな。だが、重心が高いな〜これじゃ腹を蹴ってくださいと言ってるもんだ!!?
半身で攻撃を避け前のめりの流鬼の腹を勢い良く蹴り上げた。
「ぐはっ!!?」
そのまま流鬼は宙に舞い上がり何も出来ず地面に落ちてきた。

「どうだ流鬼、まだやるか？」
「くっ…参った」
　流鬼は負けを認め、地面に突っ伏した。
「立てるか？」
「あぁ、なんとか」
　俺の手を掴んでゆっくり立ち上がる。
「俺達は終わったけどフラン達がまだみたいだな」

　うーんやっぱりフォーオブアカインドでせめても流石に分身やられちゃうか～、じゃああれでもやってみようっと。
「フォーオブアカインド解除、今度はこれで行くよ!!？禁忌レーヴァテイン!!？」
　私は炎の剣を作り出す。
「炎の剣ですか、でも剣での勝負なら負けません!!？」
「たぁあああ!!？」
　上から来る炎の剣を妖夢ちゃんは刀一本で受け止める。
　やっぱり剣術使いこなしてるだけあって攻防共にかなりの技術を持ってる。
「はぁあああ!!？」

するとレーヴァテインが弾かれた。
「あっ‼?」
「やはり剣では私の方が上ですね。今度はこっちから行きます‼?牙突‼?」
勢い良く突き出された刀から突きが飛んでくる。
速い‼?
私はよけれず当たってしまう。
「痛たた、まさか突きが飛ぶなんてびっくりしたよ。私もそれやらせてもらうよ」
レーヴァテインを構え一気に突き出す。すると炎を纏った私の突きは妖夢妖夢ちゃんの牙突の倍以上のスピードで妖夢ちゃんめがけて飛んでいく。
「なっ‼?」
当たった瞬間爆発した。
私は妖夢ちゃんにゆっくり近づくとボロボロになって倒れていた。
「妖夢ちゃん、まだやる?」
「いえ、私はもう動けません。参りました…」
「ちょっとやりすぎちゃったかも、とりあえずあっちまで運ぶね」
私は妖夢ちゃんを抱きかかえてしょーやたちのところへ向かった。
こうして再びやった実践練習は翔哉とフランのカップルが勝った。結果は一方的

だったが絆は深まった。

そしてその後お茶を飲みながら言った流鬼哉の言葉にフランだけが驚愕していたのだった。

再び揃う三銃士

「えぇーー!!?」
フランの驚く声が冥界に響く。
「まぁこれが普通の反応なはずなのになんで叢は反応無いわけ?」
フランの驚いたことに喜びながらも俺が驚かなかったことに疑問だったのか聞いてきた。
「だって永遠亭で流鬼が妖夢に告白してたじゃんか。ちょうど部屋戻ろうとしたらその話聞こえたから入らずに聞いて、それから鈴仙に用事で帰るって伝えたんだよ」
「まさか聞かれてたとは、妖夢ちゃん気づいてた?」
「いえ、恥ずかしながら全く…」
流鬼は頭を掻きながら、妖夢は顔を赤くして答えた。
気配は消してなかったんだけどな、気付かないとはよほど二人だけの世界に入ってたんだろうなぁ、そう思い再び話を切り出す。
「永遠亭だったから良かったけど仮に他所でやってたらいつ襲われるかもわからない、ちょっとでいいから警戒しないとダメだぜ?」

「あぁ」
「はい」
「とは言ってもしょーやだってフランといる時お姉様が近くに来ても気付かなかったよね」
「なんだ叢も同じなんじゃないか」
「もーフラン、言っちゃダメじゃ～ん」
　フランを抱き寄せて擽る。
「あはははは‼?やめて‼?くすぐったいよ～‼?」
「他所でもラブラブ全開ですね」
　妖夢はこちらを見ながら答えた。
「もしかして妖夢ちゃん叢達が羨ましいのか?」
　流鬼は妖夢に聞いた。
「そ、そんなわけないですよ」
　妖夢はツンデレかもな。俺はそう思った。フランを擽るのをやめて頭を撫でていると流鬼が行動をする。
「そんなに羨ましいなら…それ‼?」
「ひゃっ‼?」

流鬼は妖夢を抱きかかえた。妖夢は顔を真っ赤にしてジタバタしてるがだんだんと暴れるのをやめた。
「うー…恥ずかしいです…」
「さてと、そろそろ頃合いみたいだしいくか」
「そうだねしょーや」
「何処へ行くんだ？」
「何処って紫のとこ行くんだよ」
「あーなるほどね」
納得したみたいだしみんなで紫のところへ行くか。
「妖夢も行くか？」
「私も行きます!!？」
よし決まり～。こうしてみんなで紫のところへ行くことになった。

「いいのですか？紫様、あの不動剣という者をこちらに連れてきても。流石にまずい気がしますが」
「なに言ってるのよ藍、これは約束なのよ。私は翔哉君に負けちゃったから約束はしっかり守るわ。まぁ正直言われなくても連れて来ようとは思ってたんだけど」

「でも能力がない人間を連れてくるのはどうかと思いますが…」
わかってないわね藍、実は剣って子にも能力はあるのよ。ふふふいずれ藍にも姿をみるだけで能力の有無がわかるようになるわよ。
「さて、そろそろお話は終わりね」
「？」
藍は頭にはてなを浮かべているが私はわかってる。だってみんなこっちに向かって来てるんだもの。
私はスキマで彼らのところへ赴くことにした。

おっとはやくもお出ましのようだな。
目の前に現れたのは紫だ。みたところ準備は万端のようでいつも通りの振る舞いをしている。
「みんな来たわね」
「さぁ、紫頼むぞ」
「ええ、わかってるわそれじゃちょっと待っててね」
そう言って紫はスキマの中に入って行った。
「楽しみだな流鬼～」

「そうだな、久しぶりに剣に会えるんだもんな、あいつの知識は俺らの中でもずば抜けてるからな、戦闘において最も頼りになりそうだぜ」

そう、剣は昔から将棋や囲碁、チェスなどをやってて頭の回転は俺らの何倍もはやくさらには何十手先の相手の行動も計算できるほど頭がいいのだ。正直戦闘でここまで強いやつはいないだろうな。俺たち3人が集まれば傘寿の知恵に文殊の知恵だな。そう思っていると妖夢が聞いてきた。

「あの～これからなにがあるんですか?」

「そういえば妖夢には伝えてなかったな。実は俺と流鬼の親友がもう一人来るんだ。そいつを紫に連れて来てもらってるところだ」

「そうだったんですね」

妖夢も納得したところで紫が戻ってきた。

時は少し遡りここは現代、紫が向かってるのは不動剣の家である。

はぁ、それにしても翔哉君か流鬼哉君のどっちかが着いて来てくれてもよかったのになぁ。

幻想郷を出る少し前、

「ねえ、2人のうちどちらか一緒について来てくれないかしら?」

「俺は待ってるよ、フランと離れるのやだし」
「俺も同感、妖夢ちゃんを1人置いていくのはちょっとなぁ」
「貴方たち本当に剣君を連れて来たいのかしら？」
「当たり前だろ～、だから場所だけ教えるしあいつなら俺らの名前出せばすぐ食いつくはずだよ」
「そうそう、頼んだぜ紫」
「もう困ったわね」
　という流れがあって今に至るわ。あのカップル達には今度お灸でも据えてあげようかしら。まぁそんなことはいい、はやく会って連れて行かなくちゃ。
「どうやらここのようね」
　立ち止まったのは他の家に比べ一回り大きな家の前。
　確かにあの2人の言っていた通りね。
　家の表札を見ると不動と書かれている。はぁさて剣君の部屋にスキマを繋げましょう。
　私はスキマを通り剣君の部屋へ移動する。
「こんにちは」
「誰!?？」

勢い良く振り向いた少年を見る。特徴も教えてもらったとおり、どうやら剣君のようね。
「貴方が剣くん？」
「そうだけど、なんで妖怪の賢者の八雲紫がここに⁉？」
「貴方なんで私の名前を知ってるのかしら？」
内心ものすごく焦っているが平静を保っているように見せながら聞いた。
「え？だって幻想郷の住人だし、東方に出てくるし」
「あらそう」
まさかこんなことってあるの⁉？ゲームの世界と私達の幻想郷が全く同じだなんて…あり得ない‼？っと今は落ち着かなくちゃ、彼に翔哉君達のことを教えてあげなくちゃ。
「あのね剣くん、実は貴方に幻想郷へ来て欲しいの。そこに貴方の大切な仲間の２人もいるから」
「その仲間ってまさか…」
「そのまさか、叢雲翔哉君と水無月流鬼哉君よ」
剣くんは呆然としてしまった。それも無理はないわよね、だって行方不明と言われた２人がまさか別世界にいるとは普通思わないもの。

　私は質問をした。
「どうするの？こちらへ来るか、ここに残るか」
「そんなの聞いたら一つしかないでしょ‼？行くに決まってる‼？」
「それじゃあこのスキマへ入って頂戴、案内するから」
「わかった」
　こうして私は剣くんを幻想郷へ連れてくることに成功した。

「みんな戻ったわよ」
「どうだった⁉？」
　紫に興味津々で聞いてくる懐かしい声がふたつ聞こえる。やっぱり本当だったんだ、叢も流鬼も生きててまた会えるんだ‼？
　すると紫に呼ばれた。
「さぁ、こっちに来て」
　ゆっくりとスキマから出る。眩しい日差しが照りつけ1面緑の草原に降り立った。そして俺の目の前にいるのは叢に流鬼だった。
「よぉ、久しぶりだな2人とも‼？」
「おぉおおお‼？本当に剣だ‼？夢じゃねぇ‼？」

「またこの3人で集まることが出来るとはな!!?」
俺たち3人は抱き合った。感動の再開だった。これほど嬉しいと思ったことはない。
多分一生の中で本当にあるかないかの喜び!!?そう思った。
「そうだ、剣、お前東方ってゲームやってたよな?多分だけどあのゲームとこの世界はものすごい深い関係があると思うんだよ!!?」
「それなんだけどよ、実は登場人物も全く同じなんだよ。だって紫が境界操って来たんだし実際スキマを通ってここに来たんだもん。間違いないよ!!?」
そう話していると後ろから聞いたことの無い少女達の声が聞こえた。
「ねぇしょーや、この人が剣君?」
「あぁそうだぜ」
「この方が剣さんですね」
「そうだよ」
その姿をみて俺は驚いた。
やっぱり同じだ。傘を差してるのは紅魔館に住むフランちゃん、そしてその隣にいるのは妖夢ちゃんだ。てかゲームの絵よりも圧倒的にかわいい!!?
「お前らなんでこの2人と仲良いんだ?」
不思議と思っていたことを口にする。

「そうかお前この２人も知ってるんか」
「あぁ、フランちゃんに妖夢ちゃんだろ知ってるよ」
「私達のこと知ってるの⁉？」
「驚きましたね」
　２人とも驚いている。それもそうだな。
「それでなんで流鬼は妖夢ちゃん、叢はフランちゃんと手繋いでるの？」
「そう、実は…」
「「俺たち付き合ってるんだ」」
「な‼？なーにぃーー‼？‼？」
　草原に俺の声が響き渡る。

解放される能力

俺はいま叢とフランちゃんの2人と一緒に紅魔館へ向かってる。流鬼と妖夢ちゃん達は白玉楼へ戻ると言って別れた。

はぁーまさかこんなことがあるとは、東方やってるとたまに頭に浮かぶ妄想、いろんな女の子と付き合ってる妄想をしてたけど2人が俺の妄想と全く同んなじようなことになってるなんて羨ましい～!!?そう思ってるうちに紅魔館へ着いた。

「うわー紅魔館だ!!?本物だー!!?でかー!!?」

「おい剣～興奮するの分かるけどあまり騒ぐと後が辛いぞ～」

「美鈴起こすと大変だよ～」

「なんで?」

すると目の前に拳が突き出された。

「うわっ!!?あぶねぇ～、普通生身の人間に妖怪が不意打ちするか?美鈴」

「名乗ってないのですが何故私の名前を?」

「それは俺が話すよ」

叢が仲介してとりあえず物騒なことには至らなかった。

「とりあえず自己紹介するよ。不動剣だ。よろしくな」
「紅美鈴です、よろしくお願いしますね」
「まぁとりあえず美鈴、みんなを呼んで大広間に来てくれ、みんなにまとめて説明するからさ」
「わかりました」
　返事をした美鈴はささっと紅魔館へ入って行った。
「さぁ俺らも行くか」
「なぁその前にいいか？」
「ん？どうしたんだ？」
「実は能力のことなんだけどさ」
「お前ないんだろ？」
「いや、逆ね。あるよ」
「えぇーー⁉？マジでー⁉？」
「おう、見せてやるよ」
　いやー正直俺にも能力あるとは思わなかったよ。紫から教えてもらったからな。
　時は遡りスキマの中を歩いてる時、
「あのね剣くん、実はあなたにも能力があるの」

「ほんと⁉？」
「えぇ、あなたの能力は全ての魔法を使える程度の能力よ」
「魔法か、てことは補助魔法も使えるってことか。なるほどね～」
「とにかく最初はしっかりと特訓してね？」
「わかってるよ」
　紫に言われてここに来たのだ。そしていまに至る。
「ということを言われたわけよ」
「紫め嘘つきやがったな、後でお灸でも据えに行ってやろうっと」
「まぁいまはそれをおいておいて行くぞ。お前も知ってる魔法だ」
　俺は魔法を唱えた。
「メテオ‼？」
　すると空から隕石が降ってきた。
「うわーマジか‼？メテオ唱えられるのかよ‼？」
「まぁこんなもんだ」
　するとメテオは地上に降り注ぐ前に消えた。
「剣くんの能力もすごいね、フランびっくりしたよ～」
「ははは、まぁ他のと合わせた魔法を使うにはまた特訓しないとダメだけどね」

「そうだな。それじゃ行くぞ」
「おう！」
こうして能力が使えることを確認したところで中へ入ることにした。

ここは紅魔館の大広間。みんなすでに集まっているようだ。
「揃ったな、それじゃまず自己紹介して」
「あぁ、不動剣って言います紅魔館のみなさんよろしくお願いします」
「私はこの館の主のレミリア・スカーレットよ」
「メイド長の十六夜咲夜です。よろしくお願いしますね」
「パチュリー・ノーレッジよ。普段は紅魔館の図書館にいるわ」
するとレミリアお嬢様が質問して来た。
「剣、あなたは能力はあるのかしら？」
「俺の能力は全ての魔法を使える能力です」
「ならパチェと話が合うんじゃないかしら？同じ魔法使いなんだし」
「それじゃあ時間があったら図書館に来てね」
「わかりました」
本当に紅魔郷メンバー全員いるよすごいな、生で見れるなんて人生なん万回やり直し

ても出来ないよ。動かない大図書館の二つ名を持つパチュリーに完全で瀟洒な従者の二つ名の咲夜さん、そして永遠に紅い幼い月の二つ名で俺の1番好きなレミリアお嬢様まで‼？いまにも倒れそうだ。自己紹介が終わってそう考えているうちにどんどん話は進んでいた。

「……と言うわけで剣も一緒にここで暮らすことにしたいんだけどいい？」

「私は剣の能力が気に入ったからいいわよ」

「私も剣さんが暮らすのには賛成ですよ」

「そうね、能力もあるししっかりしてるからいいかしらね。それじゃあ咲夜、剣の部屋を用意しておいてね」

「畏まりました」

最初はパチュリーが、続いて咲夜さん、最後にレミリアお嬢様と言う順番で皆快諾してくれた。

「ありがとな叢、実はさ俺が東方で1番好きなのレミリアお嬢様なんだわだからものすごい感謝してるよ」

「それは良かった。頑張れよ剣、レミリアは意外とお喋りが好きだからたくさん話すといいよ」

叢からアドバイスをもらい俺の恋を応援してくれた。

話は終わり皆解散し各々の部屋へ戻って行った。

今日来た剣って人間はなかなかかっこ良かったな。顔立ちは翔哉や流鬼哉よりもいいかも、私の好みのタイプだったわ。

私は剣のことがとても気になっていた。もちろん人間なのにしっかりとしているっていうところにね。異性としても気になってるけど、関係は吸血鬼と人間、吸血鬼は人間を殺して食べるそんな関係、フランと翔哉みたいに恋なんて到底無理よね。それに彼はこの世界のことを知っているって言ってたから好きな子とか他にいるんだろうなぁ、と思った。

「はぁ、この状況辛いわ…」

「お嬢様、今日は随分お疲れのようですが大丈夫でございますか?」

「えぇ、大丈夫よ。ちょっと考え事をしてただけだから」

「そうですか。ではご夕飯の支度をしてまいります」

「あ、咲夜、剣をこの部屋に呼んでちょうだい」

「畏まりました」

そう言って咲夜は部屋を出て行った。

この気持ちどうしよう。ちょっと剣と話したら纏まるかなぁ。私は紅茶を啜りなが

ら剣が来るのを待った。

俺は叢とフランちゃんのいる部屋に一緒にいた。

それにしても2人はとても仲がいい。見ててすごく思う。俺もお嬢様とあれくらい親密になれたらいいのにとおもった。それにしても吸血鬼と人間がこんなに近い関係になれるなんてすごいよな。

そう思っていると部屋の扉がノックされ咲夜さんが入ってきた。

「失礼します。剣さん、お嬢様がお呼びです」

「俺ですか？わかりました。今行きます」

俺は咲夜さんに案内されてお嬢様の部屋の前まで来た。

「私はお夕食の支度をしますのでこれで失礼しますね」

「ありがとうございます」

一礼すると咲夜さんは厨房へ向かった。

俺はドアをノックして部屋に入る。

「来たわね剣、こっちへいらっしゃい」

招かれるままにレミリアお嬢様の隣へ座る。

「ご用件はなんでしょうかお嬢様」

「レミリアでいいわ。呼んだのはあなたと話したかったからってだけなのだけどちょっと話し相手になってくれる？」
「よろしいですよ」
　まさかこんなに早くレミリアお嬢様と話す機会が巡ってくるとは、これはもしかしてお嬢様の運命操作？だとしたら嬉しい。
「貴方は私たち妖怪や吸血鬼とかは怖くないの？」
「そうですね～怖くないですね」
「どうして？普通の人間は怯えて逃げるのに」
「それは幻想郷の妖怪がレミリアみたいに可愛い妖怪ばっかりだからだよ。もちろんレミリアはカリスマもあるから上品な振る舞いが出来てすごいと思う。他の妖怪じゃ出来ないよね」
「そんなことないわよ」
「レミリアは吸血鬼でしょ？やっぱり血は吸うんだよね？」
「血は飲むわ、でも生きたまま飲むってことはないの。みんな処理されたものだから正直人間を見ることさえも珍しい、そして男性は特に珍しいわ」
「そうなのか」
「そういえばあなたはこの世界のことを知ってるのでしょ？」

「あぁ、そうだよ」
「普通この世界のことは知らないはずなのに、あなたってもしかしたら流鬼哉君や翔哉よりも珍しいかもしれないわ」
東方知ってるだけでここまで珍しがられるのは初めてだな～。
それにしてもなんてかわいいんだろう。レミリアはとてもかわいい。誰がなんと言おうと幻想郷で1番だな。そう思った。
「レミリア、実はさ俺初めてレミリアと対面した時君に一目惚れしたんだ。それでね、俺の彼女になって欲しいんだ」
レミリアは悩み始めた。

「レミリア、実はさ俺初めてレミリアと対面した時君に一目惚れしたんだ。それでね、俺の彼女になって欲しいんだ」
私は告白された。でも私はすぐに答えを出せずに悩んだ。
剣に告白された、でも…付き合うには貴方の覚悟を見せてもらわないと付き合うのは無理よね…、決めるとしたら食事しかないわよね。私たち吸血鬼の食べている人肉料理、あれを見ても臆することなく私を愛し抜いてくれる本物の愛かを確かめなくちゃ行けないわね。

そう思い私は剣に問いかけた。
「その答えは食事の後にするわ。そろそろ夕食が出来るわ。終わったらこの部屋に来て頂戴」
「食事の後だね、分かったよ」
剣は頷いて部屋を出て行った。
先ほど集まった大広間には料理が並んでいた。もう準備は整っている。私は席に座り皆が揃うのを待った。
最後にフランと翔哉が来たことで揃い夕食は始まった。私は剣をチラッと見た。今のところは普通に食事をしているだけだった。
しばらく時間が経ち先に食事を終えた翔哉とフランは先に部屋に戻った。残っているのは私と剣だけだ。そして私は最後の料理である人肉料理に手をつける。剣はそれを見ていた。

夕食の時間、夕方みんなが集まった大広間で食事をした。最初はみんな楽しそうに食べていたが時間が経ち翔哉とフランは先に食事を済まして部屋へ戻ってしまった。ここにはレミリアと2人っきりである。
レミリアは最後の料理に手をつける。が、その料理を見た瞬間背筋が凍った。レミリ

アが食べているのは人肉を使った料理だった。しかし考えた結果一つの答えにたどり着いた。

そう言えば昔なんかの本で見たことがあったなぁ。吸血鬼は人肉を好んで食すと。つまりレミリアも吸血鬼だからこの食事は至って普通なのだ。でも血を飲むなら鮮血を飲んだ方が吸血鬼にとってはいいと思った。

「なぁレミリア、ひとついいか？」

「何かしら？」

「思うんだけど血を飲むのなら鮮血を飲んだ方が美味しいと思うんだけど」

「⁉？」

「まぁ詳しくはよくわからないからなんとも言えないけどな。じゃあ先に行ってるよ」

おれはそう言い残して大広間を出た。

それにしてもフランは人肉料理食べてなかったのはなんでだろう。今度聞いて見ることにしよう。

そう考えながらおれは部屋に戻った。

「まさか、この料理を見ても全く動揺しないとはね、もしかしたらあの言葉は本物なのかも知れないわね」

　そう思い運命操作を使いこの先の運命を見てみると、剣と親密な関係になる運命が見えた。
「この運命はもしかしたら私が剣と出会った時には決まってたのかしら」
　私は運命を見終わった後部屋に戻って剣を呼んだ。
「答えは決まったかい？」
「ええ、決まったわ。さっきの返答はＹＥＳよ」
「本当か？」
「ええ、さっき食事の時に貴方の愛が本物か確かめさせてもらったの。人肉料理を見てどうなるかをね」
「そうだったのか」
「ええ、でも貴方は普通に接してくれた。それがとても嬉しかった。だから貴方に心を許したの」
「俺から告白しておいてなんだけど、レミリアは俺でいいのか？」
「もちろんよ。貴方と結ばれることが私の幸せになるのだから」
　そう言って私は剣の胸に飛び込んだ。剣は私を優しく受け止めてくれた。そして精一杯の愛を込めて抱きしめてくれた。私の心のモヤモヤしたものは剣の心の光に照らされ晴れて行った。

ありがとう剣、これからもよろしくね！

こうしてレミリアと剣はお互いを愛すことを誓いめでたく結ばれることになったのだった。

鬼現る

昨晩はレミリアと一緒に寝た俺は朝目を覚ます。隣にはレミリアがすやすやと寝息を立てて眠っている。

「俺、本当にレミリアと結ばれたんだな。なんだか夢みたいだ」

いまだに現実味のない感覚がある。しかし、目でみたもの全てが真実、つまり夢じゃない。まさかこんなに早く夢が叶うとはな。

そう思いながらレミリアを起こさないようにベッドから出て着替える。

今日は修行でもするか。能力の限界値を知りたいからね。

そして俺は外に出た。

もう日は昇り始めていた。

「さてと、始めますか～」

「お、早いな剣」

後ろから叢の声が聞こえてきた。振り返ると叢が紅魔館から出てきていた。

「おはよう」

「おはようさん」

「叢は何してんだ？」
「俺はいつも通り特訓さ」
「なるほどなー、俺もちょうど特訓しようと思ってたんだよ」
「じゃあ一緒にやるか」
　俺は頷き一緒に特訓をすることになった。
「じゃあ行くぞ」
　俺は早速魔法を唱える。
「いつでもいいぜ‼？」
「白魔法スロウ、黒魔法フレア」
　とにかくまずは相手を動きづらくさせて火力のある黒魔法で一気に畳み掛ける‼？
「うわっ‼？動きが遅く…」
　叢が驚いているところに黒魔法のフレアが命中する。フレアによって叢は中に打ち上げられた。次はこれ‼？
「メテオ‼？」
　唱えた直後空から大量の隕石が降り注ぎロックオンしたように全てが宙に打ち上げられた叢に向かって降り注ぐ。
「そんな簡単には当たらんぞ‼？」

空中で体制を立て直し隙間を縫うようにして全てギリギリで避けきる。
やっぱりスロウ状態でもメテオのほうが遅いから当たらないか。他の魔法とあわせてやらないとメテオは使えないな。
「反撃するぜ!!?」
すると叢が攻撃をしてくる。
「エンドレスナイト」
宣言した瞬間あたりが真っ暗になる。
「目くらまし!!?」
「半分正解、半分ハズレだ」
横から声がしたので咄嗟にテレポを使いエンドレスナイトの範囲外へ逃れる。するとエンドレスナイトは解除された。
「エンドレスナイト」
俺は自らの暗黒の力を使い剣の視覚を遮断しようと漆黒の霧を発動させる。自分の力だから俺はこの中でももちろんしっかり剣の姿を捉えている。
「目くらまし!!?」
剣は突然視界を遮られたのに驚いたのかあたりをキョロキョロしている。この中で

の攻撃なら当てられるな。そして剣の疑問に答える。
「半分正解、半分ハズレだ」
横からの不意打ちをしようと思い暗黒剣デスブリンガーを出して斬りかかるが剣は空を切った。
なに⁉？避けられた⁉？どこ行った⁉？
避けられたことを理解したことで俺はエンドレスナイトを解除する。
俺の正面、だいたい２０ｍほど離れたところに剣は立っていた。
「剣、どうやってあの不意打ちを避けたんだ？」
「なに、テレポを使ってエンドレスナイトの範囲外へ移動しただけさ」
俺は驚かされた。やっぱり剣の思考回路は俺の思ってる以上に高速で稼働しているのか。俺の攻撃の先を読むなんてな、実はあのエンドレスナイトの霧には目くらまし効果の他に大量に吸うと動きが鈍くなるような仕掛けがあったんだがほとんど吸ってないのか。これじゃあちょっと俺のほうが不利だな。
「なぁ剣、特訓はこれくらいにしないか？」
「そうだな。いろんなことわかったし」
やっぱりこの短い戦闘で己の力量をはっきりさせるとは将棋とかの経験がここで無意識に現れているのか。このまま行けば異変が起きても充分対処できる。そう思った。

「なぁ叢今のところどんな異変が起きたんだ？」
「えっととりあえずレミリアの起こした紅霧異変だろ、それから幽々子が起こした春雪異変だけだな、それがどうしたんだ？」
「次の異変のことなんだが春雪異変の次の異変に厄介な奴が出てくるんだ」
「厄介な奴？」
「そう、名前は伊吹萃香、そして驚くのは種族だ。彼女は鬼なんだ」
「鬼⁉？本気で言ってるのか⁉？」
「あぁ、本気だ。普通に戦ったらまず死ぬ可能性が大いにある」
「やばいぞ、みんなに言わないとだろ‼？」
「そこの人間、なにをそんなに慌ててるんだい？」
　どこからともなく声が聞こえた。あたりを見回すと少し離れたところに1人立っていた。その見た目は幼く頭には角が二本生えている。腕には枷みたいなのがついている。
「伊吹萃香⁉？」
　剣が驚愕している。
「例の鬼か⁉？」
　イマイチ話が飲み込めない俺は剣に聞いてみる。

「そうだよ」
「外の世界の者が私の名前を知っているとはどういうことだろうね～、少し興味が出てきたなぁ」
「いったいなにしに来たんだ⁉？」
「私は強いものを探しているところだ。見たところ２人ともなかなか強そうだね。ちょっと相手してよ」
　なんというかものすごい好戦的だ。しかもかなりまずい状況になってきた。
「ちょっと待ってくれ、いきなりすぎるよ‼？」
「そうだよ」
「なんだ釣れないな。仕方ないから他のやつを当たるか。弱いやつには興味ないし」
　萃香は振り返り去ろうとする。
　俺らが弱いだと？こいつムカつくな。ボコボコにしないと気が済まない。
「今なんつった？」
　俺は考える前にすでに体が動き殴りかかっていた。しかし本気で殴ったはずの俺の拳はあっさりと片手で止められた。
「だから弱いやつには興味ないって言ったんだ。それにお前の本気はこの程度か？」
「くっ‼？」

萃香は鼻で笑った。
「ふん、本気がこの程度じゃ話にならないよ、私が本当の力ってのを見せてあげるよ」
俺は萃香に引っ張られ距離が近くなったところを思いっきり殴られた。俺はそのまま紅魔館の壁をぶち破って中まで飛ばされた。

私は強いものが好きだ。種族関係なくそうだ。そんな私は強いものを探して幻想郷を見て回っている時人間が面白い戦いをしているのを見つけた。終わって話をしているところに話しかけたところ片方の人間が私のことを知っていた。見たところ外の世界の人間みたいだ。
なんで私のこと知ってるんだろ。ちょっと興味出てきたなぁ。そう思って戦いたいと言ったが断られた。
「なんだ釣れないな。仕方ないから他のやつを当たるか。弱いやつには興味ないし」
この言葉が癇に障ったのか攻撃してきたので受け止めてみるがなんと弱々しい拳だ。話にもならない。
そして私は力の差を見せるために殴りかかってきた人間を殴り飛ばした。
「簡単に飛んでいっちゃったよ。まぁ死んではいないだろう。そこのもう1人の人間、今の人間に伝えろ。もしさっきの言葉を取り消してほしいのなら死に物狂いで特訓を

して私と同等に戦えるまでに鍛え上げ、挑戦しに来いと。あと仲間を連れてきてもいい特別サービスもつけてやる。いいかしっかり伝えろよ」

その後私はその場を去った。

さて、あの人間の底知れない力がどこまで覚醒するのか見ものだな。

俺は萃香が伝言を残して去った後急いで叢の元へ向かった。

叢死んでないよな⁉？死ぬなよ‼？

叢の元へ辿り着くとみんな集まっていた。

「ねぇ剣いったいなにがあったの？」

「実は…」

俺はさっき起きた萃香との出来事についてみんなに説明した。

「そんなことがあったのね、兎に角先に翔哉をベッドに寝かせないと」

「そうだな」

俺たちは慎重に叢をベッドに寝かせた。

それにしても大変なことになってしまった。萃香に殴られるなんてまず常人じゃ即死だ。叢はいちおう息はあるが状況は芳しくない。あれが効くかわからないが試してみよう。

「白魔法、ケアルガ」
叢を白い光が包み傷を癒して行く。
「あなた回復も出来るのね」
「とりあえずこれで傷は大丈夫なはず。後は叢が目を覚ますのを待つしか…」
しばらく目を覚ます気配がない。早く目を覚ましてくれよ叢。
俺は叢が目を覚ますのを願った。

無限の可能性

叢が萃香に殴られてから早くも数日が経っていた。
少しおかしいと思ったのはここ数日の間に何度も宴会が開かれたのだ。まるで人が萃められているように。しかしそんなことがあっても叢は一向に目を覚ます気配が感じられない。このまま目を覚まさなかったら……。
俺はなにかを失ったような気持ちになっていた。フランもここ数日ずっと元気がない。紅魔館には不穏な空気が漂っていた。
「はぁ、このままじゃ埒が明かないな。仕方ない。とりあえず流鬼を呼んで話し合うしかないか」
俺はすぐに出かける準備を始める。そんなところにレミリアが部屋に来た。
「ねぇ…出かけるの？」
「ちょっとな。まぁ心配するな、叢は大丈夫だし、俺は流鬼のところへ行ってくるだけだからさ」
「私もついていく」
「わかった」

俺はレミリアと一緒に冥界へ向かった。
白玉楼につくと流鬼と妖夢が待っていた。
「ふたりともよく来たな、中へ入ってくれ」
「どうぞ」
「悪いんだが今はそんなことをしてる暇はないんだ。実は次の異変が動き始めてる」
「本当か⁉？じゃあ今すぐ解決に…」
「それは出来ない」
「なんでだよ」
「数日前に首謀者に会ってるんだ。で、その時に叢がやられた」
「なんだって⁉？」
「本当なんですか⁉？」
ふたりともかなり驚いていた。それもそうだよな。だって叢ものすごい強かったし。負けるなんて考えられないよな。いや、今はそれよりも早く二人を連れて行って先のことを考えなくちゃ。
「百聞は一見にしかずだ。紅魔館へ行くぞ」
「わかった」
「テレポ‼？」

魔法を唱えて紅魔館へ移動する。すぐに叢の寝ている部屋へ連れて行く。
「本当に叢が…」
「こんなボロボロになるなんて…」
「いったいどれだけの攻撃を受けたんだよ」
「一撃だ」
「え…」
二人は黙り込んでしまった。やはり状況が飲み込めないとこうなるよな。しばらく沈黙が続いた。すると急に叢が魘され始めた。
「私が本当の力ってのを見せてあげるよ」
俺の意識の中には萃香に殴られるシーンだけがリピートされる。どう足掻いても決して届かないであろうまさに月とすっぽんのようにはっきりとした力の差、まじまじと見せつけられた挙げ句の果てに喪失感をおぼえた。
「やめろ…やめろ…やめろぉ‼?」
無意識に言いながら勢いよく起き上がる。息は激しく切れ滝のように流れる汗。殴られたところからくる激しい痛み。今なにが起きているのかわからなくなっていた。
「はぁ……はぁ……はぁ……」

「叢大丈夫か？」
「しょーや…」
「翔哉さん」
「苦しくないか？叢」
　横を見るとみんながじっと俺を見ていた。
「みんな、どうしたんだ？そんな深刻な顔をしてちょっと意識を失ってただけだよ」
「ちょっとじゃないよしょーや、数日も目を覚まさなかったんだよ」
「面白くない冗談だなフラン」
「冗談とかじゃないよ。本当なの」
「…本当に言ってるのか？」
「うん」
　俺はいったい何をやってたんだろ、まさかあの鬼にやられてからずっと目を覚まさなかったのか？くそっ‼？次にあったら絶対ぶちのめす。
「行かなくちゃ…」
「おい、無茶するな」
「あの鬼をぶちのめす…」
「馬鹿言うな‼？たった一撃でこの有様だぞ‼？次にやり合ってみろ今度は確実に死ぬ

!!?」

「そんなことない!!? 絶対負けない!!?」

剣は珍しくきつく反対してきた。普段はこんながっつり否定するようなことしないのに。

「ひとつ言わせてもらうわ。お前を殴った後に萃香に言われたよ。さっき言ったことを取り消して欲しかったらして欲しかったら死に物狂いで特訓をして私と同等に戦えるまでに鍛え上げてこい。後仲間を連れてきてもいいって言ってたんだ」

「舐めやがって、絶対ぶち殺してやる」

「とにかく今は時間が惜しい。急いで鍛え上げるぞ。もちろん萃香と戦う時は3人だ。俺と流鬼と叢で行く。はっきり言えば人間が1人で鬼に勝てるわけない。なら三本の矢のようにまとめてかかればいいんだよ」

「そうだぜ。昔っから3人でいろいろ解決してきたじゃねぇか。今回も同じだろ」

そうか、そうだよな。別に異変解決に人数なんて関係ないし、ましてやあの鬼本人が言ってたんだから。

「そうだな…2人のお陰で頭が冷えたよ」

「じゃあ早速特訓始めようぜ」

こうして打倒萃香を目標にみんなで協力して地獄の特訓をすることに決まった。

特訓の内容としてはまずそれぞれの彼女に相手をしてもらうことにした。
俺はフラン、流鬼は妖夢、剣はレミリア、もちろんフラン達には本気で殺しに来るように言ってある。何故か、答えはひとつ相手は本気モードの鬼だ。生半可なフィジカルじゃ話にならない。だから極限まで追い込むようにするために殺気むき出しでやりあうように頼んだ。
もちろんフランとレミリアは昼間できないのを考えて冥界でやることに決まった。幽々子には後でしっかりお礼のご飯をご馳走することで承諾してもらった。
「じゃあ始めようか」
「本当にいいの?」
レミリアが俺たち3人に問いかけてきた。
「もちろん」
「当たり前さ」
「いいぜ」
「俺たちはみんな覚悟の上でやる。準備なら問題ない!!?」
「じゃあ…」
レミリアがそう言うと、

「行くよ‼?」
「行きます‼?」
「行くわよ‼?」
息を揃えて動き始めた。

レミリアとやり合うことになるとは正直気がひけるが、萃香と戦うにはこれしかない‼?
「最初から本気で行くわよ‼? 神槍スピア・ザ・グングニル‼?」
「本気じゃなくちゃ特訓にならないさ‼? 土符アースクエイク‼?」
俺はグングニルをアースクエイクにより防ぎつつも攻撃をする。レミリアは避けてから接近戦に持ち込んできた。
「はぁあああ‼?」
「もっとも最善の策はこれでしょ‼?」
地上に大きな魔法陣が展開する。レミリアは驚いて一瞬動きが止まった。だけど打つタイミングはまだここじゃない。もう少し、もう少しだ。
「この程度どうってことない‼?」
瞬間移動したかのように目の前にレミリアが現れた。

しまったまさかここで不意を突かれるとは、だがまだまだ‼?

「くっ‼?防符マルチウォール」

俺は目の前に壁を作り防ごうとするがレミリアは瞬間的に後ろに回り込み俺を鋭い爪で切り裂く勢いで腕を振り抜いた。

「ぐあっ‼?」

俺の受けた傷は意外にも深くかなり深傷を負った。

再び妖夢と一戦交えるのか。だけどそう簡単にはやられない。俺だって前の俺とは全く違うんだ。

「先手必勝‼?グラディウスボルト‼?」

俺は拳に電気を貯め一気に突き出す。突き出した拳にたまっていた電気はレーザーとなり一直線に妖夢に向かって放たれる。

妖夢はすぐに反応して左に避ける。しかし俺はそのまま手首を左に曲げるとレーザーも左に曲がり妖夢を追尾する。そしてレーザーは妖夢を呑み込んだ。

「ふう、とりあえず一撃か、まだまだ…」

「油断してますよ‼?」

妖夢の声が聞こえた瞬間に体を半身にするが右腕に激痛が走る。

「なっ!!?」

俺はその時すぐにわかった。目の前を飛ぶ俺の右腕、俺の体から離れて地面に落ちた。避けるのが遅かったのが原因で右腕を切り落とされた。

「フランやっぱりしょーやと戦えない!!?」

「何言ってんだよ、殺す気で来いよ!!?」

「だってそうしたら手加減できなくなっちゃう」

「何のための特訓だよ、死ぬくらいの努力がなくちゃ萃香には勝てないんだ!!?異変解決するためなんだ!!?いいからやれ!!?」

「ごめんねしょーや…」

するとフランの眼つきが一変する。その目はまさに真紅の目だ。少しでも油断したら確実に死ぬ、一瞬の迷いも許されない戦いを迫られていた。

「簡単に壊れないでよ?」

「そう簡単に壊れるかよ!!?」

「ふふふ、あはははは!!?禁忌フォーオブアカインド」

やっぱり来たか。完全にやる気になったな。

「はぁあああ!!?ダークエナジー!!?」

一瞬でエネルギー球を無数に作り出す。そしてそれを音速を超えるスピードで打ち出す。
「遅いね」
「なっ⁉？いつの間に…ぐふっ⁉？」
フォーオブアカインドで現れたフランの分身に後ろから蹴り飛ばされもう一人の分身に向かって飛んでいった。
まずい、このままじゃ完全にハメ技決められる。なんとかしないと…、痛みに支配された体を無理やり動かしてなんとかハメ技から抜け出したと思ったが現実はそんなに優しくはなかった。
「よくハメ技から抜け出せたね、でも逃がさないよ、レーヴァテイン⁉？」
こんなあっさりやられるんだな…
俺はそのまま意識を失った。

地獄の特訓初日、俺たちは3人に歯が全く立たずにいとも簡単にやられた。そして人間と妖怪達の本当の力の差というものを認めざるを得なかった。
すぐに治療してもらったが永琳にはこっ酷く叱られた。
「大馬鹿者⁉？生身の人間がどう足掻いてもあの3人が本気を出せばこんなことになる

なんてわかっていただろう!!?あの３人に限らず幻想郷で名の知れてる妖怪はみんなそうだ!!?本気を出せば滅せる奴だっている。そんなことをしたら自分たちもタダじゃ済まないからみんなある程度の加減ってものを知ってるんだ。分かったらもうこんなことはするな」

「待ってくれ…いくら妖怪が強くてもな…俺たち人間だって無限の可能性を秘めてるんだ。１００年も生きられない俺たちには今しかこの可能性に賭けるチャンスはない!!?だから頼む!!?これから先何回何十回何百回こんな傷を負ってもかけてみたいんだ!!?頼む!!?」

俺は痛みの残る体を動かし土下座をして永琳に頼み込んだ。

「俺からも頼む!!?」

「お願いだ永琳、俺たちに協力してくれ!!?」

流鬼と剣も土下座をして頼んでくれた。

「永琳、この３人の頼みを聞いてあげたらどう?」

「姫様…」

すると部屋に姫様と呼ばれる女性が現れた。彼女は俺たちの頼みを聞くように永琳を説得してくれた。

「あなたは?」

「私は蓬莱山輝夜よよろしくね」
「よろしく」
「ねぇ永琳私からも頼むわ。なんかこの子たちの話を聞いていて心にくるものがあったのだからお願い。この子たちに協力してあげて」
「…姫様もそう仰るのなら、わかったわ。あなたたちのその無限の可能性、信じるわよ」
「ありがとう!!?」
俺たちは永琳と姫様と呼ばれる彼女、蓬莱山輝夜に感謝した。
そして俺たちは再び地獄のような特訓に打ち込んだ。

地獄の特訓を始めてから早くも2ヶ月が経っていた。それぞれ見違えるようなフィジカルになり並大抵の攻撃なら食らっても全然大丈夫なまでに成長した。
「随分変わったんじゃないか?」
「前よりも充分強くなってるし」
「あとは3人でどれだけ連携できるかが勝敗を分けるな」
3人で話をしているとみんなが集まってきた。

「ねぇしょーやごめんね、あんなに傷つけちゃって…」
「気にすんなよフラン、フランのおかげでここまで来れたんだからさ」
　俺はフランの頭を撫でながら言った。
「流鬼哉さん…あのなんと言ったらいいのか…」
「なに、心配しなくても大丈夫さ。それに無理させて悪かったな」
　流鬼はそう言いながら妖夢をそっと抱きしめた。
「剣、無理だけはしないでね」
「大丈夫だ。それにしてもレミリアには苦労かけたな。わざわざ特訓にもつき合わせちゃったし。異変解決したらちゃんと苦労労うからもう少しだけ待っててくれ」
　剣はレミリアに宣言をして3人覚悟は決まった。
「さて、そろそろ行くか」
　俺たちは萃香のところへ向かうことにした。しかしここでひとつ問題が発生した。
「なぁ剣、萃香ってどこに居るの？」
「俺もそう思った」
「え？そんなの知るわけないだろ」
「居場所わからないんじゃ元も子もないじゃねぇか!!？」
　さっきの会話はどうなるんだよ全く、まぁいいさ。紫にでも頼むか。

「なぁ紫なら知ってるんじゃね？」
「あぁ確かにそうだな」
「呼んだかしら」
「うぉっ!!？いきなり来るなよ」
「マジびびったわ」
　笑いながら話していると剣が話を持ち出した。
「紫、単刀直入に言うわ。萃香のところへ連れて行ってくれ」
「もう準備はいいのかしら？」
「「当たり前!!？」」
　俺たち3人息ぴったりに言うと納得したのかスキマを開いた。
「彼女はこの先に居るわ。それとあの子は弾幕とか好まないからおそらく肉弾戦になるわ。それでもいいの？」
「あぁ、もちろんさっちも殺すくらいやらないといけないし」
「ならいいわ」
「ありがとう紫」
　そう言い残して俺たち3人はスキマの中へと入っていった。
　スキマを抜けると平野に出た。そして出てきたところから１０ｍほど離れたところ

に萃香が立っていた。
「この前の借りを返させてもらうぜ‼?」
「いいよ、その代わりこの前みたいに手加減とかしないよ」
「手加減なんか要らないよ」
「話もここまでだ。さぁやろうじゃないか‼?」
各自臨戦態勢に入る。そして今人間と鬼の戦争が始まる。

人の下剋上

まず動き出したのは萃香だ。地面を抉るその一歩は一瞬で俺たち三人との間合いを詰める。

しかし俺は暗黒を纏い萃香の攻撃を避けずに真っ向から殴りかかる。その時拳と拳がぶつかり合いあたりに衝撃波が飛ぶ。だがそんなことは今は関係ない。相手である萃香と全力でぶつかりあっているのだから。

ぶつかりあった拳は反発し互いに吹き飛び間合いが開く。

「なるほど、手加減はいらないと言うだけはあるね。あの日から見違えるほどに強くなっている」

「当たり前だ。あんたを倒すために俺たち三人は死に物狂いで特訓をしたんだ。生半可な攻撃なんかじゃ俺たちはやられねぇ!!」

「今度はこっちから行くぜ!!」

流鬼が仕掛ける。それに合わせて剣も魔法を唱える。

電気を帯びた流鬼のスピードは音速を遥かに超えるスピードで萃香の後ろへ回り込む。一方で剣はクエイクを使い萃香の足元を崩しにかかる。

二人に負けじと俺も技を使う。
「波動よ…闇符ダークフレイム」
「後ろもらった！迅速超速雷王拳」
先に流鬼の超速雷王拳がヒットして萃香は少しだがバランスを崩す。そこに追い討ちをかけるようにクエイクが地面を割り萃香は宙に投げ出される。その萃香にダークフレイムが命中した。
「少しは効いただろ」
「なかなかいい連携だね、符の壱投擲の天岩戸」
萃香の声が聞こえた次の瞬間、俺は数十メートルほど吹き飛ばされた、大きな岩と共に。しばらく地面を転がり止まったところでゆっくりと立ち上がる。
やっぱり強いな、てか岩飛ばしてくるとかどんだけ腕力あんだよ！
「ならこいつで消しさってやる。滅符ファイナルフレア」
剣が唱えた直後有無を言わさずに萃香の真下の地面が爆発する。砂煙が舞い上がり視界が悪くなった。
少しずつ見えるようになってきて萃香のたっていたところを見ると大きなクレーターが出来ていた。萃香の姿はそこにはなかった。
「なかなかの高火力だったな、あれなら流石の萃香でもだいぶ効いただろうな」

「符の弐坤軸の大鬼」
「しぶいといねー」
　そう思っていると上から巨大化した萃香が勢い良く落ちてきた。
「巨大化!?　剣!!　逃げろ!!」
「間に合わねぇ、ならば護符マルチウォール」
　萃香はそのまま剣を踏みつぶした。
　足を上げると剣が倒れていた。
「くっ、化け物かよ……威力が半端じゃないぞ……」
「にゃっははは!!まだまだ甘いよ!!」
「ふん、大きい分攻撃も当てやすいってもんだ!雷符グラビティサンダー!」
「うぐっ、この雷結構威力あるね……でも負けるわけにはいかない!!」
　空中にいた流鬼は裏拳を直に受けて地面に激しく激突した。
「ぐはっ!!」
「まだまだ!!能力全開だー!!」
　すべての力を振り絞り暗黒のオーラを全身に纏う。萃香は驚いた表情をしている。
「まずは一撃!!」
　大きくなった萃香の腹めがけて一瞬で間合いを詰め殴りかかる。攻撃は避けられる

事無く吸い込まれるように腹にくい込む。
「うっ!!ぐっ!!」
この戦いで萃香は初めて膝をついた。巨大化していた体は元の大きさに戻っていった。
「前の一撃とは比べ物にならないほどの威力だね。かなり効いたよ。世界は広い、鬼に匹敵するくらいの人間だっていることを知った。この数百年で初めて見る最強に最も近い人間がまさか幻想郷の外から来たあんたたちだったとは。驚きを隠せないよ」
「そりゃあそうさ!なんせ人間にはあんたたち妖怪や鬼にはない無限の可能性ってのがあるんだから。短い人生の中でその可能性に挑戦させてくれた萃香には感謝してる。だからこそここで決着を付ける!」
「いいよ、お互いに恨みっ子なし、正真正銘最後の攻撃だ!」
「行くぞ!これが俺たち三人の無限の可能性だ!勝符インフィニティ・ライトニングボルト!!」
「これで決める!!百万鬼夜行!!」
二つの大きな力がぶつかり合う。
しばらく攻撃は膠着状態に陥る。しかし、勝負が決まったのは一瞬だった。
俺たちの攻撃が萃香の攻撃を飲み込んで萃香を包み込んだ。

満月の夜の平野に一筋の光が天に登っていった。
それが弾けて消えると同時に決着がついた。
「あーあ、負けちゃったよ」
「萃香、ひとつ聞きたいことがあるんだけど」
「なんだい？」
「なんで最後力を抜いたんだ？」
「あんた、よくわかったね」
「だってあのままずっと膠着状態が続いていたら確実に俺ら負けてただろうし」
「そうかな、私には膠着状態が続いててもこの結果は変わらなかったと思うよ」
俺ら三人は驚いた。なぜそんなことがわかるのかと。
「なんでそう思うんだ？」
「それはね、あんたたち三人の気持ちの強さがあるから。いくら私の力とあんたたちの力の差はあっても気持ちの強さに差があれば力の差なんていくらでもひっくり返すことなんて簡単なのさ。それがわかったから私は負けを認めたんだ」
笑いながら萃香は語ったが、その目はどこか寂しげな感じがした。
俺たち三人は今回の異変を通して勝負において最も重要なものを知ることができた。
気持ちの強さ、前々から感じてはいたが本当に強くなれると証明できたのは萃香のお

かげだ。
「なぁ萃香、今度宴会しないか？」
「宴会!?したい!!」
「じゃあ霊夢に話しておくから日程決まるまで待ってて」
「わかった、私は紫に、頼めばいつでも私のところに来れるように言っておくから日程決まったら紫に教えてあげて」
「了解、それじゃあ楽しみにしてるぜ」
こうして萃香との決着がつき、異変は無事解決した。
そして後日、博麗神社で大宴会が開かれ夜どうし酒を飲み続けたのだった。

二日酔いトリオ

博麗神社での宴会も終わり萃香はとても笑顔だった。ただ…俺たちは沢山飲まされて今絶賛頭痛中だ。
「うぐぅ…頭痛い…」
「マジ…痛すぎ…」
「こんなに酷い頭痛初めてだぞ…」
それぞれ恋人の三人に膝枕されながら休んでいる。それにしてもやっぱ鬼ってデタラメだ！岩投げてくるし、大きくなるし、酒飲みまくるし俺たち人間からしたらまずあり得ないことを平然とやってのけるからな。マジで驚いた。
「なかなか早いギブアップだったね三人とも」
「萃香が飲みすぎなんだよ。俺たち人間なんだからお前と同じ量なんか飲めるわけないだろ！」
俺は少しきつく言うと笑って流された。
「にゃははは！ごめんごめん、次からはもう少し手加減するようにするよ」
「そうしてもらえれば一番いいけど、次には忘れてそうだよな」

流鬼の言葉に反応した萃香はキリッとした目つきに変わった。
「ひとつ覚えておきな。鬼は絶対に嘘をついたり約束を破ったりしない！それは絶対だ！」
萃香の目には何一つ嘘を言っているようには見えなかった。
確かに考えてみればそうだな。戦えるようになるまで待つって言われて何ヶ月も修行やってたけどずーっと何も言わずに待っていたんだもんな。嘘をつくようには見えない。
「わかった。じゃあまた今度みんなで宴会するか」
「ほんとに!?絶対だよ?」
「あぁ、必ずね」
俺たちは萃香と宴会の約束をした。まだいつやるかとかは決めてないけどな。
「三人とも宴会開いてくれてありがとね、人数あまり集まらなかったけどすごく楽しかったよ！」
「それは良かったよ」
「それじゃ私はそろそろ行くよ」
「また今度な」
俺たちは萃香に手を振って見送った。

宴会も完全にお開きになった後俺たち三人は彼女たちの肩を借りながらそれぞれの帰る場所へ帰っていった。

ここは俺の部屋、フランと二人で話をしていた。

「楽しい宴会だったね！」

「そうだな、後はこの二日酔いさえなければ最高の幕切れだったんだけどな・・・」

するとフランは何かを思ったのか部屋を出ていった。

しばらく横になっているとフランが戻ってきた。その手には水の入ったコップを持っていた。

「はいしょーや、お水だよ」

「あぁ、悪いなフラン」

俺は体を起こしてフランの持ってきてくれた水を一気に飲み干した。

「ゴクッ・・・ゴクッ・・・ゴクッ・・・ぷはぁ！少しは楽になったかな」

「なら良かった！後はゆっくり横になっててね」

「わかったよ」

フランに言われたので再び横になって少し眠ることにした。

「気持ち悪い・・・」
「大丈夫ですか流鬼哉さん」
「妖夢、水飲みたい」
「今持ってきますね」
妖夢は水を汲みに台所へ向かった。そのあいだに俺はなんとか自力で部屋に戻った。
「それにしても二日酔いって辛いな・・・」
「流鬼哉さん、お水持ってきましたよ」
「ありがとう」
俺は妖夢の持ってきた水をゆっくり飲んだ。体に染み込むような感覚が感じられてなんだか気持ちがいい。
不思議な感覚を感じながらしばらく起きていたが妖夢が気をきかせて布団を用意してくれたので少し休むことにした。
「レミリア、ちょっと抱きしめていい?」
「いいわよ、ほらおいで」
俺はレミリアを優しく抱きしめた。軽く髪を撫でるとレミリアの髪から花の香りがした。とても心地が良くなるようだ。

「はぁ、やっぱりこれが一番楽になれる」
「楽になれるのならいいわ。それにしても貴方達三人は本当にすごいわね。鬼と言う種族の壁を超えて対等に戦えるんだから」
「まぁそれはあの二人もいてこその結果だろう。誰か一人欠けていただけで勝てなかっただろうな」
「まぁなにはともあれお疲れ様」
レミリアは苦労を労ってくれるように俺の頬にキスをした。
しばらく俺はレミリアを抱きしめたままでいた。

宴会から数日がたち俺たちはそれぞれ二日酔いも治りみんなで集まっていた。
「今日はどうする？」
「あー見つけましたよ！」
三人で何をしようか考えていると空から声が聞こえた。
声の主であろう少女は目の前に降り立つ。
「だれだ？」
「君はブン屋の文ちゃんだな」
「やはり私の名前も分かるんですね」

「そりゃそうさ脚色に妄想がたくさん書いてあってまともなことを書いてない文々。新聞を発行してることも知ってるんだから」
「失礼ですねー」
「とりあえずそんなことはいいから名前教えてよ」
「そんなことって・・・まぁいいです。私は清く正しい幻想郷の伝統ブン屋射命丸文です。どうぞよろしくお願いします」
「俺は叢雲翔哉だ」
「水無月流鬼哉だぜ」
「不動剣だよ」
「それでは自己紹介も終わりましたのでこれから取材に移りたいと思います」
「なぁ、勝手に話進めるなよ」
「取材はダメなんですか?」
「いやいいけど」
「いいんだ」
　なんか変なやりとりもあったけどまぁ取材受けてくれって言うんなら別にいいけどどっから情報行くんだろうな。この世界って連絡手段は確か手紙だろいくら異変解決したとはいえ情報はそんなに広くなるはずないけどなぁ。今はどうでもいいか。

俺たちは文の取材を受けることにした。